

ORIGAMI

TANTEIDAN

折紙探偵団

M A G A Z I N E

クローズアップ Close-up

第27回折紙探偵団コンベンション報告

Reports of the 27th Origami Tanteidan Convention

西川誠司

Nishikawa Seiji

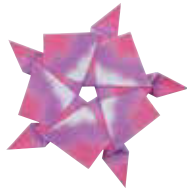
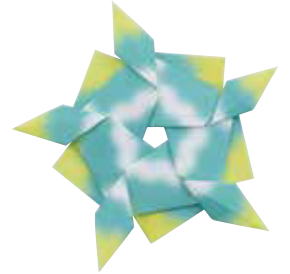
折り図 Diagrams

トムソンガゼル

Thomson's Gazelle

勝田恭平

Katsuta Kyohei



展開図折りに挑戦! Crease Pattern Challenge!

「つままれにゃんこ」萩原 元

Naughty Cat: Hagiwara Gen

おりがみ我楽多市 Origami Odds and Ends

「ハタタテダイ」稲吉秀尚

Pennant Coralfish: Inayoshi Hidehisa

ユニット折り紙カルテット Modular Origami Quartette

「星屑」「裏ヒトデ」布施知子

Stardust, Reversed Starfish: Fuse Tomoko

通巻 197 号

日本折紙学会 (JOAS) の理念

The Purpose of Japan Origami Academic Society

第一章 名称と目的

第一条 会の名称

1. 本会の名称は日本折紙学会とする。
2. 本会の英語での名称は、Japan Origami Academic Societyとする。
3. 本会の略称は、JOASとする。

第二条 会の目的

1. 本会は、折り紙の専門研究と折り紙の普及の促進、ならびに、それらを通しての広く国内、外の折り紙愛好家との交流の促進を目的とする。
2. 第一項の折り紙の専門研究とは、折り紙の創作、折り紙の創作技術の研究、折り紙に関する批評・評論、数学研究、教育研究、歴史・書誌研究、知的財産権等の研究、工学・商業デザインの研究等を意味する。
3. 第一項の折り紙の普及とは、折り紙の社会的認知度の向上活動、折り紙愛好者層の拡大活動、折り紙に関する人材の育成と発掘等を意味する。

規約第1章より抜粋

Chapter 1: Name and Purpose

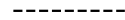
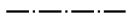
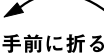









Article 1: Name

1. This society is to be called Nihon Origami Gakkai in Japanese.
2. This society is to be called Japan Origami Academic Society in English.
3. The abbreviated name of this society is JOAS.

Article 2: Purpose

1. The purpose of JOAS is to promote studies of origami, diffusion of origami, and both domestic and international association of all origami-lovers.
2. The studies of origami mentioned above includes designing, designing techniques, criticism, mathematical studies, educational studies, history, bibliography, studies of the intellectual property rights, studies of industrial and commercial design, and so on.
3. The diffusion of origami mentioned above includes widening appreciation of origami, expansion of the community of origami-lovers, scouting and rearing the origami talent, and so on.

● 折り方の約束記号 SYMBOLS FOR FOLDING

 谷折り線 Line indicating valley fold	 山折り線 Line indicating mountain fold	 手前に折る Fold paper forwards	 後ろへ折る Fold paper backwards	 折り筋をつける Making a crease line	 段折り Pleat fold	
 裏返す Turn paper over	 引き出す Pull out	 図の見る位置が変わる Rotation	 図が大きくなる A magnified view	 見えないところ A hidden line	 押す、押しつぶす Push paper in	 切る Cut

トムソングゼル(P.26)

創作: 勝田恭平

Thomson's Gazelle (P.26)

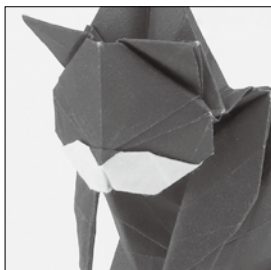
by Katsuta Kyohei

■色分けが綺麗だなあって、眺めていただけですよ。ガゼルさんかっこいいなあって、お星さまが綺麗だなんて。ホントですって、食べませんって、信じてくださいよ。あう、ちょっと首優しく持ってくださいよ。

他表紙掲載作品「星屑」裏ヒトデ 創作: 布施知子、「ハタタテダイ」創作: 稲吉秀尚、「つままれにゃんこ」創作: 萩原 元

(解説: 西川誠司) Comments: Nishikawa Seiji

No. **197**



Naughty Cat: Hagiwara Gen

クローズアップ / Close-up

**P.13 第27回折紙探偵団
コンベンション報告**

Reports of the 27th Origami
Tanteidan Convention

西川誠司
Nishikawa Seiji

折り図 / Diagrams and Crease Pattern

P.26 トムソンガゼル

Thomson's Gazelle

勝田恭平
Katsuta Kyohei



**P.38 展開図折りに挑戦!
Crease Pattern Challenge!**

つままれにゃんこ

Naughty Cat
萩原 元
Hagiwara Gen

カラーページ / Color

**P.20 オリガミ・フォトギャラリー
Origami Photo Gallery**

今号の折り図・展開図掲載作品より
Models Based on Diagrams and Crease
Patterns of This Issue

解説・西川誠司
Comments: Nishikawa Seiji

折り図 / Thematic Series with Diagrams

P.4 ユニット折り紙カルテット

Modular Origami Quartette

星屑・裏ヒトデ

Stardust, Reversed Starfish

布施知子
Fuse Tomoko

P.8 おりがみ我楽多市

Origami Odds and Ends

ハタタテダイ

Pennant Coralfish

やまぐち真
Yamaguchi Makoto

読み物 / Articles

P.16 折紙図書館の本棚から

From the Bookshelves of the JOAS Library

『吉澤章:日本で最も偉大な折り紙の巨匠』

“AKIRA YOSHIZAWA: Japan's Greatest Origami Master”

松浦英子
Matsuura Eiko

P.18 ぼくらは折紙探偵団

Here We Are, THE ORRRIGAMI TANTEIDAN

折り紙に逢える宿

Inns Where You Can Meet Origami

前川 淳
Maekawa Jun

P.39 ペーパーフォルダーの横顔

Paper Folders on File

袋井一樹

Fukuroi Kazuki

コラム / Columns

P.7 折り紙の周辺

Origami and Its Neighbors

布施知子
Fuse Tomoko

P.36 おりすじ

Orisuzi ("Fold-Creases")

栗林美知子
Kuribayashi Michiko

P.37 折紙三昧

Origami-Zanmai (This Origami and That)

西川誠司
Nishikawa Seiji

情報 / Information

P.40 つまみおり Rabbit Ear

ユニット 折り紙 カルテット 四重奏

星屑・裏ヒトデ

Stardust, Reversed Starfish

ユニットは4回折って完成します。とても簡単な可愛らしい星です。

表と裏はありません。好きな方から見てください。

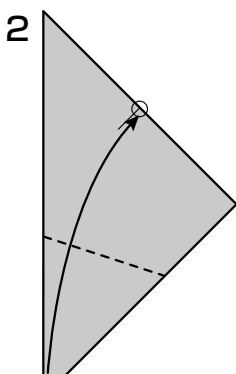
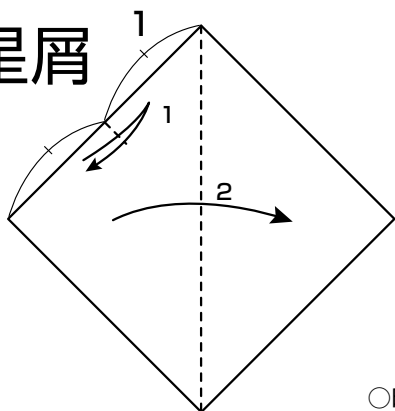


布施知子

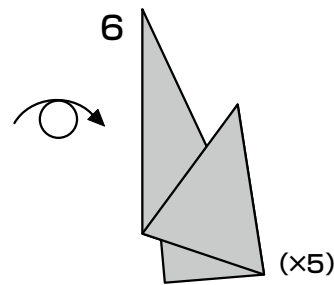
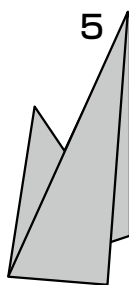
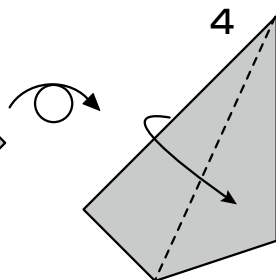
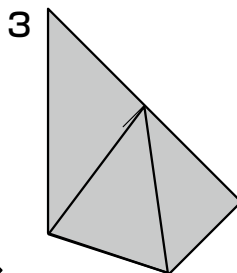
Fuse Tomoko

用紙:7.5×7.5cmが基準

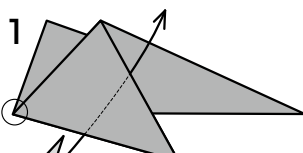
星屑



○印を
合わせて折る

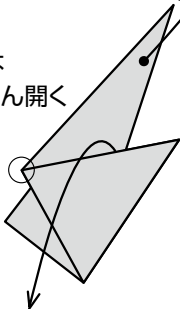


【組み方】



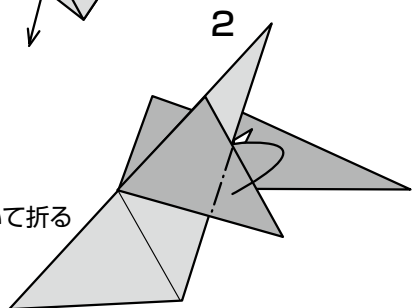
片方は
いったん開く

○印を合わせる

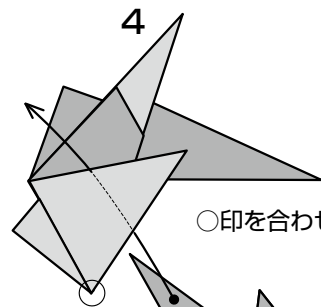


2

巻いて折る

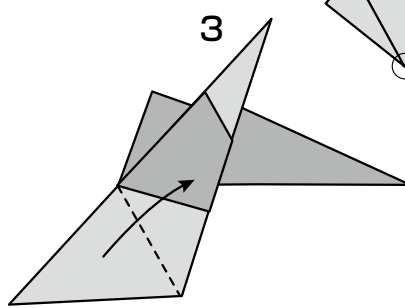


3



○印を合わせる

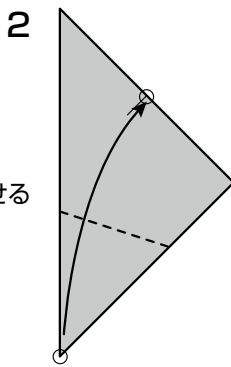
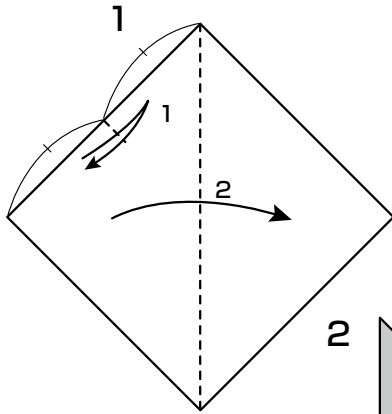
4



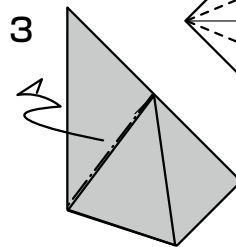
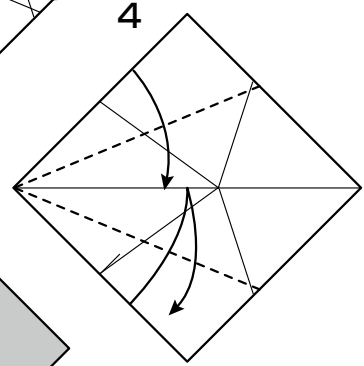
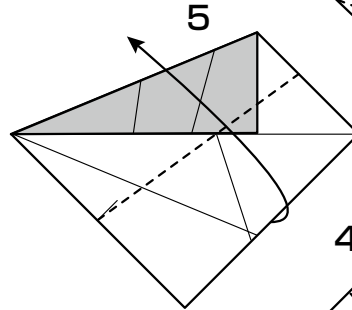
裏ヒトデ

用紙:7.5×7.5cmが基準

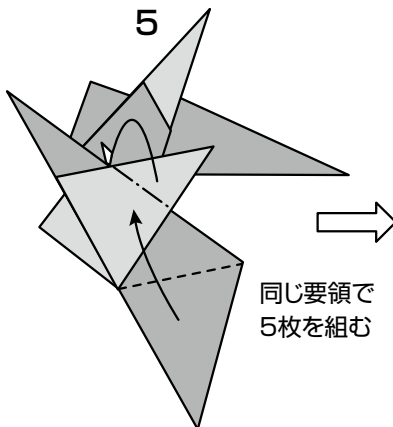
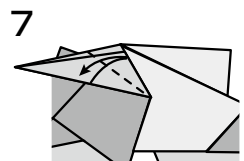
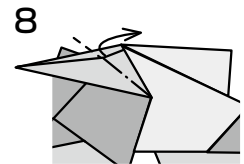
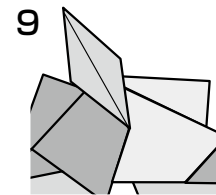
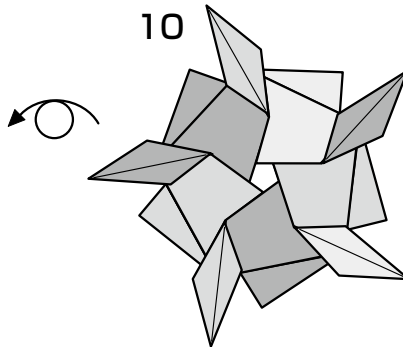
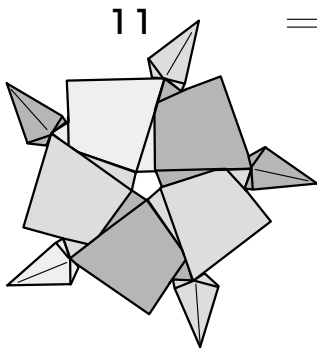
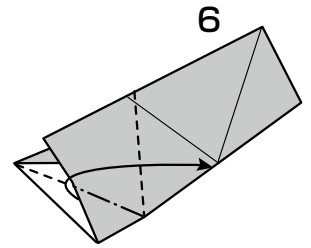
片側はシンプルな星です。
この星も表と裏はありません。



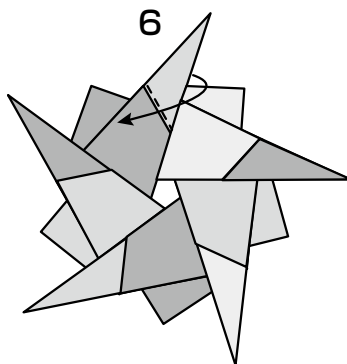
○印を合わせる

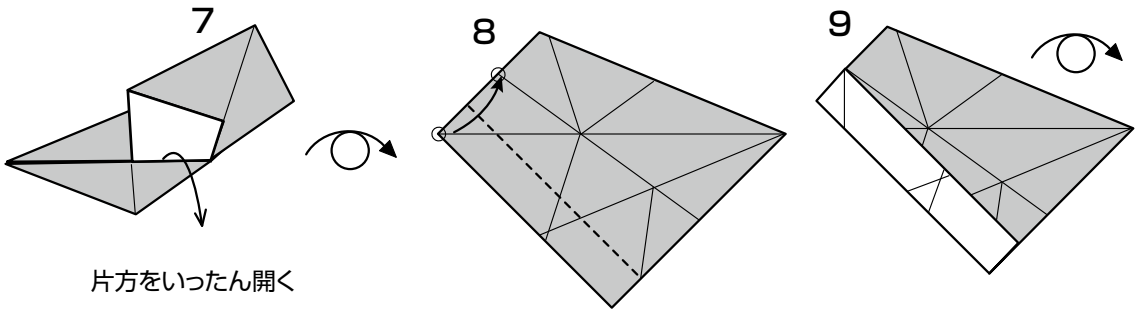


折り線をつけたら開く



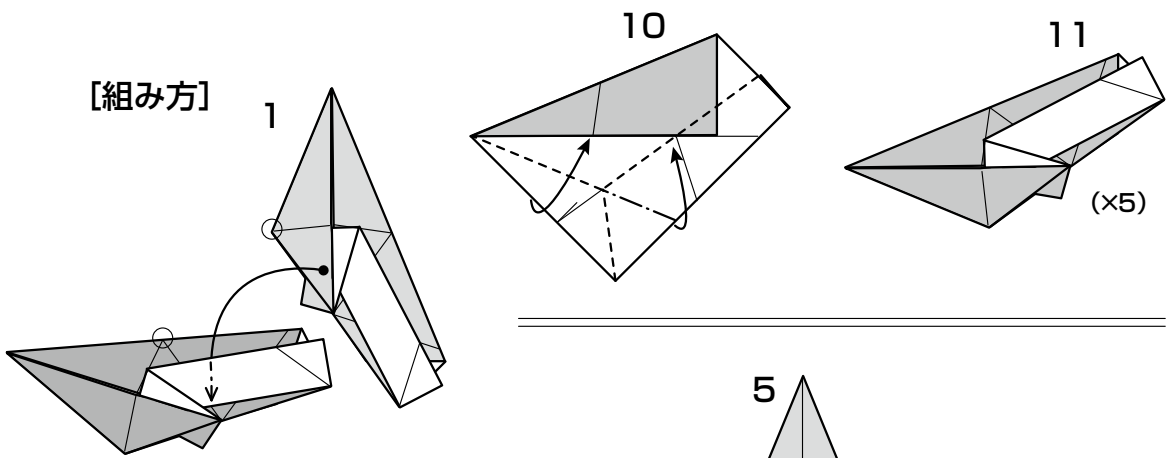
同じ要領で
5枚を組む



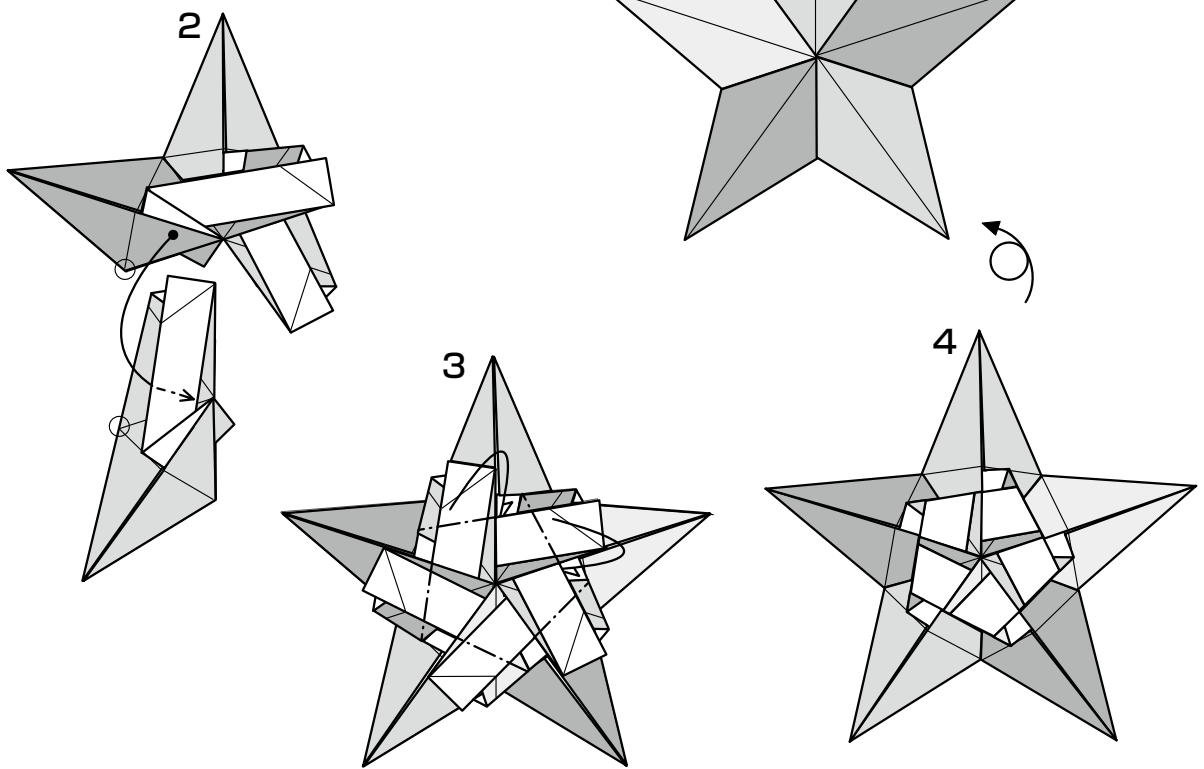


片方をいったん開く

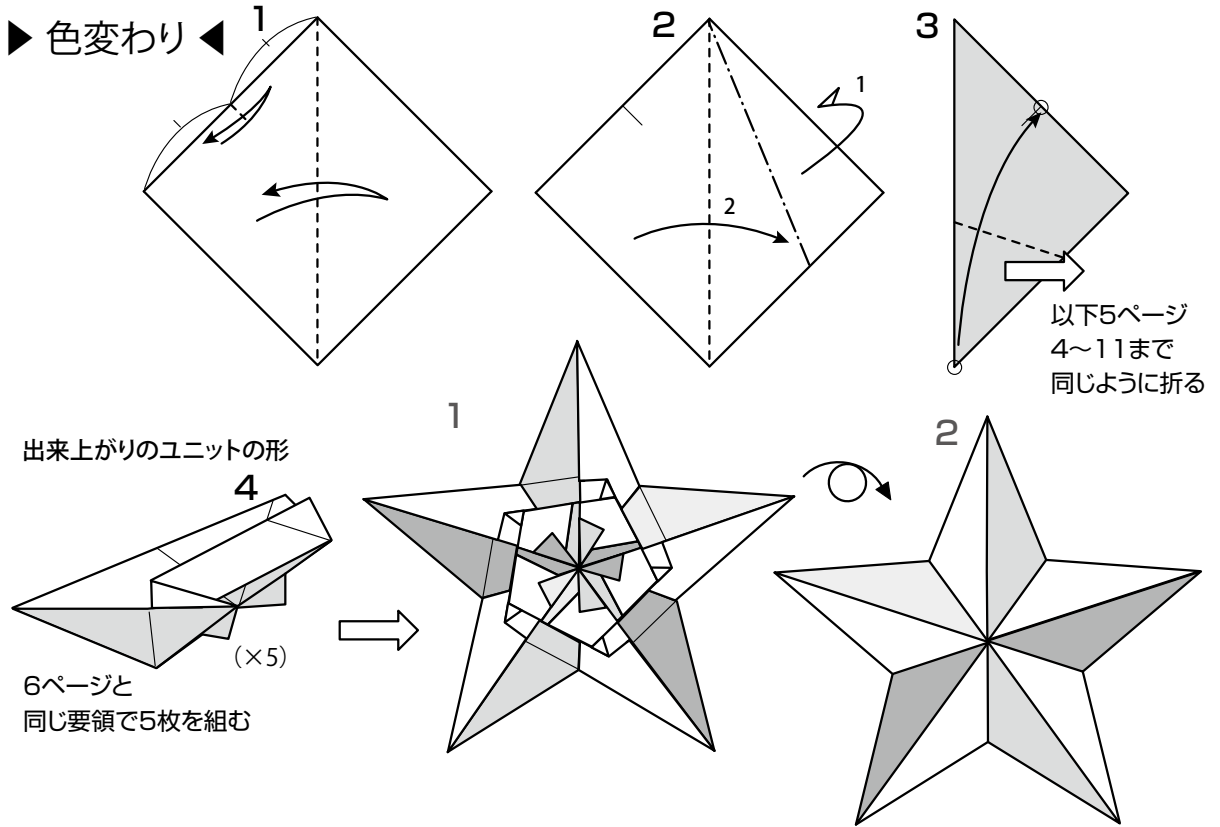
[組み方]



○印を合わせて差し込む



先を折って留める



折り紙の
周辺

布施知子 Fuse Tomoko

第116回

何度も読む

Re-reading Many Times

Origami and
Its Neighbors

私が生まれたのは新潟県長岡市の与板町という、大工用の打刃物で有名なところだ。名工も数人いらっしゃる。生業が鍛冶屋という同級生もたくさんいた。町のあちこちに鍛冶場があり、早朝から槌音が響いていた。現在は大方が廃業したり、規模を小さくしている。

母親の実家は野鍛冶『又助』で、主に鎌、鍬、包丁などを作っていた。『又助』には住み込みの弟子が数人いていつも賑やかだった。しかし

数十年前に廃業して、今は住宅も鍛冶場も更地になっている。

二代前の私の祖父にあたる人は、息子に後を譲って引退してからは、もっぱら読書を楽しんでいた。吉川英治著「徳川家康」。全何巻かを買い込み、繰り返し巻き返し読んでいた。廊下の藤椅子に陣取り鼻メガネで。その姿を見て、みんなは「じいちゃんがまた同じ本を読んでいる」と笑ったが、この頃の私はどうだ。じいちゃんそっくりになっている。数年前までは図書館に通い、家にはいつも図書館の本があった。ところがどうだ、今は多くはない蔵書から気に入ったものを、順に繰り返し読んでいる。これが飽きない。読み飛ばしていたところがあったり、ああ、昔はここで感動したな、と思ったり。まあときには図書館に行って新しい本を借りたりはしていますが。

折り紙で、何度も折りたくなる作品

とはどんなものだろう。何度折っても感動がある作品。何度折っても微笑む作品。

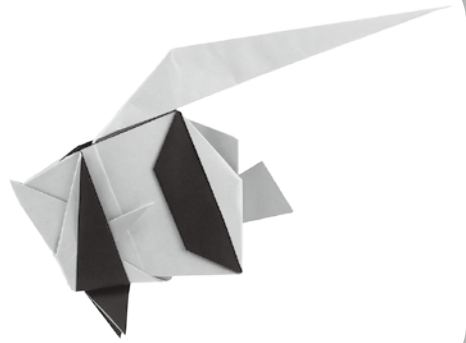
この頃はインスタレーションに力を注いでいるので、折ることが大難儀なものも多く、同じものをもう一度折るなど考えが及ばない。そんな時に、街中や駅などで可愛くきれいに飾られた折り紙作品を見ると微笑みが出て、これを作った人の楽しい時間を想像する。折って微笑み合うことは折り紙の原点だと思うが、今の私の立ち位置はそこからずれてきている。でも、よしとしよう。同じ本を繰り返し読むことも、それが老化現象だとしても、よしとしよう。

夜になると、あんなに鳴いていたシカに代わって、冷気できりりと引き締まった星空の下、毎晩キツネが鳴いている。からだ全体を使った大きな高い声だ。

第116回 **ハタタテダイ** Pennant Coralfish

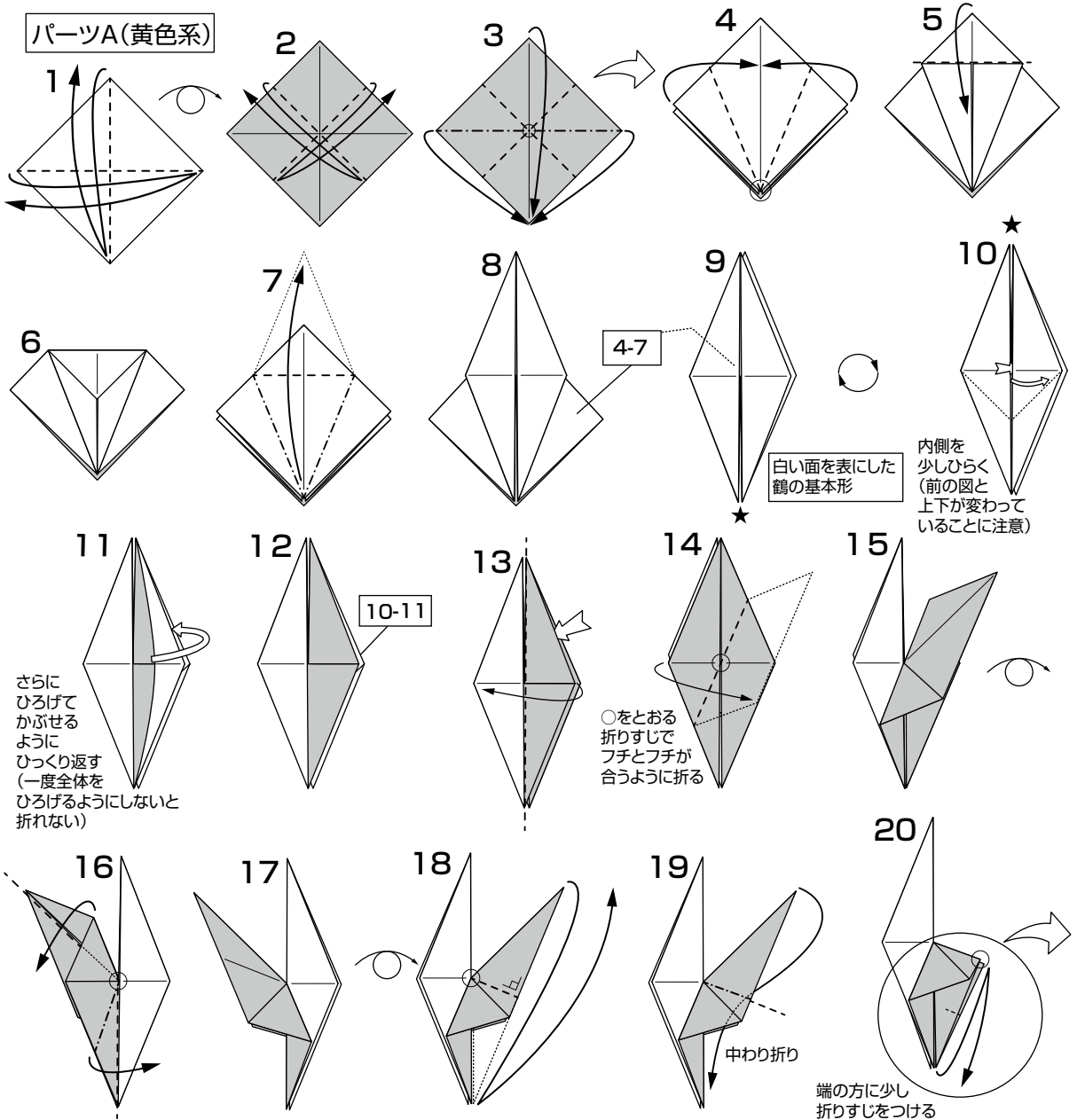
創作・折り図: 稲吉秀尚

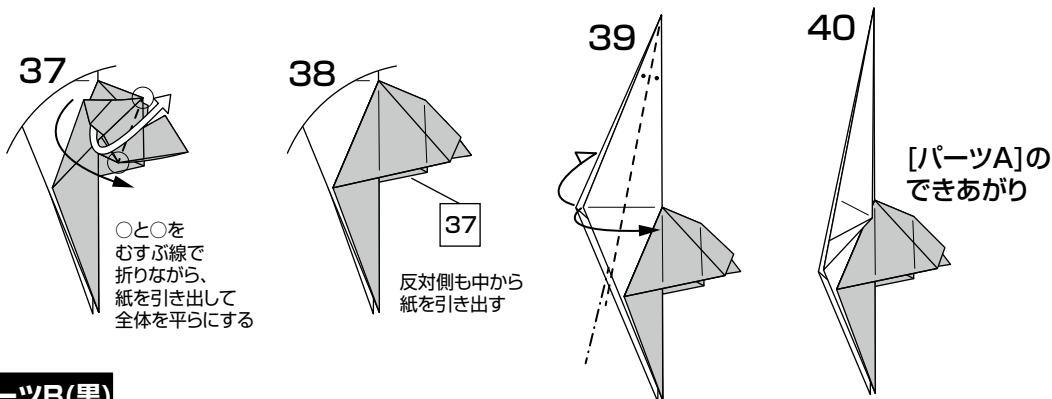
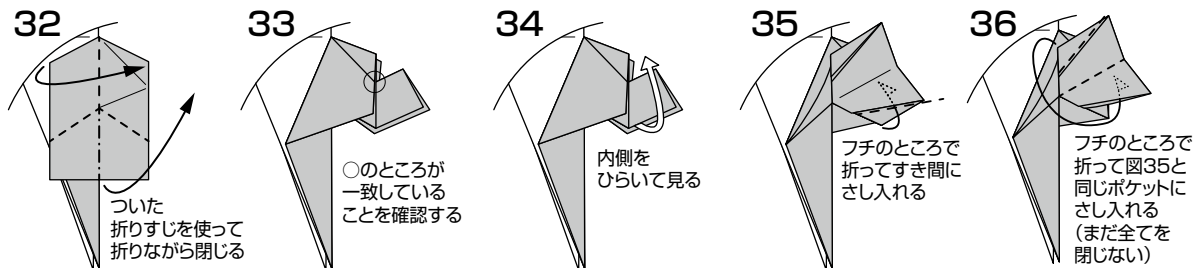
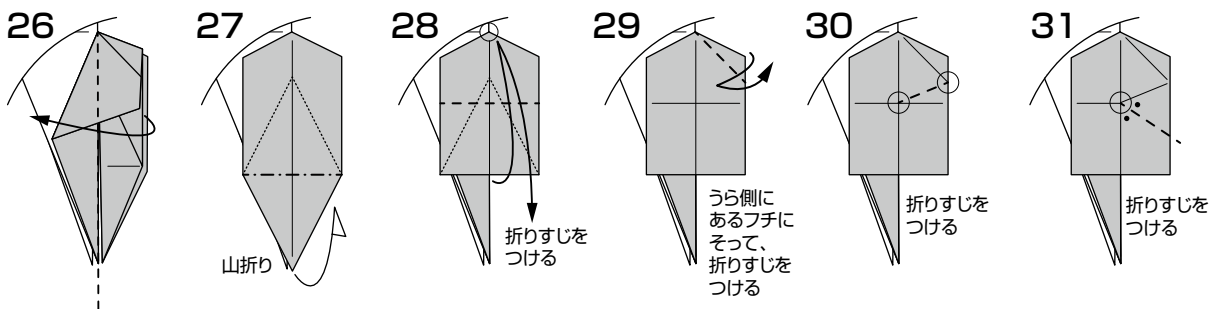
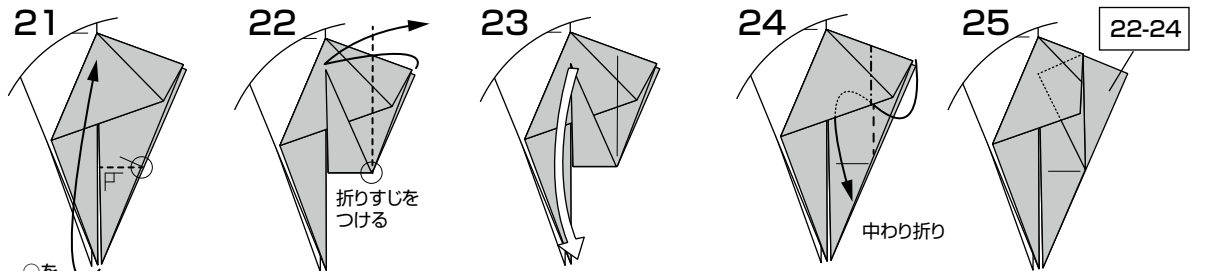
Model & Diagrams by Inayoshi Hidehisa



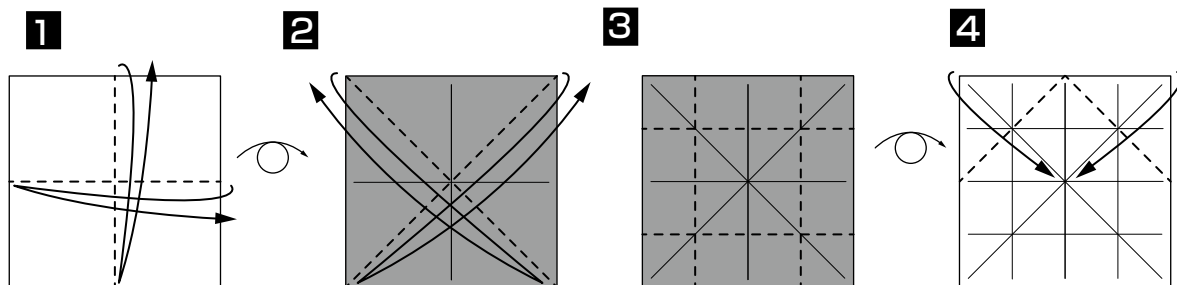
黄色系1枚(山吹色がおすすめ)と、黒色1枚を使います。
おりがみ用紙を使う場合、15cmだと厚みが出る部分がやや難しいので
24cm以上だと折りやすいでしょう。

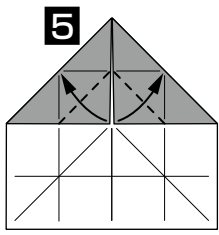
パーツA(黄色系)



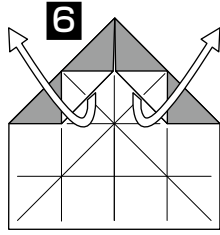


パーツB(黒)

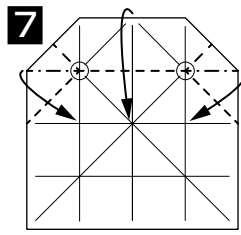




5

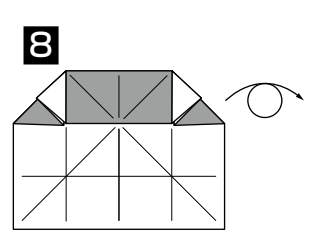


6

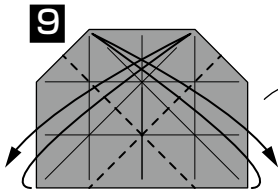


7

ついている折りすじを使って折りたたむ

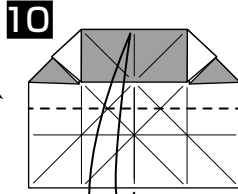


8



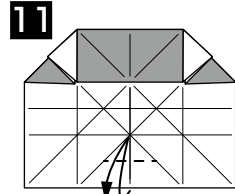
9

折りすじをつける(2か所)



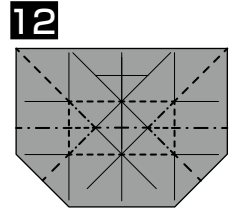
10

折りすじをつける



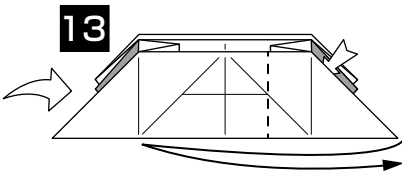
11

折りすじをつける(一部)



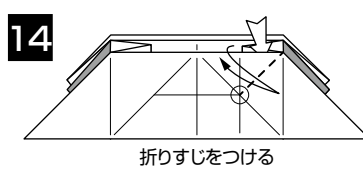
12

これまでについた折りすじを使って折りたたむ



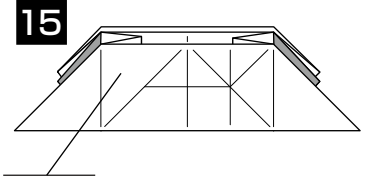
13

折りすじをつける



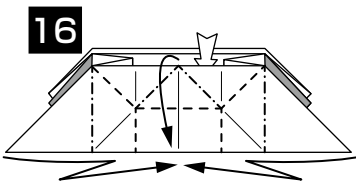
14

折りすじをつける



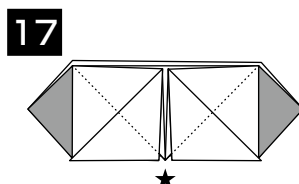
15

13-14



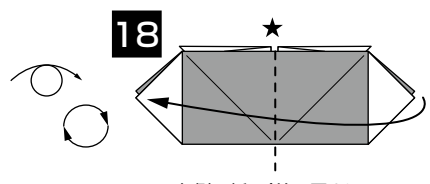
16

ついた折りすじを使って折りたたむ



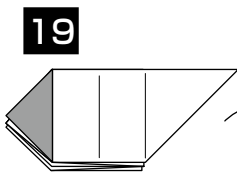
17

★

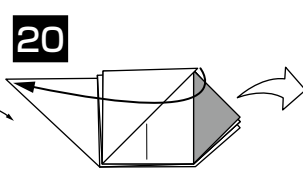


18

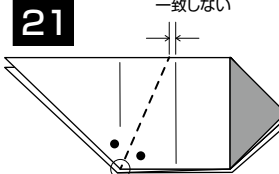
左側へ折る(前の図より、上下が変わっていることに注意)



19

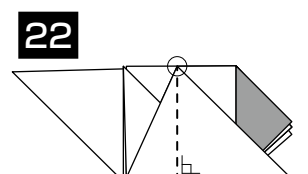


20



21

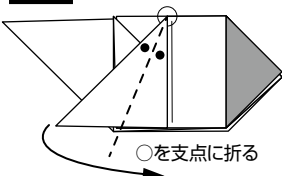
一致しない
○を支点に折る
ついている折りすじとは
一致しない



22

○を支点に折る

23



○を支点に折る

24

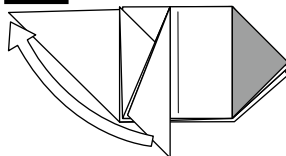
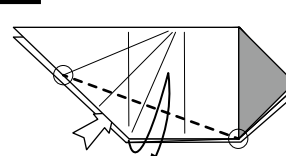


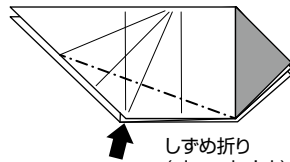
図20までもどす

25



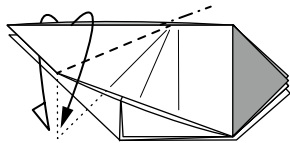
○と○をむすぶ線で
折りすじをつける

26



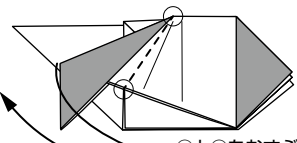
しずめ折り
(closed sink)

27



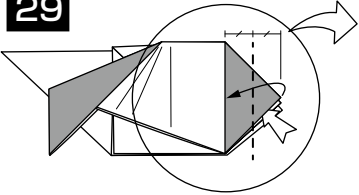
ついている折りすじで
かぶせ折り

28



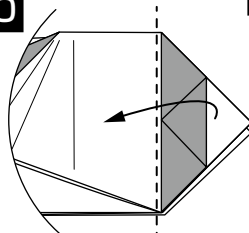
○と○をむすぶ線で
折りすじをつける

29

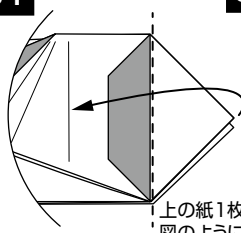


上の紙1枚を図のように折る

30

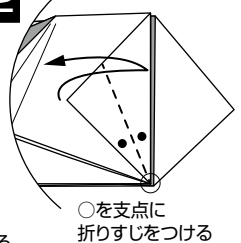


31



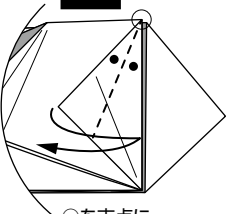
上の紙1枚を
図のように折る

32



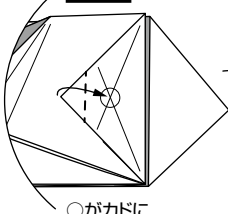
○を支点に
折りすじをつける

33



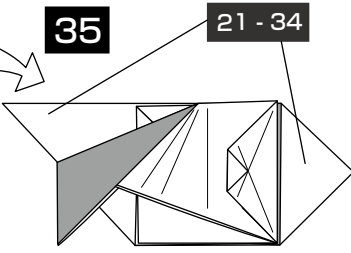
○を支点に
折りすじをつける

34



○がカドに
合うように折る

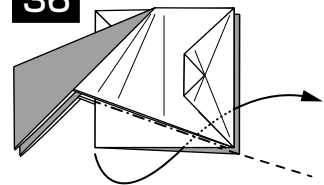
35



反対側も同様に折る

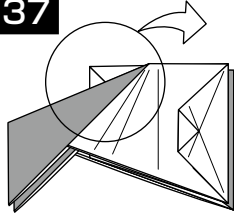
21 - 34

36

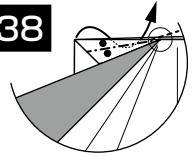


フチのところで中わり折り

37

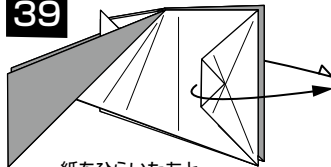


38



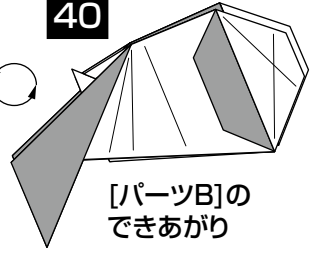
○を支点にして、角度を
2等分するように中わり折り

39



紙をひらいたあと
少しかたむける

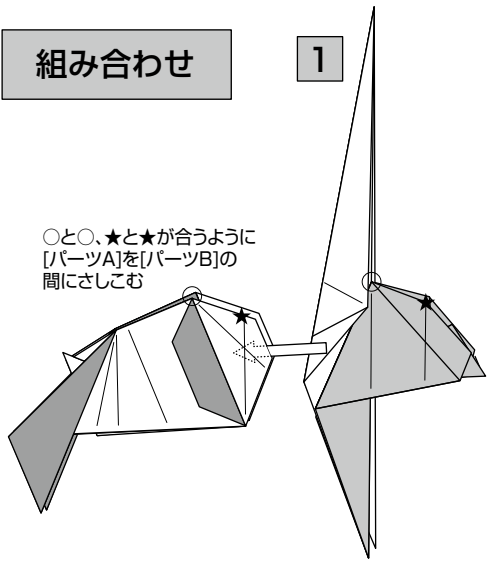
40



[パーツB]の
できあがり

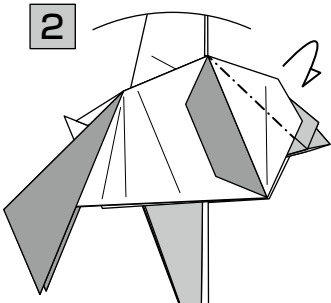
組み合わせ

1



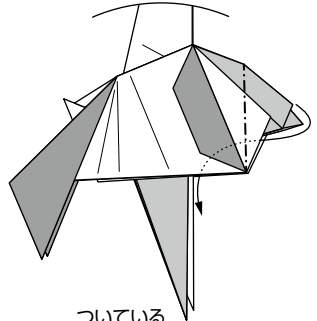
○と○、★と★が合うように
[パーツA]を[パーツB]の
間にさしこむ

2

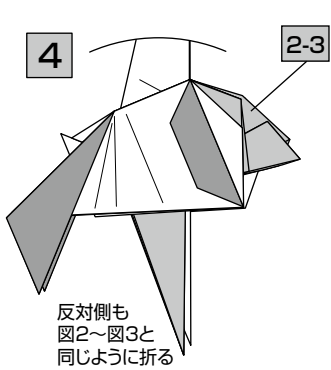


ついている
折りすじのところまで折って
ポケットになっているところに
入れる

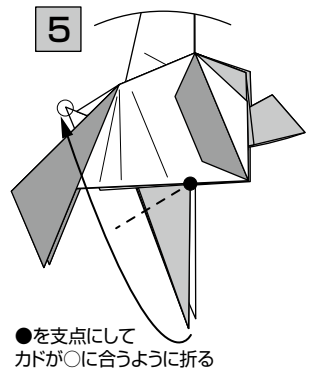
3



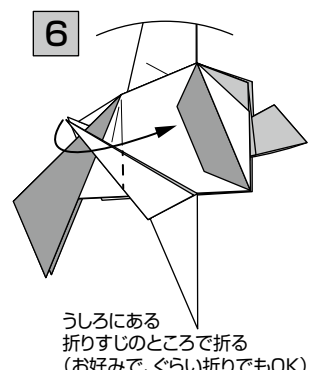
ついている
折りすじを使って
まとめて中わり折り



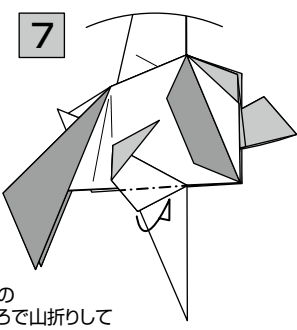
反対側も
図2~図3と
同じように折る



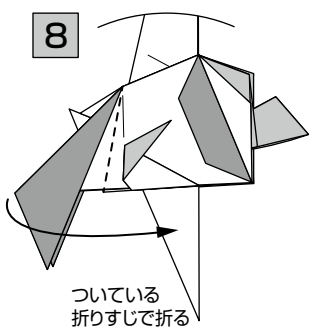
●を支点にして
カドが○に合うように折る



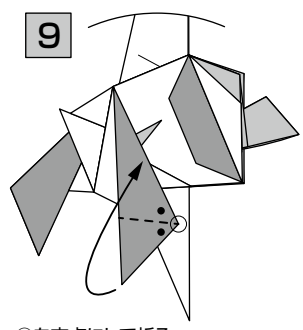
うしろにある
折りすじのところで折る
(お好みで、ぐらい折りでもOK)



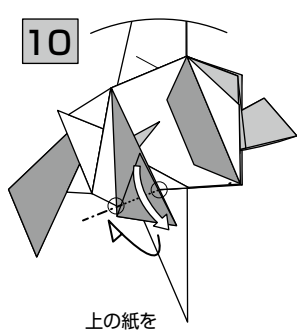
フチの
ところで山折りして
内側にさしこむ



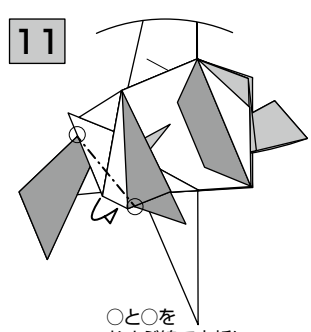
ついている
折りすじで折る



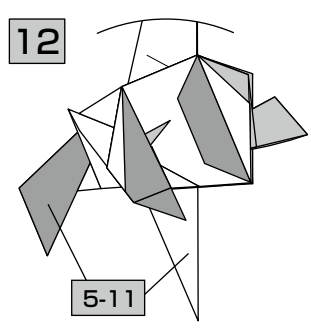
○を支点にして折る



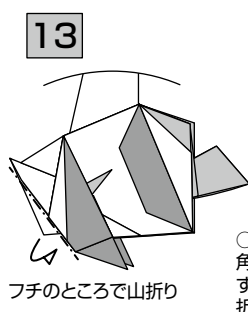
上の紙を
折らないようにしながら、
○と○をむすぶ線で折って
内側にさしこむ



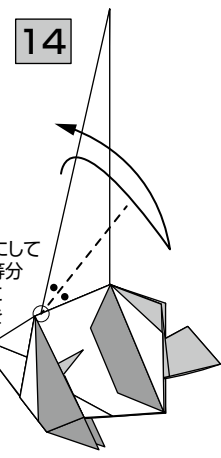
○と○を
むすぶ線で山折り



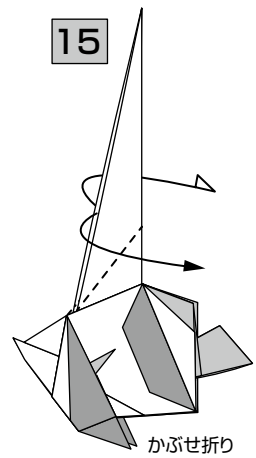
5-11



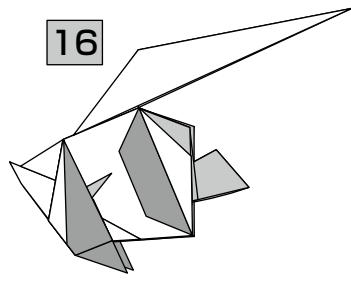
フチのところで山折り



○を支点にして
角度を2等分
するように
折りすじを
つける



かぶせ折り



できあがり

第27回折紙探偵団 コンベンション報告

Reports of the 27th Origami Tanteidan Convention

西川誠司

Nishikawa Seiji

2022年11月25日から27日の3日間にわたって第27回折紙探偵団コンベンションがオンライン開催された。ゲスト講師としてデビッド・ブリルさん(イギリス)とジェレミー・シェーフアーさん(アメリカ)を迎え、韓国、アメリカからの海外講師3名を含め、38クラスの講習と学術的講演、仮想空間交流サイト・ギャザータウンでの謎解きなどの企画が用意され、海外からの約20名を含め200名の参加があった。

<概要>

コロナ禍への対応で日本折紙学会では2020年からオンライン事業に力を入れて、例会に加えコンベンションもオンライン企画して交流の維持をはかってきました。第27回折紙探偵団コンベンションは2021年5月の九州コンベンションから数えて4回目のオンラインコンベンションになります。構成立案、講師募集、折り図集編集(おりがみはうす)、特設ページ、また同時に開催するオンライン総会の準備を7月頃から開始しました。今回は、昨年より並列教室数を4つにして時間帯ごとに選ぶ選択肢を増やしてリアルコンベンション感を出すことに努めました。併設したギャザータウンは、謎解き企画や、折り紙をテーマにした学術講演、OrigamiATCギャラリーなどを話題にした情報交換が各所で自然発生し、



招待講師のデビッド・ブリルさん

参加者相互交流の促進に一役買ったようです。コンベンション企画を主導協力いただいた多くのボランティア、コンベンションを楽しんでいただいた皆さまに感謝いたします。

<招待講師コメント>

JOASコンベンションのスペシャルゲストとして招待されたのは大変光栄でした。世界を代表する日本折紙学会は例会、出版物、創作、イベント主催の非常に高い基準を設定しており、Zoomコンベンションは愛好者のためのコンプレックス作品も含まれた講習の優れた方法を実現されました。コンベンションで、私はプリリアント・オリガミ・ストーリー、折り紙のきっかけと実験について話し、富士山バリエーションを教えました。一日も早く探偵団コンベンションでリアルにお会いできることを願っております。

(デビッド・ブリル)

JOASの皆様、スペシャルゲストとしてお迎えいただきありがとうございます。講習のラクダ頭部のポップアップカードは、その作品の初発表作であり、まだ他の場所で教えたことはありませんが、ラクダ全体(頭含む)について私のYouTubeチャンネルで次回に教える予定です。また、YouTubeチャンネルにペンローズ不可能三角形の最新ビデオがアップロードされました。今後ともよろしく願いいたします。

(ジェレミー・シェーフアー)

<教室・プログラム>

今回は4つのZoom会場を使って全38講習がパラレルで開講され、シンプル、中級、コンプレックス、幾何学と、幅広いジャンルの作品が揃いました。小学生講師の講習があったり、女性講

師が多かったのも特徴です。招待講師のデビッド・ブリルさんにはアイデアのルーツや作例写真などをスライドでたくさん見せて頂き、立石浩一さんの的確な通訳で大変興味深い90分となりました。ジェレミー・シェーフアーさんはスタートから笑いの絶えない講習で、びっくり箱のように次々と作品が繰り出されます。通訳の萩原元さんの見事なアドリブも必見で、「訳者があんなに笑っている講習は初めてでとても楽しかった」とのコメントもありました。金曜の講演でもたくさんの作品紹介とスライドがあり、羽鳥公士郎さんの通訳でお二人の折り紙歴の変遷を辿る大ボリュームの内容となりました。ぜひ録画で見てください。

韓国から講習してくださったユ・テヨンさんとパク・ジョンウさんは、お二人とも流暢な日本語で分かりやすく、可愛い作品が人気でした。

Zoom講習が初めてという講師も何名かいらっしゃいましたが全体的にとってもスムーズな進行だったと思います。講習を切り盛りする司会は映像を切り替える作業や記録係としての作業もあり、見やすくストレスの無い講習のために欠かせない役割です。今回は講習数が多く、司会を複数回担当して頂いたり講師と兼任して頂くケースが多くありました。兼任の場合は講習中に



ジェレミー・シェーフアーさんの講習より

第27回折紙探偵団コンベンション報告

Reports of the 27th Origami Tanteidan Convention

西川誠司 Nishikawa Seiji

発言する人数が少ないので少し寂しい感じがしますが、アンケートによると概ね好意的に受け止めて頂けたようです。招待講師の講習では通訳と司会を兼任して頂きました。博士研究ビデオやOrigamiATC交換会報告なども含めて、全ての講演・講習が録画配信されています。参加申し込みされた方は2月28日まで視聴可能ですので、ぜひじっくりお楽しみください。

講習のラインナップについてのアンケート回答では、実用作品やシンプル作品が多くて嬉しかったという声と、コンプレックス作品をもっと増やして欲しいという声の両方がありました。また、Zoomコンベンションは遠方からでも気軽に参加できることと、同時刻の講習も後から見ることができるので大変有難いというコメントが多数寄せられている一方で、はやくリアルなコンベンションで皆に会いたいという声も少なからずありました。状況次第ではありますが、可能性を模索していくことと思います。(川村みゆき)

<博士講演>

コンベンション初日に開催された「博士研究ビデオ上映会」では、近年、折紙に関する研究で博士号を取得された三名によって、それぞれの研究が紹介されました。

一人目は、北陸先端科学技術大学院大学で博士(情報科学)を授与された大内康治さんです。大内さんは、折紙の創作の難しさに興味を持ち、その難しさを考察するために、角度系ごとに平坦に折りたためる単頂点展開図を列挙しました。

二人目は、東洋大学で博士(教育学)を授与された松浦英子さんです。松浦さんは、折紙は教育に良いのかという疑問を解決するために、特に世

界中のOrigami普及活動がノンフォーマルな成人教育であるのとらえ、その歴史を紐解きました。

三人目は、筑波大学で博士(工学)を授与された私、山本陽平です。ねじり折りのパターンに興味を持ち、そのパターンを使用した作図法とその応用を提案しました。

三名の発表は、録画済みのビデオ講演によるものでしたが、Gather.Townにしばしば参加したため、他の参加者との自然発生したディスカッションを通して、意見交換がおこなわれました。また、今回の発表者は、一度社会人を経験した後に、自らの趣味的な活動をテーマとして、博士後期課程に進学したという共通点があります。このことは、誰もが、学びの機会を持っていることを実感させます。あなたも、学術的に突き詰めた趣味があるなら、将来、博士となっているかもしれません。(山本陽平)

<OrigamiATC研究会報告>

OrigamiATCのオンラインイベントは、11月25日(金)21時から1時間の枠で開催されました。10月に募って集まったカード31枚を1枚ずつカメラに映し、作者のコメントや主催者側で気づいたことなどをご紹介していくという内容で、今回は34人の方にご参加いただきました。ありがとうございます。カードを制作された方がオンライン参加者の中にいらっしゃった場合には、質問させていただいたり、コメントをいただいたりするなど、行き当たりばったりかつ和気あいあいと進み、最後はOrigamiATC研究会顧問の山口真氏に、いくつか気になったカードへの批評をいただいて幕を閉じました。今回は、カードの写真を事前に専用ページへアップロードし、タイトル・

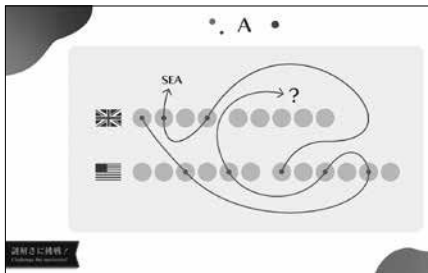
カードの作者・使用折紙作品の名称と作者を公開しており、その表示順番に紹介していったので、見落としや聞き落としを防ぐことができたように思います。

カード紹介のオンラインイベントは、OrigamiATC研究会が主催するものとしては3回目で、毎度似たような感じでした。イベント参加者のほとんどがカード制作者ではないことから、次回はそういった方々にも楽しんでもらえる仕掛けを用意したいと思っています。また、カード参加者についても「コンベンションで紹介します」と告知したら、いつもより参加数が減ってしまったので、コンベンションと絡むからこそそのメリットも考えたいと思います。次回もどうぞご参加ください。(松浦英子)

<ギャザータウン>

コンベンション参加者の交流場所として「Gather.Town」(以降ギャザー)を導入し、さらにそこで「宝探しゲーム」のようなお楽しみ企画をやりたいので協力して欲しいというメールをいただいたのがきっかけで、この度ギャザーの運営に関わらせていただきました。ギャザーはレトロゲーム風の見た目をしたオンラインサービスで、設定された会場内をアバターで動き回る事ができ、現実のように利用者同士が近付くと音声またはビデオによる通話が可能になるのが特徴です。海外の折紙コンベンションでは既に活用が進んでおり、国内でも九州コンベンションが先んじて利用していました。なお私以外にもゲーム部分のアイデア出しを山本大雅さんが引き受けてくださり、OUSAでギャザーを利用していて詳しいマルシオ野口さんも協力していただきました。

会期中の利用状況ですが、常に(深



謎Aの出題画像

○西川誠司(にしかわ・せいじ)
1963年奈良県生まれ。
日本折紙学会評議員。
オンライン継続、リアル
復帰、多様化は続く。



夜と早朝を除く)約10人、ピーク時には20人強のアクセスがありました。ギャザーは無課金だと同時入室25人までの制限があるのでどうなるかと思いましたが、ぎりぎり制限内で収まった形です(一度だけ25人になった瞬間もありましたが幸いすぐに空きが出たので大事にはなりません)。主な利用方法は知り合い同士による会話ですが、その他にも博士研究の発表を行なった御三方に質問をする、Zoomで教室に参加しながら同時にこちらで感想を話す、参加できなかった教室の作品を他の人に教えてもらう、といった様子が見られました。リアル会場でのコンベンションの様子を彷彿させる光景で、これはZoomだけでは実現できない事だったと思います。また若い世代は慣れるのも早く自由にアバターを動かし楽しめていたようです。ただ時折他の利用者の迷惑になるような遊び方も目につきましたので、次回以降はルールやマナーの明文化も必要と感じました。また常駐スタッフが私1人だけだったのも要改善点だと思います。

お楽しみ要素のゲームですが、謎の制作が本職である山本さんの協力があつた事もかなり本格的な謎解きに仕上がりました。難易度が高かった事もありこちらで把握しているクリア者は僅か27名となります。そのクリア者に実施したアンケートでも85%が難しかった・とても難しかったと答えておりその難易度の高さが伺えます。ただ満足度は高く全員が楽しめたと回答してくださいました。折角ですので特に難しかったとされる謎の1つをご紹介します。2つの国境の横に並んだ丸に文字をはめ込み「?」を導き出すというものです。いかがですか?

この謎を含め全ての謎は折り紙の

知識を持ったコンベンション参加者だからこそ解けるものになっており、通常の謎解きのセオリーからは外れていますが、だからこそ面白いものになっています。コンベンション参加登録者は2月28日までアクセス可能ですので、まだ入ったことがない方、謎解き未挑戦・未クリアの方は今の内にお試しあれ。(萩原 元)

<感想>

今回は、教室の講師と、自身の博士研究を紹介するビデオ発表をしました。Gather.Townで講習作品の折り方について意見をもらったことが後の折り手順改良につながり、同志と交流する大切さを感じました。研究についても多くの質問・感想を頂き、報われた思いを抱くと共に折り紙研究の発展への期待が高まりました。より活発なコミュニケーションができるであろうリアル開催の再開を願ってやみません。(大内康治)

オンラインではありましたが、今年もコンベンションが開催され、ご尽力くださった運営の皆様には心から感謝いたします。私は講師と司会を務めました。どちらも講習前はうまく行くか少し緊張しましたが無事に終了し、微力ながら一助になれたことを嬉しく思っています。オンラインならではのメリットを生かして楽しめるところはたくさんありますが、来年こそ対面でのコンベンションができれば良いですね! そろそろみんなと同じ空気の中で折り紙をしたいところです。(川崎亜子)

今回は3回目のオンライン開催ということもあり、より楽しく、より濃密に、そしてより快適に折り紙を楽しんでいただくための企画と工夫がふんだんに盛り込まれ、プログラム時間外においてもギャザータウンでのコミュニケーションや謎解きなど充実した幸せ

な期間を楽しむことができました。個人的には、昨年同様司会を担当し、講習に臨む際の講師との事前打ち合わせを通してオンラインならではの貴重な時間の共有と体験をさせていただけた、と感謝の念に堪えない。コロナ禍における事情を鑑みたオンライン開催は移動などにかかる時間と場所を超えた利便性はあるものの、やはり現地開催によるメリットである「直接見て聞いて話してお互いの距離を縮めることで産まれる折り紙仲間との絆を育む」を味わえないのは寂しくもある。今後は是非ともそれぞれの利点を活かした現地開催+オンラインのハイブリッドでの開催を模索していきたい。

(菊田 創)

同時進行の教室が4つあったので、1教室当たりの人数が少なく、和気あいあいとした雰囲気講習もあり楽しかったです。博士の方々の発表は、わかりやすく短くまとめていただいてあり、とても貴重な機会でした。ギャザータウンの謎解きは、休憩時間にもつついのめり込んでしまい、次の教室に遅刻しそうになるほどでした。折り紙に関連した問題ばかりで、とても楽しかったし、解けた時の達成感も最高でした!(鈴木美和子)

コンベンションの練習で、わかりやすい折り方を考えるのが難しく、練習するたびに折り方を変えていきました。お友だちがオットセイの講習の練習に付き合ってくれた時に、時間が足りなさ過ぎて、その後大幅に折り方を変えました。結局本番は、最初とは全く別の折り方になりました。みんな無事に折れたけど、その友達は「全然折り方が違ってびっくりした!」らしいです(笑)。本番は、前に例会で講師をやったせい、あまり緊張しませんでした。良かったです。(塩見瑛太郎)

折紙図書館の本棚から

From the Bookshelves of the JOAS Library

松浦英子 Matsuura Eiko

この連載では、折紙学会図書館に所蔵されている資料の中から、興味深いものを選んでご紹介しています。折紙図書館の蔵書は、折紙探偵団ホームページから検索できます。詳しくは、<https://origami.jp/Library/>にアクセスしてください。

87冊目 『吉澤章:日本で最も偉大な折り紙の巨匠』 序文:吉澤喜代、序章:ロバート・J・ラング

“AKIRA YOSHIZAWA: Japan's Greatest Origami Master”

Preface by KIYO YOSHIZAWA, Introduction by ROBERT J. LANG

<本の仕様>

本書は、スイスの出版社Nuinuiから2015年に出版された『Akira Yoshizawa Origami d'exception(フランス語)』『AKIRA YOSHIZAWA L'art deli' origami(イタリア語)』を英語翻訳してアメリカのTuttle 出版社が2016年に出版したものだ(図1)。同様にドイツのTOPP(Frech Verlag社のレーベル)からも『AKIRA YOSHIZAWA: ORIGAMIKUNST(ドイツ語)』として2016年に出版されているが(図2)、日本語版は出ていない。

本は、238×302×22mm(筆者調べ)のハードカバー、4色フルカラーで総ページ数192という、なかなか存在感のある仕様となっている。美しい作品写真と共に吉澤作品の折り方が豊富に掲載されており、造形的な作品制作をしている、またはしたい折り紙作家・愛好家の必携書だと言えよう。

吉澤喜代氏の序文によれば、本書には『美しい折り紙—吉澤章創作折り紙作品集』(鎌倉書房、1974年刊)、『やさしいおりがみ』(鎌倉書房、1978年刊)の2冊に掲載された60以上の折り紙作品と吉澤によるオリジナルの折り図が収録されているという。目次の作品タイトルを数えると53だが、2作

品以上を合わせて1タイトルとしているものもあり、バリエーションを含む完成図を筆者が数えた限りでは、94作品あった。

本の内容は大きく三部構成となっている。冒頭は、吉澤喜代氏、ロバート・ラング氏、イチヤマ・ヒロコ氏のエッセイと吉澤章氏の略歴が、様々な資料写真と共に22ページにわたって掲載され、その後に、Part 1とPart 2がある。Part 1は「創作折り紙 美しい折り紙芸術」と題して125ページに74作品の折り方が収録されている。Part 2は「やさしいおりがみ」と題し32ページに19作品の折り方が収録されている。

巻末にはQRコードが記載されており、読み込むとNuinuiのYouTubeチャンネルに飛び、1997年に紀伊國屋から発売されたVHS『吉澤章:神・宿の手[おりがみ・その宇宙]』のダイジェスト版を視聴することができる。これは2012年にDVD版も発売されたが、入手は極めて困難となっている。30分を無理やり10分に短縮している上、作品の映像が極めて少ないが、吉澤氏が語る哲学を垣間見ることができる。

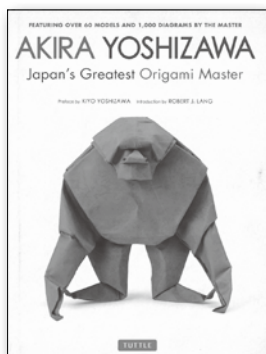
<内容の見どころ>

前述のように豊富な折り図や作品

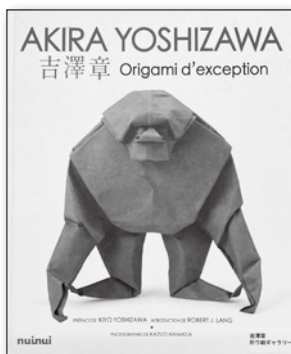
写真もさることながら、Langによる、6ページに渡るエッセイも貴重だ。幼い頃の吉澤作品との思い出から実際に吉澤氏に会った時のエピソードまで詳細に語る一方で、吉澤氏が「20世紀の折り紙芸術をほぼ一人で確立した」と、その功績を簡潔にまとめている部分もある。さらに、吉澤氏が完成までに23年以上かけたという「蟬」について、実物の写真やスケッチ資料、展開図を用いて専門的に解説し、当時のエピソードなどから吉澤の考えを推察するという、マニアの心を打つような部分もあり、筆者的にはここが本書のハイライトとなっている。

実際の本書のメインは、その後の折り図&写真パートだ。『美しい折り紙』を底本としたPart 1では、「ゴリラの子」(表紙写真)や「雉」「うさぎ」(図3)など、代表的な吉澤作品を折ることができる。また『やさしいおりがみ』を底本としたPart 2は、かなりシンプルな作品が多く、初心者でも折り図通りに折り畳むことは可能だが、「ことり」(図4)や「おひなさま」などは仕上げのニュアンスが問われる作品で、何度でも折って技術を磨きたくなるラインナップとなっている。

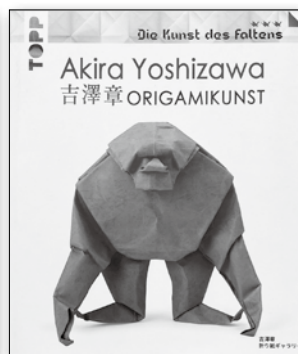
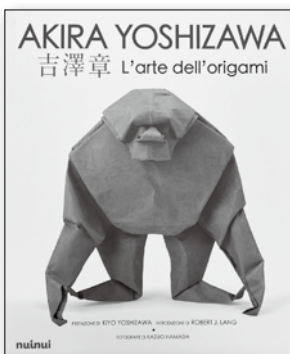
本書では、吉澤氏の手描きの原画



▲図1:英語版表紙



▲図2:(左から)フランス語版、イタリア語版、ドイツ語版表紙(吉澤章折り紙ギャラリー収蔵)



○松浦英子(まつうら・えいこ)＝1972年生まれ。折り紙普及活動を、社会教育・成人教育の視点から考えています。昨年は抜け殻だったので、今年から仕事も研究も心機一転がんばります。



をそのまま掲載している(着色あり)。ラング氏は自身のエッセイの中で、吉澤氏が「現在では当たり前のように使われている矢印や点線、破線といった折り方の指示コードを開発し、それは非常に明確で説得力があった」と、吉澤式の折り図表現法を評価している。その部分と見比べながら折り図を味わうのもいいだろう。

また本書の作品写真は、写真家浜田一男氏によって、ほぼ全て撮影し直されている。吉澤氏のオリジナル作品が、鮮明でダイナミックかつ繊細な写真によって大判の書面に蘇っているのは圧巻で、作品写真集としても十分価値がある一冊となっている。

<底本・原本に関する追記情報>

ところで、底本の一つ『やさしいおりがみ』(図5)は1978年出版と前述したが、この初版はフレーベル館から1971年に刊行されたものだ。その後版元を変え鎌倉書房から復刊したのが1978年になる。なぜ鎌倉書房版を底本としているのかは分からない。

国際折り紙研究会代表幹事の塩川誠氏によれば、元々この本は3冊シリーズであったという。いずれもフレーベル館で、1963年に『たのしいおりがみ』、1964年に『おりがみえほん』、そして最後に『やさしいおりがみ』が出版され、後に鎌倉書房から3冊とも再版された。その後ニューサイエンス社からは『やさしいおりがみ』だけが再々版されて(2005年)、現在も入手可能だ。もう一冊の『美しい折り紙』(図6)も、鎌倉書房から出版された後にニューサイエンス社から再版されており、これも入手できるようだ。

原本であるNuinui版は両方とも全240ページで、TOPP版は全224ページ、Tuttle版は192ページと差がある。取材の後でこれに気づき、塩川氏に伺ったところ、Nuinui版とTuttle版を比べて確認していただけた。その結果、写真の扱いや記事に変化はなく、内容的には全く同じであるとのことだった。Nuinuiは折り図のタイトルに1ページを使っており、Tuttleは半ページで済ませている違いだという。出版社で編集の仕事をしていた塩川氏によれば、Tuttleの方が効率的に版面を利用しているとのこと。48ページの違いは気にしなくていいようだ。

この折り紙の美術書とも呼べる立派な作品集が、世界4ヶ国語で出版されながら、なぜ日本語版は無いのか。これについては塩川氏もご存知ないということであるから、想像の範囲でしか無いが、筆者は次のように推察する。

<日本語版が無いことについて>

この折り紙の美術書とも呼べる立派な作

品集が、世界4ヶ国語で出版されながら、なぜ日本語版は無いのか。これについては塩川氏もご存知ないということであるから、想像の範囲でしか無いが、筆者は次のように推察する。

本のメインの内容が、日本で既に出版されている入手可能な本の合冊であることがまずあげられる。また日本家屋にそぐわない(?)大型本であることと、価格が3,850円(Tuttle公式サイト)、楽天ブックスでは3,200円(2023年1月1日時点の税込み価格)と比較的高価であることが要因と考えられる。中身を考えれば、安いくらいなのだが。

しかし、これだけ折り紙は芸術、世界に誇る日本の文化と言うならば、まずは本書の日本語版が出版されるような風土を築いていく必要があるのではないだろうか。それには、皆さんの購買意欲を地道に市場へ示して行く必要がある。本棚にまだスペースのあるマニアを自認する方は、ぜひ手元に一冊置いていただきたい。

<謝辞>記事の執筆にあたり、資料の写真撮影と取材を快諾していただいた国際折り紙研究会の塩川誠氏に感謝申し上げます。



▲図3:うさぎ (p.119より)



▲図4:「ことり」(p.162より)



▲図5:初版の『やさしいおりがみ』吉澤章折り紙ギャラリー収蔵



▲図6:鎌倉書房版の『美しい折り紙』日本折紙学会収蔵

ぼくらは 折紙探偵団

Here We Are, THE ORRIGAMI TANTEIDAN

このコーナーでは、折紙に関連した幅広いトピックを探索して、ちょっと面白い雑学的な豆知識をご紹介します。読者からの疑問、質問、追加の情報も受け付けていますので、お気軽に webman@origami.gr.jp まで電子メールでお寄せください。

第63回 折紙に逢える宿

Inns Where You Can Meet Origami

前川 淳

Maekawa Jun

山梨県のとあるショッピングモールにある化粧品店の店先。そこにはいつも、季節ごとに変わる折紙作品が飾られている。それほど凝った作品ではないが、丁寧につくられたそれらは、店に親しみやすい雰囲気をつくっている。昨秋、その飾りつけの中に、古いわたしの本に掲載された「リス」があるのを見た。入手困難な本でもあり、懐かしくなり、思わず声をかけようとしたが、ただの怪しいひとだよな、と思いつどまった。

折紙作品は、さまざまなところに飾られている。まだインターネットのなかった、あるいはそれほど浸透していなかった時代、書籍などで作品を発表しても、どこでどう楽しまれているのかは、ほとんどわからなかった。いまは、検索をかけてみると多くの写真などがヒットするが、それは世界のすべてを映すものではない。いまも、誰かの考えた作品が、誰かのお気に入りになって繰り返し折られ、そしてささやかに飾られている。たぶん、それが折紙という文化の一面なのだろう。

今回紹介するのは、知るひとぞ知る話で、行けば出会えることがわかっていて会いに行った話だが、思いもかけないところで、あるいは、やっぱりという場所で折紙に出会うこと、そういう

ことは、折紙好きにとって誰にもあることなのではないだろうか。

◇いづくにか父の声きこゆ

まずは、長野県の渋温泉の「ひしや寅蔵」という宿についてである。この宿のご主人が折紙好きで、それが高じて宿に隣接して折紙の展示室をつくったという話は、以前から聞いてはいた。しかし、行こう行こうと思いながら棚上げになっていた。この3年、世はパン

★トリビア1★
折紙好きには
作品をためた箱がある。

デミックとなり、旅行そのものが難しい日々が続いていたが、それもほぼ解禁となったので、思い切って行ってきた。

渋温泉は、浴衣姿の旅行者の下駄の音が響く昔ながらの温泉街で、近くにある地獄谷では野生の日本猿が湯に浸かることを見ることができるので、海外からの観光客にも人気がある場所である。今回の訪問のさいも、同宿となった泊まり客は、マーレシアからの家族とオーストラリアからの青年だった。パンデミック期間中を除けば、冬は9割近くが海外からの客だとい

う。そんな彼らは日本らしいことを体験したいので、折紙にも興味を示す。「ひしや」の帳場の脇にも作品が飾られ、手裏剣などの簡単な作品が「Take free」と置かれていた。

しかし、訪問するのがすこし遅かった。折紙に入れあげた「ひしや」の十二代目寅蔵氏は、昨年1月に88歳で亡くなって、展示室も閉ざされていたのだ。旅行業界全体の先行きが不透明な最中に亡くなったことになるので、心残りもあつたのではないかと想像もした。

その十二代目がなぜ折紙好きになったかという点、1998年の長野オリンピックの誘致運動で渡仏したさい、彼の地で折紙を折って見せるとひとが集まり、これはすごいということに気がついたからだという。今回、特別に開けてもらった展示室には、2007年に同館に宿泊した山口真、都夫妻、布施知子、鳥海太郎夫妻、デビッド&アーシャ・ブリル夫妻の写真と、1999年の吉澤章氏の米寿記念・創作折紙展で、吉澤氏と撮った写真が、誇らしげに飾られていた。『千羽鶴折形』の49種もすべてがあり、本棚には『折紙



「ひしや」帳場横の悪魔とヨーダ



折紙界のレジェンドたちと十二代目寅蔵氏



折鶴の基本形を思わせるステンドグラス



「秘密の箱」を開ける十三代目寅蔵氏

○前川 淳(まえかわ・じゅん) = 日本折紙学会評議員。
職場の野辺山宇宙電波観測所近くの銀河公園にも、若山牧水の歌碑があります。



探偵団折り図集』などが並んでいた。そして、十二代目が最も多く折ったのは、なんとわたしの「カブトムシ」(『ピバ! おりがみ』所収)だったという。折り工程を示す「実物折り図」もあり、全紙で折った巨大なカブトムシがいくつか飾られていた。

その十二代目が世を去り、すべてを十三代目寅蔵氏が仕切ることになったのだが、実は、十三代目もまた折り紙好きなのであった。なお、「十三代目」と聞くと、歌舞伎役者か『ルパン三世』の石川五右衛門ぐらいしか思い浮かばないが、じっさい「ひしや」は約400年続く宿で、幕末の偉人・佐久間象山が長逗留したことなどが有名で、彼の書などが無造作に飾られている歴史ある宿なのである。建物自体は大正時代に建て替えられたものということで、そこここにあるステンドグラスがよい雰囲気を出している。ステンドグラスは菱形の意匠のものが多いが、これは屋号、そして家紋の「松皮菱」に関連づけられたものだ。そのひとつはまるで折鶴の工程の途中のようで、さすが折り紙の宿と思ったのだが、これは偶然だろう。

その十三代目が最も多く折ったのは、わたしの「悪魔」だという。と、なんだかわたしの自慢話みたいになってきて申し訳ない。ただ、十三代目が最近よく折るのは、川畑文昭さんの「ヨーダ」だという。海外のお客さんへのウケがよいのだそう。20分ぐらいで折ることができるということで、完全に折りかたをマスターしている。「マスター・ヨーダ」である。なんども折ったのだろう。「ジェダイの“復習”」である。ちなみに、この作品は『川畑文昭折り

紙作品集』に図があるが、初出は『第三回折紙探偵団コンベンション折り図集』(1997)で、その図には、展開図折りを意味する「前川匠フォース」という、口髭のある人物の似顔絵という記号(?)の記述があることで知られる。って、また、自慢話か。

彼が、折りためた作品のつまった箱を出してきたときは、「ああ、このひとはほんとうに折り紙が好きなんだな

★トリビア2★
展開図どおりに折る
「前川匠フォース」という
記号があった。

あ。折ったものは捨てられないないんだよなあ」と深く納得した。折り紙のみならず、十三代目はなかなかの趣味人で、イラストレーションも上手く、羊毛フェルト細工(なぜか蛙ばかり)に熱中していたこともあるという。「いまは、管理が難しいので展示室を閉じていますけれど、わたしも隠居したら、ここで1日折り紙を折っていたりしたいですね」と話し、別れ際に、「前川さんが訪問したことを父に伝えておきます」と告げた十三代目なのであった。

わたしは「牧水」と名づけられた部屋に泊まった。宿から近い場所に、歌人・若山牧水の文学碑もあり、彼がこ



「明日香荘」の折り紙

の地を訪れたことは、有名な『みなかみ紀行』などにも記され、たしかな話である。牧水の間にあった、山桜を詠んだ歌の掛け軸も、晩年に多くの揮毫旅行をした彼のことなので、真筆なのかもしれない。牧水は、父危篤の報を受け郷里に帰ったさい、次の歌を詠んでいる。

いづくにか父の声きこゆこの古き大きな家の秋のゆふべに 牧水

◇知れる人みななつかしく

もうひとつ、同じく長野県の折り紙の宿も紹介しておこう。大町市八坂にある金熊温泉「明日香荘」である。この宿の1階と2階のロビーにユニット折り紙がたくさん飾られている。これは、八坂に住む布施知子さんが講師をしていた「八坂折り紙愛好会」による作品だ。布施さんの家は、TV番組の『ポツンと一軒家』にぴったりの草深い山里にある。最近、布施さん夫妻のほかのもう一軒が町に転居することになったので、集落に住むのは布施さんだけになった。いわゆる限界集落だ。八坂折り紙愛好会は、その集落を含む村にあった会なのだ。「あった」と書いたのは、主要メンバーが鬼籍にはいってしまったため、いまは活動をしていないためである。

はからずも、ふたつの話題とも、折り紙が好きだったお年寄りが亡くなってしまったという話になってしまった。しかし、わたし自身も歳をとったためか、この寂しさは、一種の懐かしさとなって、親しいものにも感じなくもない。

知れる人みななつかしくなりきたるこのたまゆらのかなしかりけり 牧水
(たまゆら:ほんの少しの間)

今号の折り図・展開図掲載作品より

解説：西川誠司 (P.20-21)

Models Based on Diagrams and Crease Patterns of This Issue Comments: Nishikawa Seiji (P.20-21)

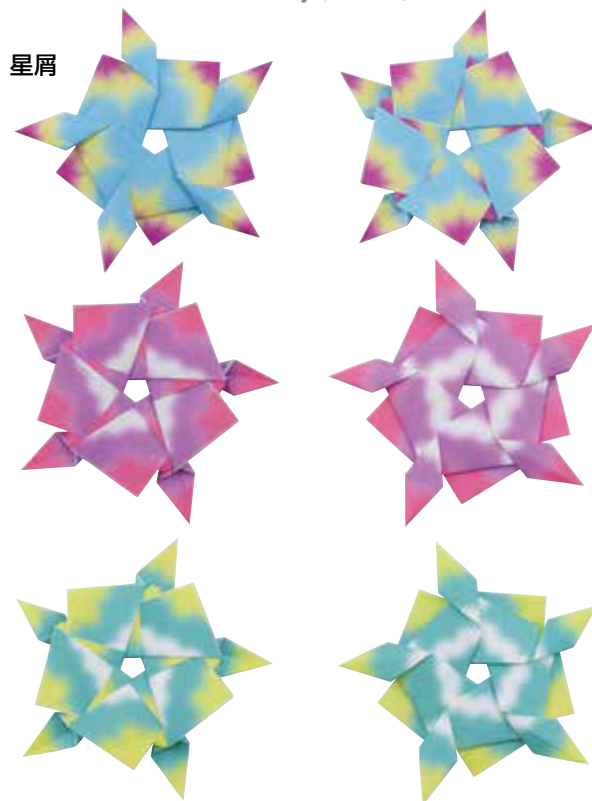
「星屑・裏ヒトデ」作：布施知子(P.4)

Stardust, Reversed Starfish: Fuse Tomoko (P.4)

■シンプルでガッチリと五角形に組めるのがうれしい。「裏ヒトデ」の星形は、クリスマスや七夕飾りにいかが？ と、いろんな人に伝えたい。



裏ヒトデ



星屑

「トムソングゼル」作：勝田恭平(P.26)

Thomson's Gazelle: Katsuta Kyohei (P.26)

■顔、お腹、お尻と3色の色分けが、勝田氏得意の重ね折りで見事に表現されている。重ね折りは色分けと部分的な角出しも兼ねて、比較的シンプルな配置を可能にしてとても折り易くもある。



「ハタタテダイ」作：稲吉秀尚(P.8)

Pennant Coralfish: Inayoshi Hidehisa (P.8)

■3色の色分けがバランスよくデザインされて、「ハタタテダイ」の見立てがきれいに決まっている。何匹もモビールで飾るのも良いかも。



「つままれにゃんこ」作：萩原 元(P.38)

Naughty Cat: Hagiwara Gen (P.38)

■思わず、目が留まり、ほくそ笑んでしまうアイデア作品。だが、アイデアにとどまらず、猫の愛らしい脱力感がしっかり造形されていなくては、何万もの“いいね”やリツイートは得られないでしょう。



富永和裕折り紙作品誌上展示

Origami Works by Tominaga Kazuhiro



アメリカンクルーザー
American Cruiser



フォルクスワーゲン ビートル
Volkswagen Beetle



オニダルマオコゼ
Stone Fish



F-117



七面鳥
Turkey



スッポン
Soft-shelled Turtle



ロースターキー
Roast Turkey



革靴
Leather Shoes



土佐犬
Tosa Dog



馬
Horse



猪
Boar



日本犬
Japanese Dog



日本猿
Japanese Macaque



カカポ
Kakapo



ペリカン
Pelican



ドードー
Dodo



ドラゴン
Dragon

各地の例会、コンベンションから

From the Origami Tanteidan Convention
2022 and Regional Meetings

各地の折紙探偵団友の会例会で投稿、
発表された作品。および、コンベンション
で講習された作品の一部を紹介してい
ます。



プレシオサウルス/水野健 Mizuno Ken



うさぎ/パク・ジョンウ Park Jong Woo



ひよこ/小林弘明 Kobayashi Hiroaki



トビナナフシ/菱井海音 Hishii Kaito



富士山の箸袋/堀口直人 Horiguchi Naoto



シロノワール/加藤 眸 Kato Hitomi



えんぴつ/塩見瑛太郎 Shiomi Eitaro



宝石のカケラ/長山海澄 Nagayama Kaito



始祖鳥/榎本昌芳 Enomoto Masayoshi



アマガエル/萩原 元
Hagiwara Gen



牛/松田景吾 Matsuda Keigo



コーギー/大内康治 Ohuchi Kouji



魚をくわえた猫/幾野 陸 Ikuno Riku



カエル/塩見瑛太郎 Shiomi Eitaro



ほうきの魔女 / 木村良寿 **Kimura Yoshihisa**



ヘビ / 袋井一樹 **Fukuroi Kazuki**



サンタクロース / 満田 茂 **Mitsuda Shigeru**



羊 / ユ・テヨン **Yoo Tae Yong**



ツノメドリ / 勝田恭平 **Katsuta Kyohei**



オオミアオ / 神谷哲史 **Kamiya Satoshi**



バラng / 西川誠司 **Nishikawa Seiji**



敷島ローズ / 板橋悠太郎 **Itabashi Yutaro**



鯉 / 前川 淳 **Maekawa Jun**



Mount-Fuji-Variations / Dave Brill



さかな / 川畑文昭 **Kawahata Fumiaki**



ナマケモノ / 田中幹人 **Tanaka Mikito**



ジュゴン / 稲吉秀尚 **Inayoshi Hidehisa**

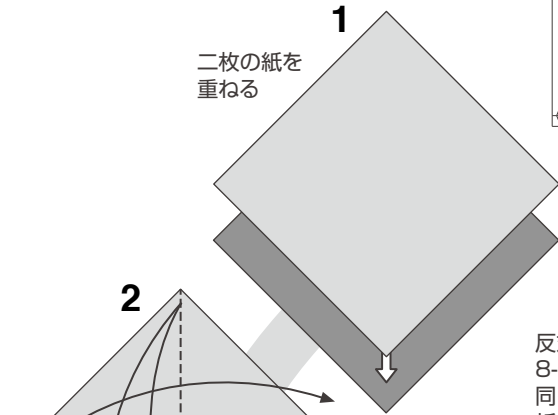
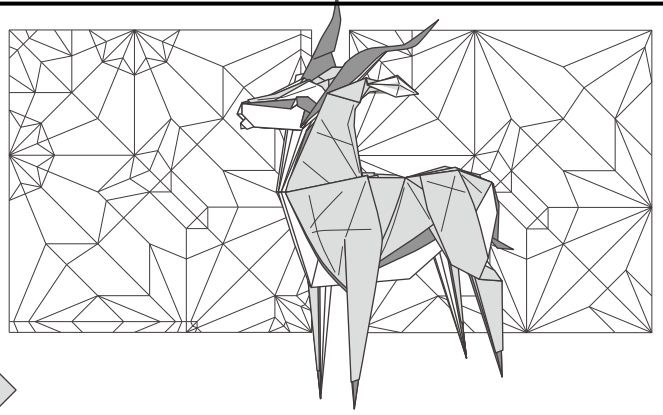


カエルくん / 大口素男 **Ohguchi Motoo**

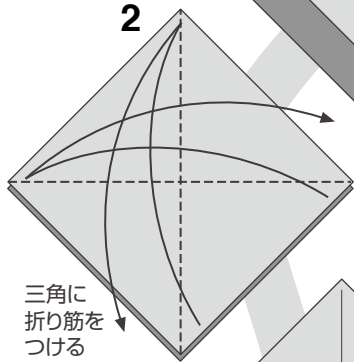
トムソンガゼル

Thomson's Gazelle

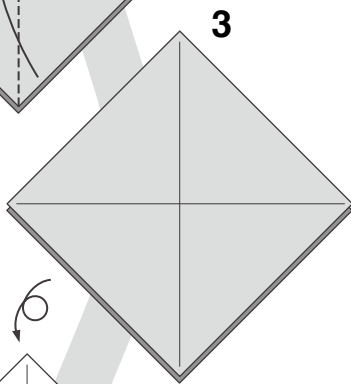
勝田恭平 / Katsuta Kyohei
Designed : 2020/8



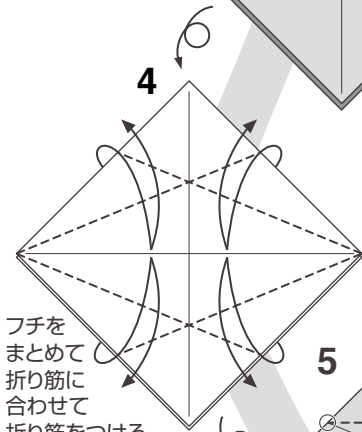
1
二枚の紙を
重ねる



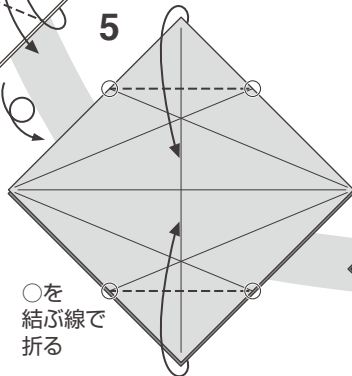
2
三角に
折り筋を
つける



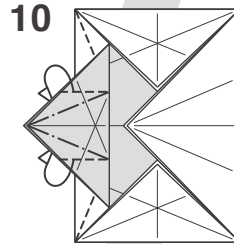
3



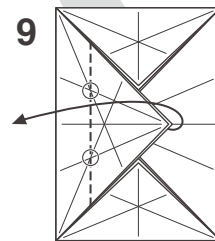
4
フチを
まとめて
折り筋に
合わせて
折り筋をつける



5
○を
結ぶ線で
折る

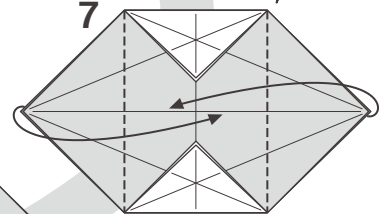


6

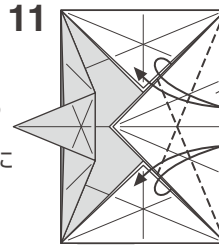


7

カドのところで折る



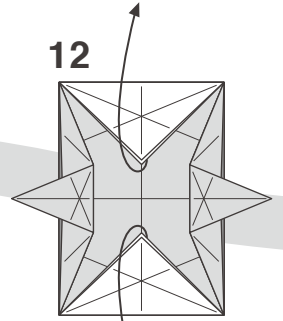
8
フチとフチを
合わせて折り筋を
つける



9

反対側も
8-10と
同じように
折る

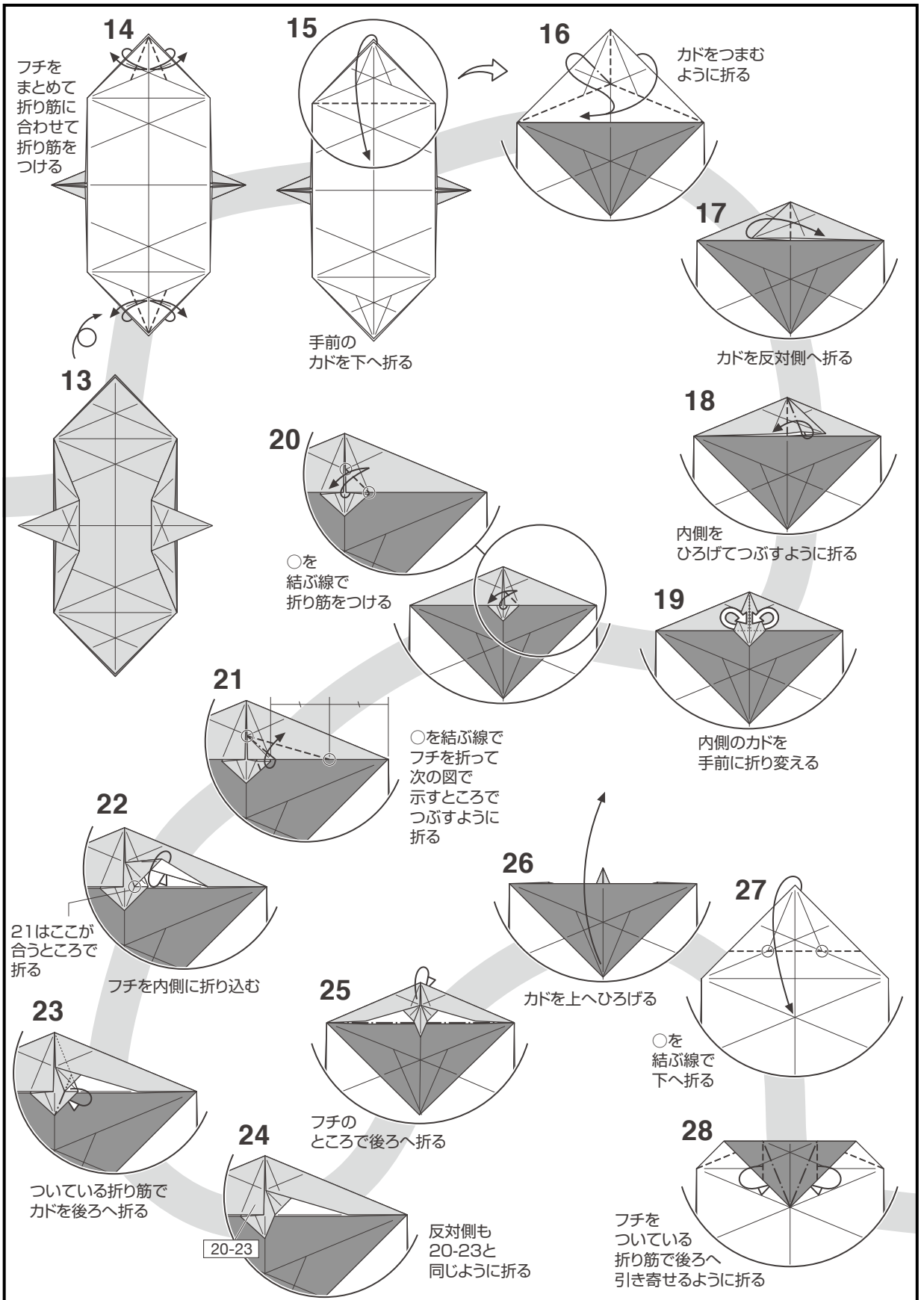
8-10

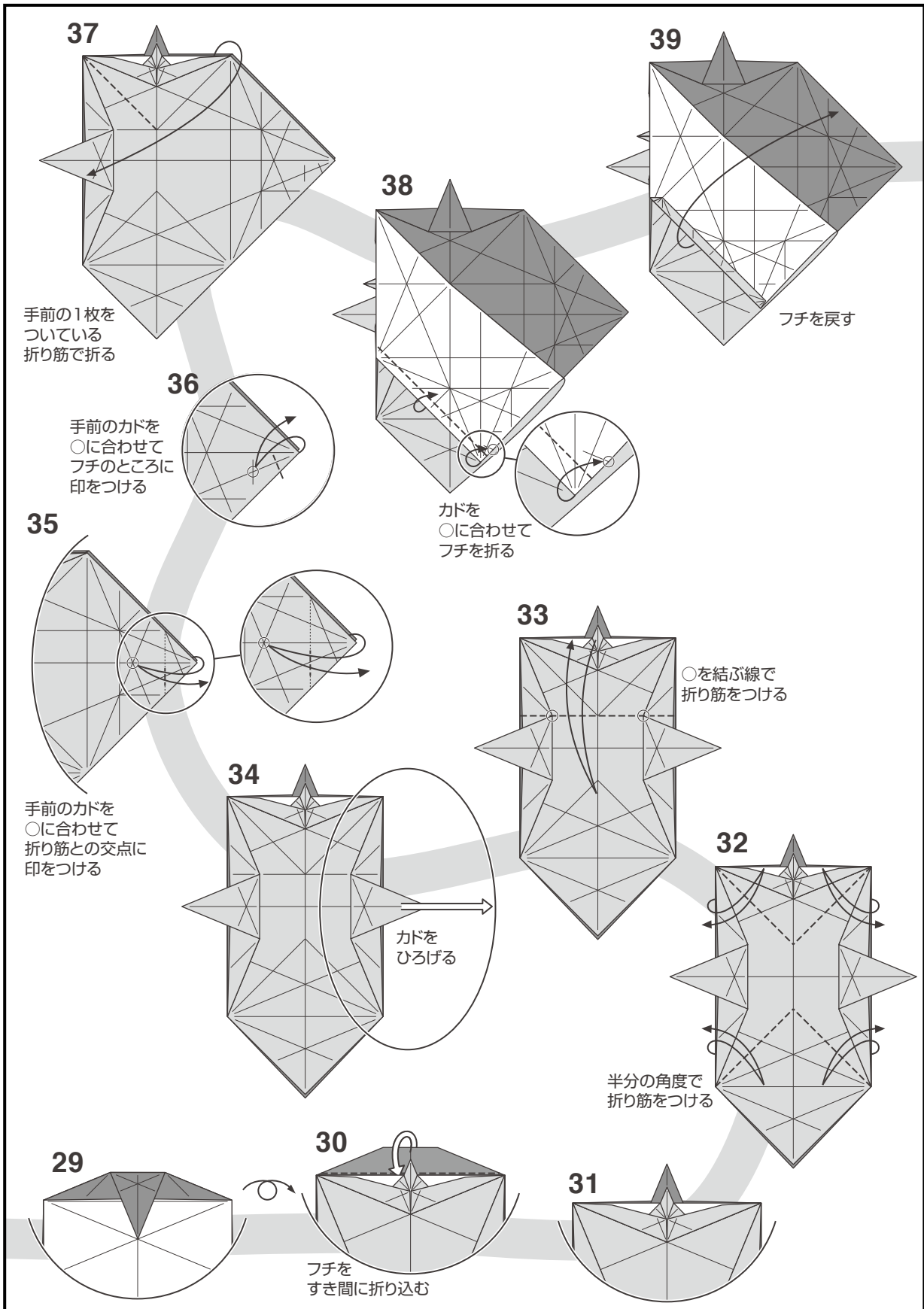


10

フチを
ついている
折り筋で
後ろへ
引き寄せる
ように折る

カドを
ひろげる





37

手前の1枚をついている
折り筋で折る

39

フチを戻す

38

カドを
○に合わせて
フチを折る

36

手前のカドを
○に合わせて
フチのところに
印をつける

35

手前のカドを
○に合わせて
折り筋との交点に
印をつける

33

○を結ぶ線で
折り筋をつける

34

カドを
ひろげる

32

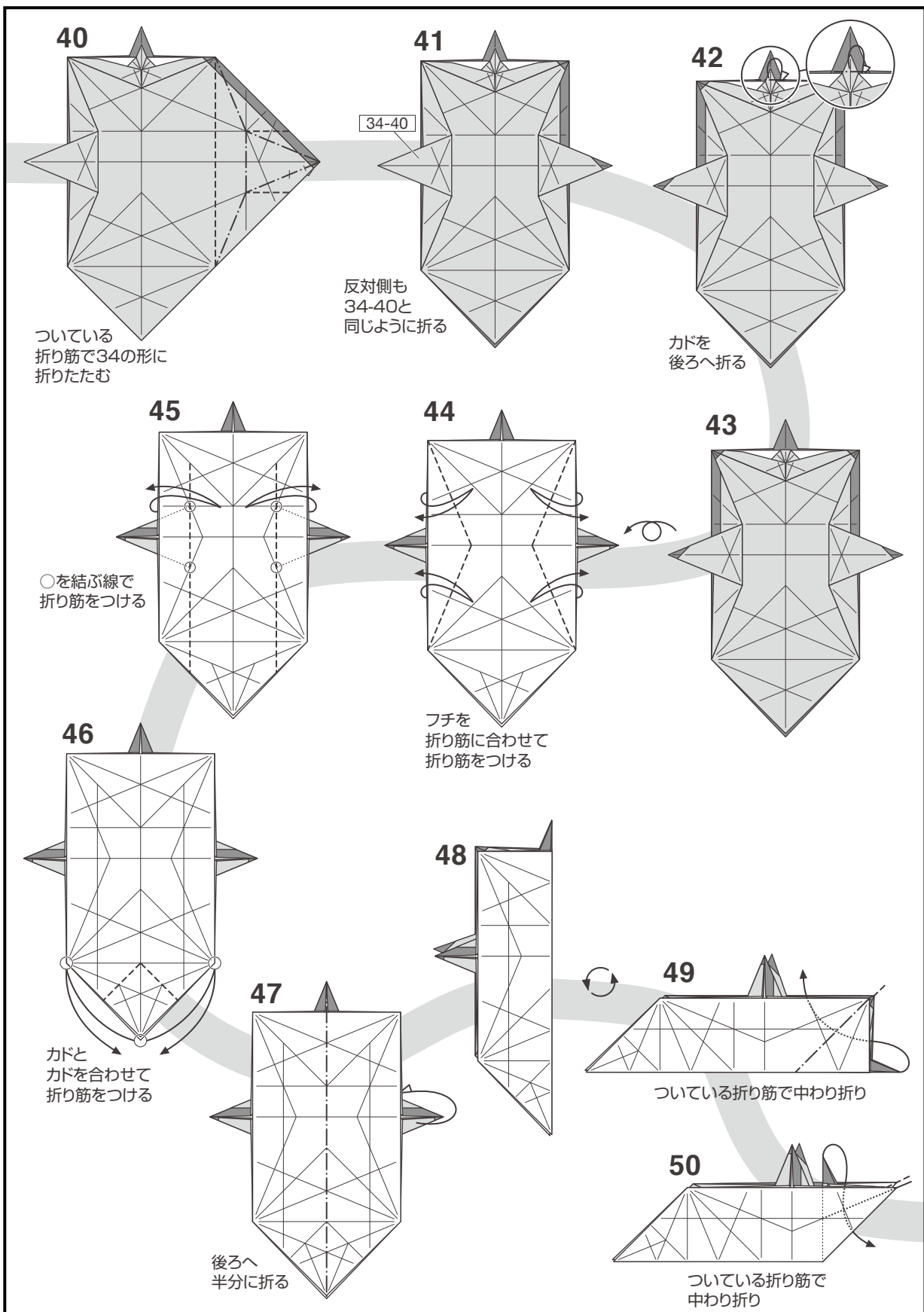
半分の角度で
折り筋をつける

29

30

フチを
すき間に折り込む

31



40

ついている
折り筋で34の形に
折りたたむ

41

34-40

反対側も
34-40と
同じように折る

42

カドを
後ろへ折る

45

○を結ぶ線で
折り筋をつける

44

フチを
折り筋に合わせて
折り筋をつける

43

46

カドと
カドを合わせて
折り筋をつける

48

47

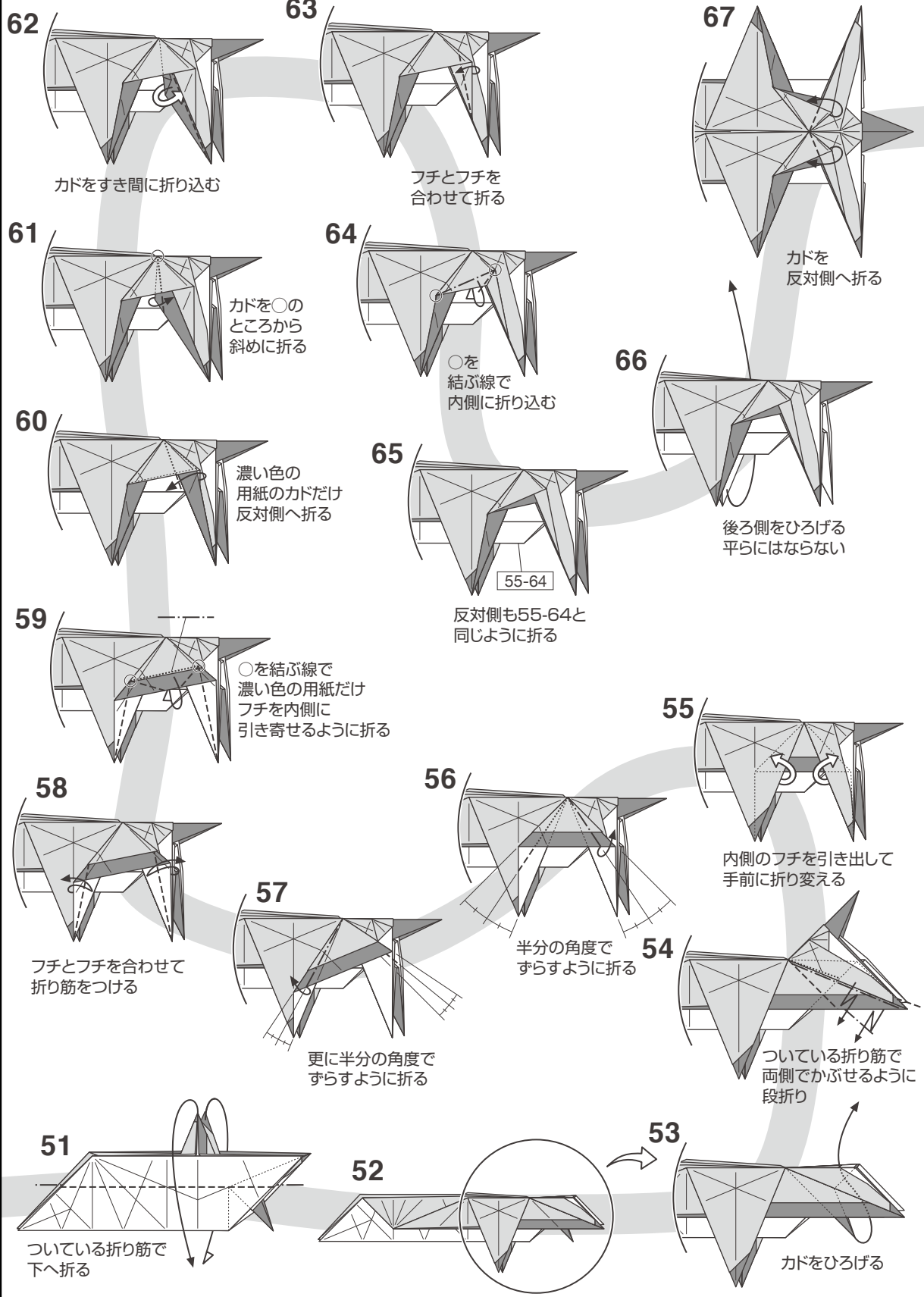
後ろへ
半分に折る

49

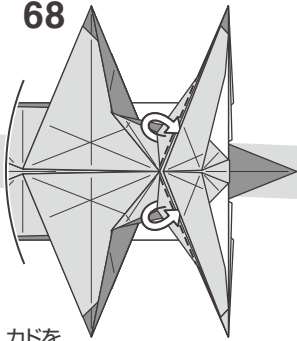
ついている折り筋で中わり折り

50

ついている折り筋で
中わり折り

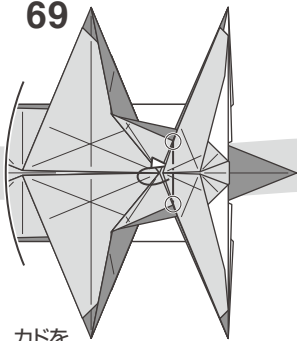


68



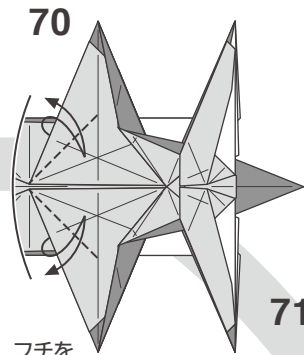
カドを一番手前のすき間に差し込む

69



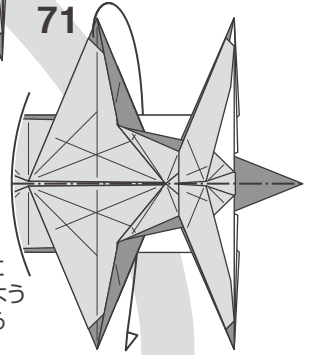
カドを○を結ぶ線で後ろへ折る

70



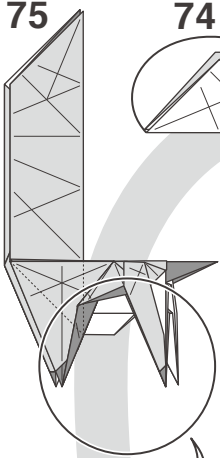
フチを折り筋に合わせて折り筋をつける

71

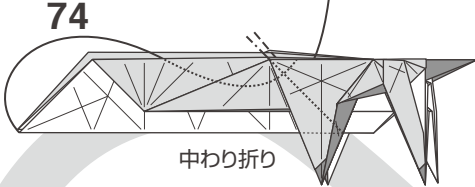


平らに戻すように折る

75

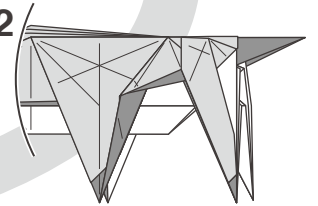


74

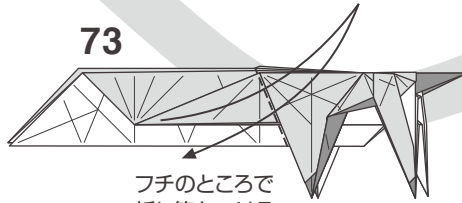


中わり折り

72

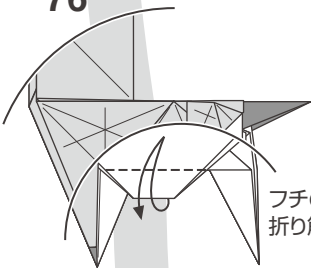


73



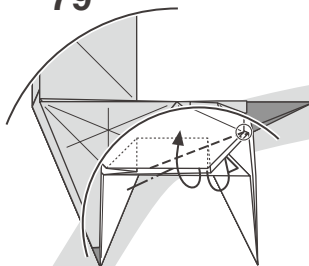
フチのところで折り筋をつける

76



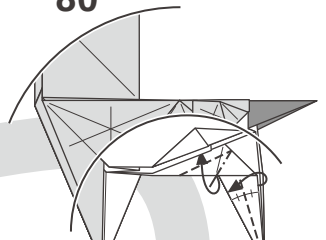
フチのところで折り筋をつける

79



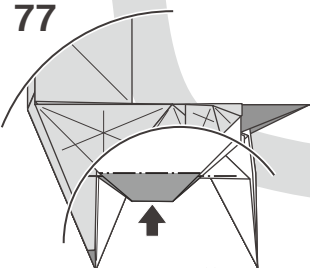
カドを斜めに折る

80



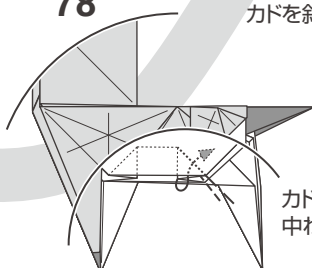
半分の角度で引き寄せるように折る

77



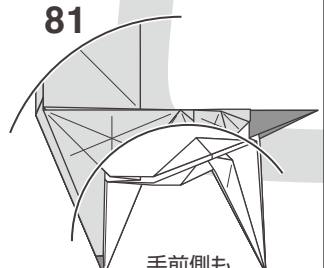
つけた折り筋で沈め折り (Open sink)

78

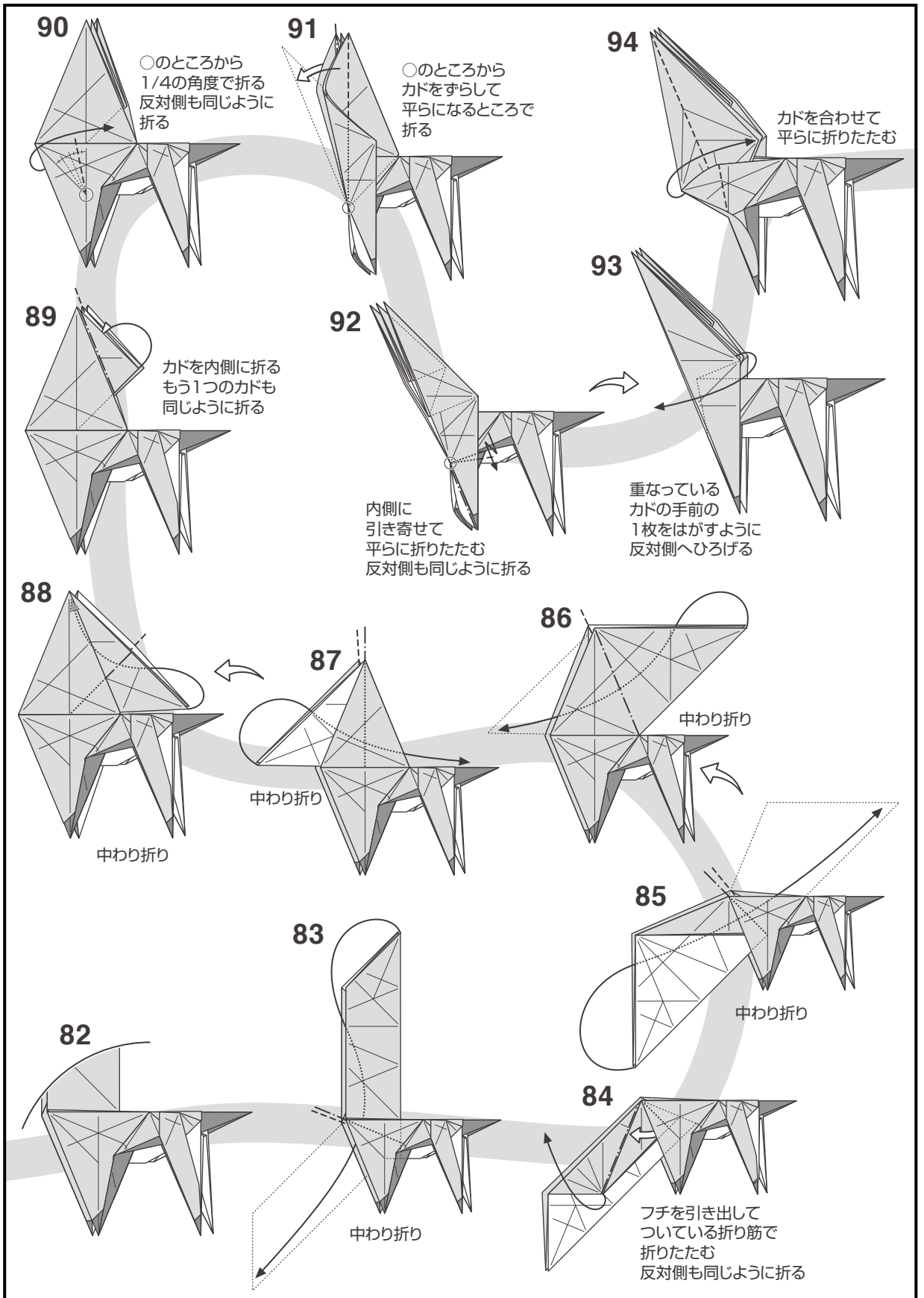


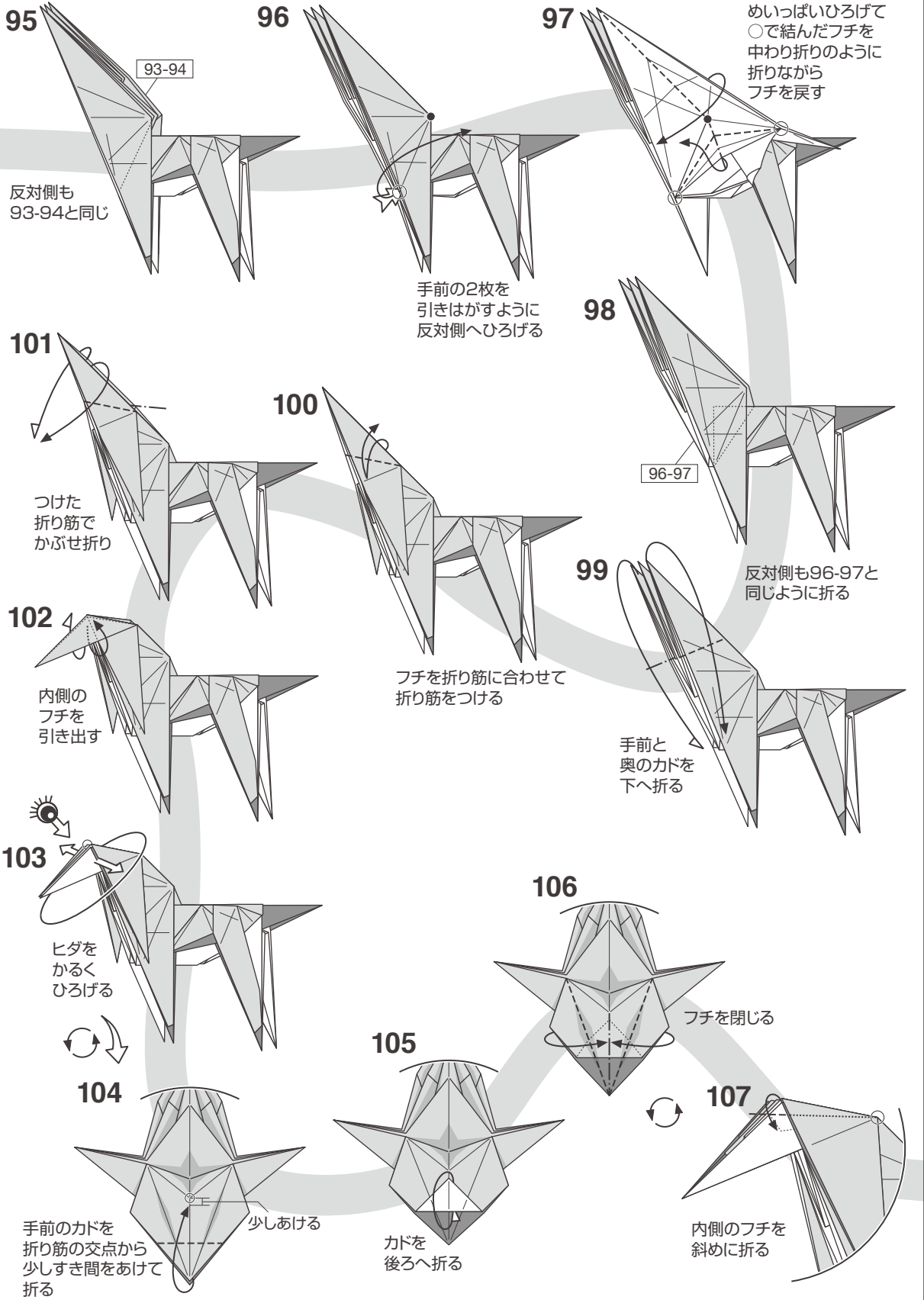
カドを中わり折り

81



手前側も同じように折る





95

93-94

反対側も
93-94と同じ

96

97

めいっばいひろげて
○で結んだフチを
中わり折りのように
折りながら
フチを戻す

手前の2枚を
引きはがすように
反対側へひろげる

98

96-97

101

つけた
折り筋で
かぶせ折り

100

99

反対側も96-97と
同じように折る

102

内側の
フチを
引き出す

フチを折り筋に合わせて
折り筋をつける

手前と
奥のカドを
下へ折る

103

ヒダを
かるく
ひろげる

106

フチを閉じる

104

手前のカドを
折り筋の交点から
少しすき間をあけて
折る

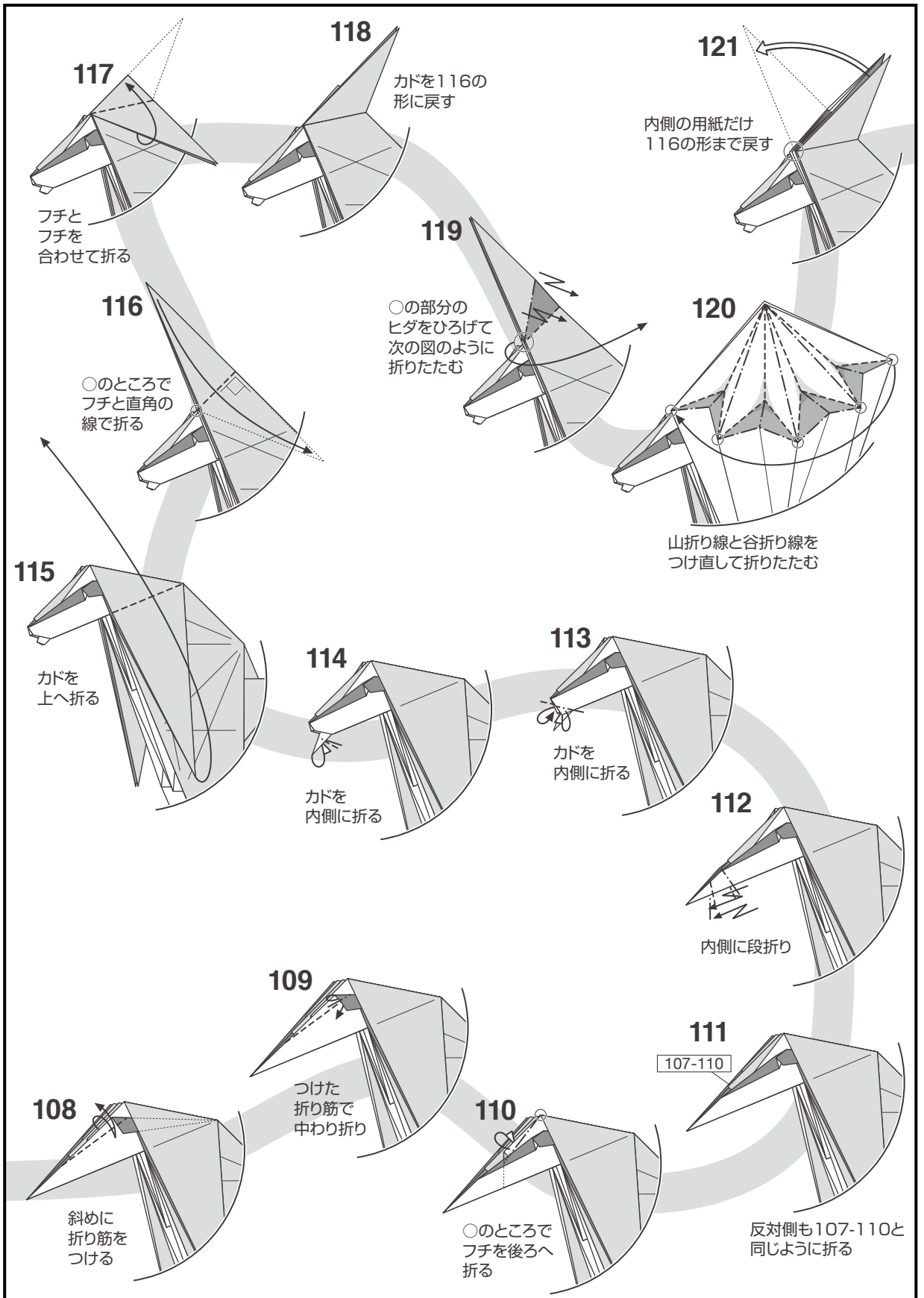
少しあける

105

カドを
後ろへ折る

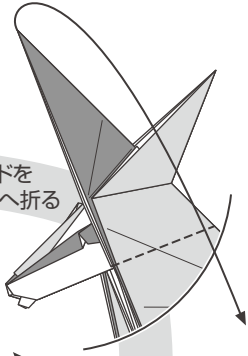
107

内側のフチを
斜めに折る



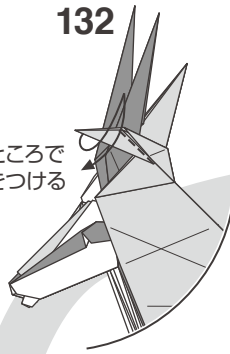
122

カドを
下へ折る



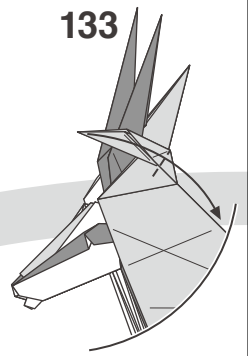
132

フチのところで
折り筋をつける



133

カドを下へ折る

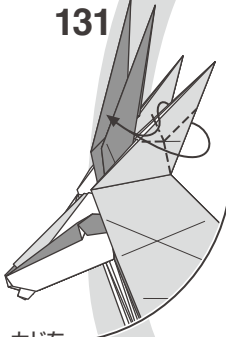


123

☆のフチを
中わり折りのように
折りながら
カドを上へ折る

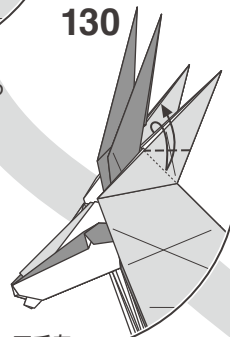


131



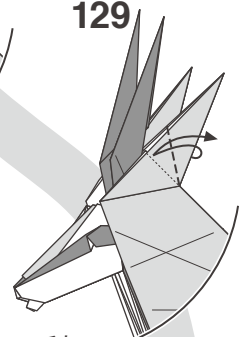
カドを
つまむように折る

130



フチを
内側のフチに合わせて
折り筋をつける

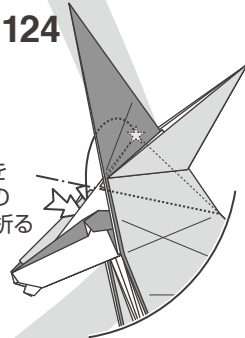
129



フチを
内側のフチに合わせて
折り筋をつける

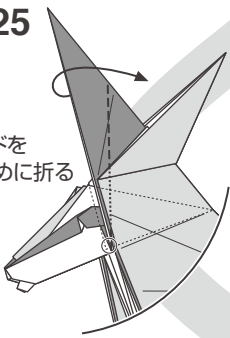
124

☆のカドを
すぐ後ろの
すき間へ折る



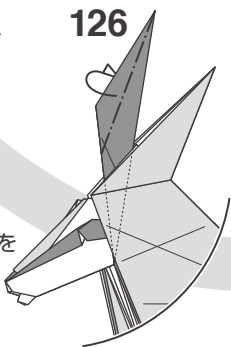
125

カドを
斜めに折る



126

フチとフチを
合わせて
後ろへ折る

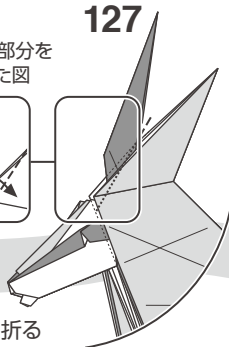


127

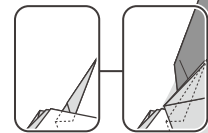
手前の部分を
透過した図



フチを
斜めに折る



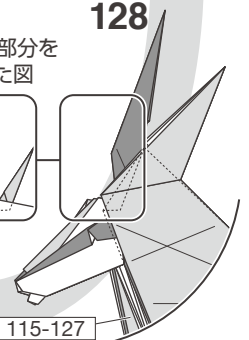
手前の部分を
透過した図

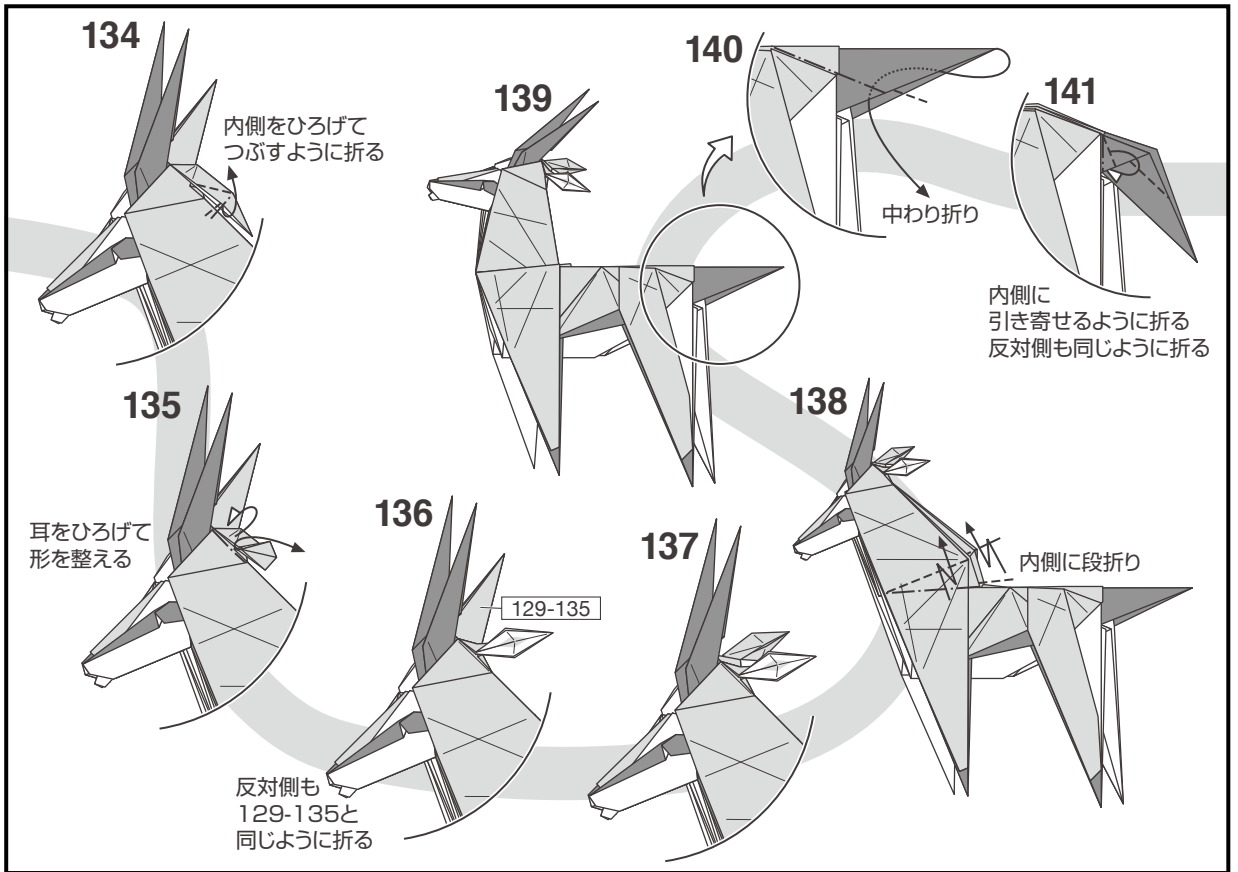


128

115-127

反対側も115-127と
同じように折る





Orisuzi ("Fold-Creases")

折り紙とわたし

My First (and Later) Contact(s) with Origami

栗林美知子

Kuribayashi Michiko

子育てに追われていたある日、図書館でふと目にした折り紙の本に吸い込まれました。折り紙は伝承、誰かから教わるものと思いついていた私にとって、精巧な「折り図」は衝撃的で、その本を手を急いで家路についたことをよく覚えています。慣れない折り図をたどり、完成した作品を光にかざして達成感を得るといふ喜びに目覚めた私は、そこから雑誌や本、通信講座など折り紙と名の付く様々なモノに手を広げ、心ときめく折り図(作品)を見つけては、折って眺めてかざしてと、折り活を楽しんでいました(中でも折り鶴が大好きで、それをデザインに用いたグッズを見かけると、ついつい買ってしまいます)。

20年ほど前、『折紙探偵団』で

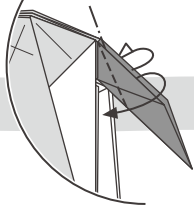
知った青森県浪岡の折り紙展にて、山口先生、岡村先生とお話する機会がありました。ご一緒させていただいたお席が楽しくて美味しくて、その時食べた大きいエビフライを、家に帰って嬉々として折って飾ってしまう位の浮かれ様でした。その後は一年に一度のコンベンション、折り紙尽くしの3日間と懇親会を楽しみに過ごす日々となりました。折り紙を楽しみ分かち合える友がいること、折り紙作家や研究者、学生の皆さん等による数多のスパラシイ創造作品との出会いに圧倒されること、自分とは縁遠い世界だと思っていた学術的な世界へ足を踏み入れているということ、すべてが非日常で、その空間に浸って高揚感を得られる貴重な場は、生きがいです。

去年一昨年にはオンラインのコン

ベンションにも参加しました。その動画を何度も何度も繰り返し視聴して、時には徹折りでへとへとなりながらも楽しんでいます。最近では動画サイトに投稿されている鬼退治アニメキャラの折り紙にハマりました。今まではほとんど不切一枚折りをしていましたが、これは大小様々な紙を折って組み合わせで作ります。細々とした作業が多く眼精疲労になりながらも100体ほど制作し、普段は折り紙に関心のない友人知人からも好評で、折り紙の裾野が広がったような気がしています。

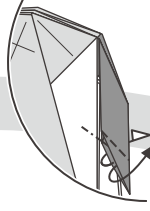
折り紙がくれたご縁は、私の宝物。折り紙は、心のオアシスです。またあの会場の熱気と臨場感に浸れることを期待しつつ、折り活を続けていこうと思います。

142



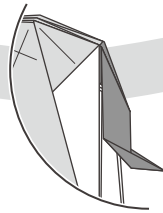
かぶせ折り

143

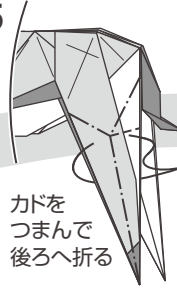


かぶせ折り

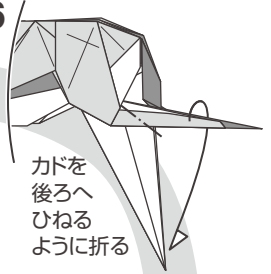
144



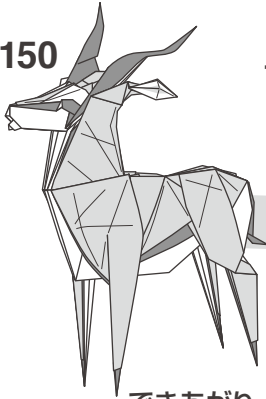
145

カドを
つまんで
後ろへ折る

146

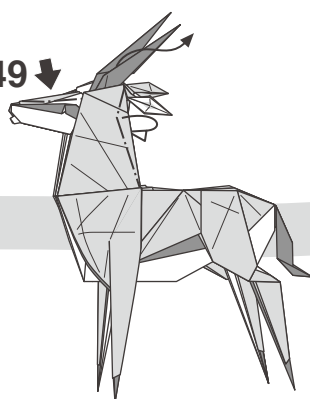
カドを
後ろへ
ひねる
ように折る

150



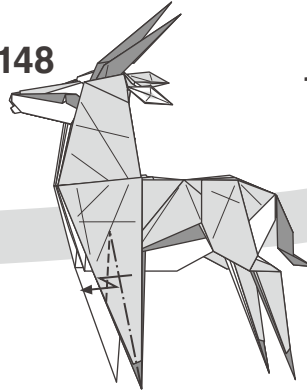
できあがり

149 ↓

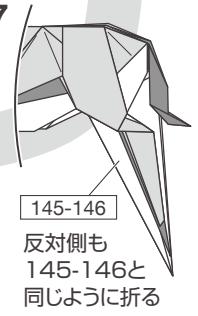


全体の形を整える

148

斜めに段折り
反対側も同じように折る

147



145-146

反対側も
145-146と
同じように折る

折紙三昧

99

Origami-Zanmai (This Origami and That)

パズルチック・ドラマチック

Puzzl-ish and Drama-ish

このコラムで私はたまに将棋のことを書きます。折り紙と将棋はそのパズルチックなところが似ていたりして、数理的な解明が進み、折り紙設計のコンピューター化と将棋ソフトの進展の時代が重なります。将棋の世界ではコンピューターソフトに人間は全く歯が立たなくなっていました。そうすると、面白くなるかといえば、そうでもなくて、昨今はAI判定なる形勢評価が新しい観戦ツールとなって、また、ネット観戦が多様化して盛り上がりを見せています。

何か似ているものを見つけたときは、違いに目を向けることも大切です。囲碁将棋と括られるように、一見するとこの2つはとても似てい

ます。囲碁は将棋より「場合の数」が何桁も多く、また、パズルとしての中身は全く違います。囲碁ソフトの人間越えは、かなり時間がかかると見られていましたが、ほぼ同時期に達成されました。また、白黒の石だけで構成される囲碁は、漢字を使う将棋に比べて国際的です。その意味では、紙一枚で語れる折り紙は囲碁的ではありません。折り紙も「場合の数」の数え上げが研究テーマになったりしますが、勝ち負けを争う囲碁将棋と、勝負を伴わない折り紙はパズルとしての正解への依存の仕方は大いに異なります。

さて、個人的にはこの『折紙探偵団マガジン』のようなマニアによる技芸の言語化を考えるにあたって、将棋観戦記や自戦記などを漠然と思ひ浮

かべることもあります。論文ではないこれらの戦記は、技術論もさることながら、様々な歴史や人の巡り合わせを映し出す重要な役割をします。勝負がテーマとなることが多く、スポーツ観戦記とも共通する記事性は、経済的に新聞社などの大手メディアがプロの将棋囲碁をサポートしてきた背景になっています。二十歳の大天才藤井聡太王将に五十歳を超えた30年前には誰も超えられないと思われた、これまた大天才羽生善治が挑むタイトル戦が1月8日より始まりました。まさに最高のドラマとして語られることでしょう。

西川誠司 Nishikawa Seiji
日本折紙学会 評議員代表

第143回

つままれにゃんこ

Naughty Cat

萩原 元

Hagiwara Gen

Created: 2022/12

Paper Size: 35×35cm

Height: 16cm

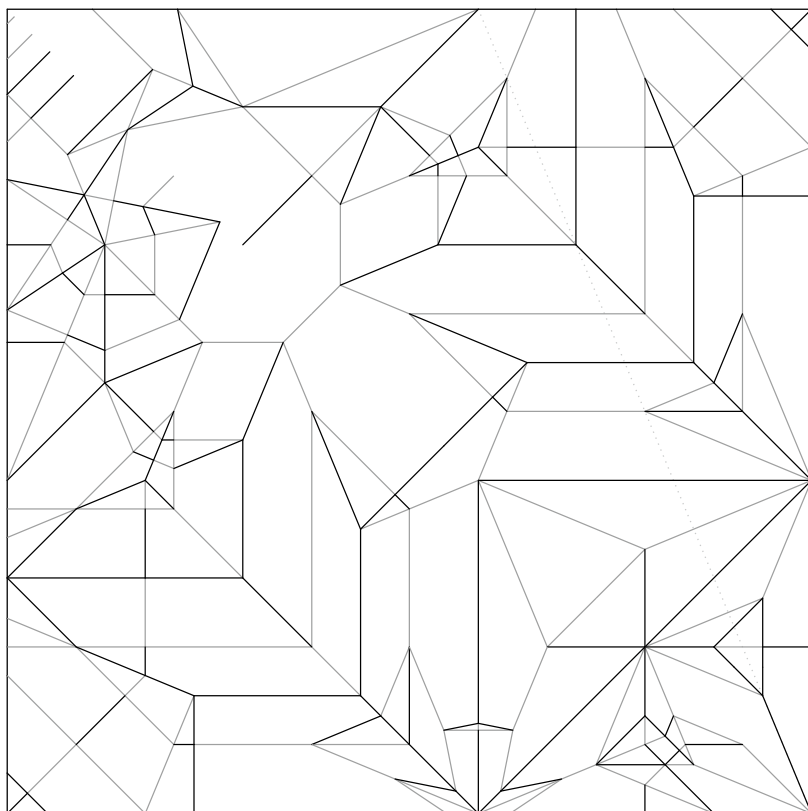
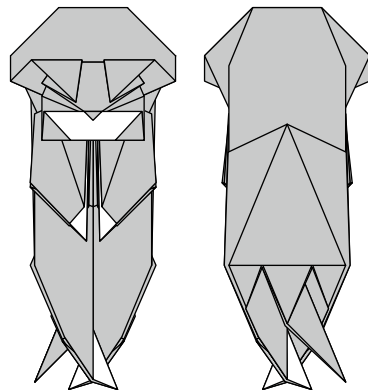
実物はもちろんのこと、写真、イラスト、フィギュアなどでも人気の題材。それが猫です。折り紙でも多くの作家が創作しており、既存の作品数はとても数え切れるような数ではないでしょう。そんな“やり尽くされた”と言っても過言ではない題材で新規性を出すにはどうすればいいか。今回たどり着いた答えは首根っこを掴むでした。もちろん最初からそこを目指していたわけではなく、当初は小鳥の基本形を使った普通の猫を折ろうとしていました。しかし頭部が形になった段階でちょうど首の辺りに邪魔な内部カドができました。普段なら折り込んだり胴体の方でうまく吸収しまったりするところなのですが、この時はこのカドをあえてそのままにすると首を掴めるなど閃きました。持て余しがちな不要な内部カドを有効に使いつつ個性的な仕上がりが期待できるとワクワクしたのを覚えています。そこからは如何に捕まった猫の“諦め感”を出せるかを念頭に仕上げを模索しました。脱力した脚はもちろんですが、首の角度や脚の間から前に出る尻尾なども大事なポイントでした。

展開図は裏から見た状態で、右側が基本形の状態、左側が頭部・脚・尾を少し折り進めた状態です。ヒントとして左側を折り畳んだ状態の図も用意しました。基本的に22.5°で構成されていますが、一部123.75°や11.25°を使っている部分があります。前述の

通り小鳥の基本形がベースであり、各線の折出しの基準もほぼほぼ明確なので線をつけるのは然程難しくないと思います。耳は内部カドを引き寄せるように段折りした状態で頭部をまとめて下へ折ることで折

り出しています。頭の付け根と肩のあたりで半開状態の被せ折りの中割り折りをすることで首の角度を調整するとともに立体感を出してください。

最後に、こちらの作品を某SNSに投稿したところ望外の反響をいただきました。題材の力によるところが大であるとは思いますが、自分の作品が折り紙界隈以外の人にも刺さったのはとても嬉しかったです。



File-96

袋井一樹

Fukuroi Kazuki

○袋井一樹(ふくろい・かずき)
1995年生まれ、兵庫県西宮市出身。神戸のとある病院で診療放射線技師として働いている。職場では親しい人以外には正体を隠している(笑)。

**■折り紙を始めたきっかけは何ですか?**

物心つく前から触れていたと思います。5歳頃から図書館や書店で折り紙本を探し始め、いろんなジャンルの折り紙本に挑戦していました。

特に印象に残っている書籍は、小学校三年生の頃に書店で見つけた『新・おりがみらんど 恐竜のおりがみ』1~3(川畑文昭著)でした。よく分からない斜め線からスタートするのに、なぜか22.5°の基準線でピッタリ合う作品が、不思議で仕方なかったのを覚えています。

■創作を始めたのはいつ頃ですか。

小学校二年生の頃です。

当時、伝承の鶴の形状に疑問を持っていました。伝承の鶴は、本来の鶴の特徴である細長い脚が無く、鶴の特徴を掴んでいると思えませんでした。どうかせめて脚の部分だけでも折り出そうと、紙を弄り始めた事が、創作のきっかけだったと思います。

試行錯誤をしているうちに、鶴の基本形から、偶然ドラゴンのような形状を出力できました。それを小学校の友達に見せると、思いの外ウケが良く、チャホヤされて嬉しくなり、創作にドハマリしていきました。

■影響を受けた作家や、好きな作家はいらっしゃいますか?

私は創作をする上では、中村楓さんや小松英夫さんの作品に強い影響を受けました。

彼らの作品に出会うまで、創作はとにかく複雑に造形をすればするほど立体造形としての見応えは上がり、高い評価を得られると考えていました。

彼らの作品はひと味違い、いかにモチーフの特徴を捉えて、絶妙なバランスで幾何学的な図形に落とし込むかという作風でした。

以来、私は折り紙を一度基礎から見直しました。実際に紙に触る時間を増やし、紙の動き方や厚みなどを時間をかけて何パターンも吟味しながら、"折り紙本来の旨味"が出るまで、何度も試行錯誤するようになりました。

■創作においてのこだわりや、気をつけている点などあれば教えてください。

"引き算の折り紙"をテーマに掲げて創作しています。

同じ形状が出力できるなら、なるべく折る回数が少なく、紙の使用効率が良い事に美学を感じています。

あまり折り込まないシンプルな形状の作品でも、特徴さえしっかり捉えられれば、鑑賞に値する作品になるの

で、モチーフの本質を見極められるように努力しています。

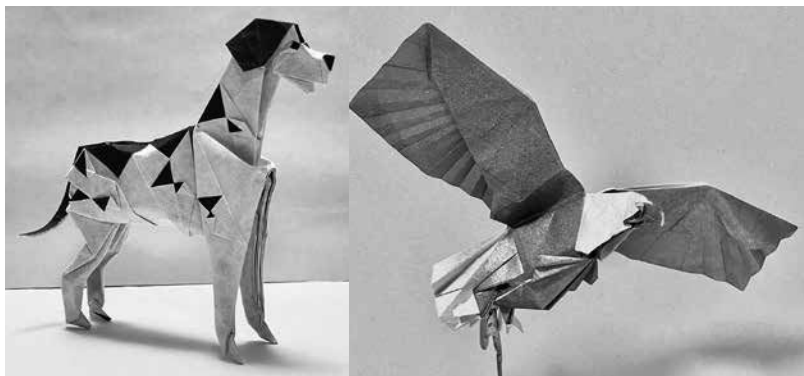
また、作品に"折り紙らしさ"を付与するために、蛇腹や幾何学模様をあえて加工せずにそのまま作品に取り込む挑戦もしています。

拙作「ノコギリエイ」では、ノコギリの部分でギザギザのインサイドアウトのみで表現しました。「ハクトウワシ」では、翼の部分で蛇腹のみで表現しました。どれもパーツとしての個性が強いため、浮いてしまわないように全体に馴染ませるのに苦労しました。

最近では、常に折り図を描く前提で創作をするようになりました。今まで、展開図などはSNSによくアップしていたのですが、折り図を描くようになってから、折ってもらえる機会が増えました。自分の作品を誰かに折ってもらうことが、大きなモチベーションとなっています。

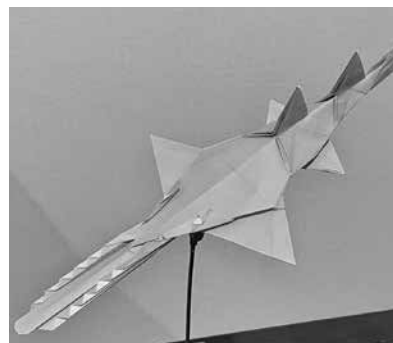
■今後の活動目標などについて教えてください。

自身の折り紙作品集を出す事です。仕事と両立しながらでの創作活動になるので、どうしても時間的制約があり、体力勝負になってしまいます。しかし、仕事終わりにもう一踏ん張りする事で、少しでも早く夢を実現できるよう、頑張っていけます。



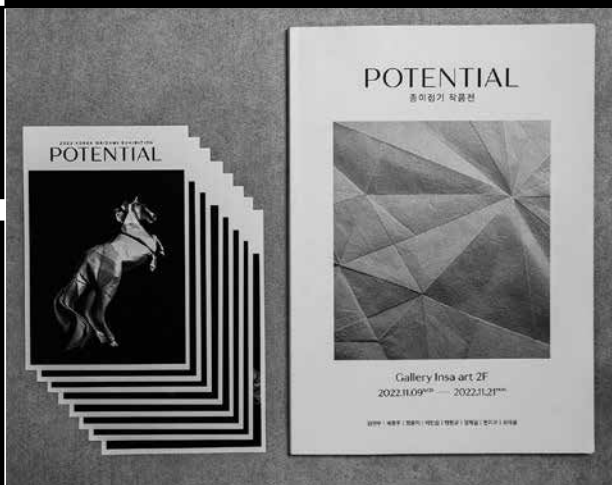
ダルメシアン

ハクトウワシ



ノコギリエイ

Rabbit Ear つまみおり Information



図録はYoo Tae Yong氏のデザイン

◆2022 韓国<POTENTIAL>折り紙展示会

原稿：Park Jong Woo
翻訳：Yoo Tae Yong

2022年11月9日から11月21日までソウルの仁寺洞で<POTENTIAL>というタイトルの折り紙展示会を行いました。

長い間チームワークを固めてきた'ORIGAMI PRO'のメンバーたちが意気投合して芸術としての折り紙を一般人に広く知らせるために企画した展示でした。2022年1月にあったメンバーたちとの新年会で初めて具体的な企画案が出てきて、展示場から予約することが急務だと思って皆やる気が満ちたとき迅速に進めました。

教育や遊びではなく「芸術」というところを強調したかったので、展示のコンセプト、作品主題の選定、作品の制作などにもかなり力を入れました。また、8人の作家たちが各自最低でも4

点以上の作品を作るべきだったので統一性のために紙はすべて白い紙だけを使うことに決めました。合わせて34点の作品を展示し、この中で創作作品が26点、他作家の作品が8点でした。

正直に言いますと、韓国国内でこのような折り紙展示会が行われるのは初めてのことだったので、期待よりも心配が先に立ちました。しかし、このような心配とは違って、2週間の累積訪問者は3,000人を超え、400冊の展示会図録と800枚のはがきも完売するなどの快挙を成し遂げました。作品を作るだけではなく台座、照明もすべて直接購入して設置し、写真の撮影、図録制作など自主的に解決したので、さらに胸がいっぱいになる瞬間でした。

また、これを通じて私たちは折り紙が大衆に芸術として認識されるという大切な可能性を確認することができました。

これからも韓国内外を問わず折り紙を知らせる活動を続けていきます。'ORIGAMI PRO'チームの皆が本業のある社会人なので、毎年は難しいと思いますが、最低でも2年に一度はこのような展示会を開催しようと思います。次の展示は2024年11月くらいになると思っているのですが、日本にいらっしゃる方たちも旅行がてら立ち寄っていただければ、良い交流の場になると思います。韓国と日本の作家たちがお互いいろんな活動でいい刺激を与え合いながら一緒に発展していく仲になりたいです。



会場展示風景



展示作品の図録

◆布施知子展の開催のお知らせと協賛金寄付のお願い

2023年5月4日から5月13日まで、新潟県長岡市で、布施知子さんの展覧会が開催されます。日本折紙学会も後援団体のひとつとして協力します。国内外の多数の美術展に作品を出品している布施氏ですが、今回の展覧会は、布施氏の折り紙活動の歩みを振り返り、かつ、美術作品としての折り紙の未来に思いを馳せる特別な機会になると期待しています。なお、長岡市は布施氏の故郷です。今回の展覧会の開催にあたっては、氏の学友などが実行委員会をたちあげ、準備運営に奔走しています。その実行委員会では、現在、印刷物などに用いる原資として協賛金を募っています。趣旨にご賛同されるかたは、ご協力ください。

◆展覧会概要

名称: Origami 布施知子の世界
OROCHI in 長岡
会期: 2023年5月4日から5月13日
会場: シティホールプラザ アオーレ長岡(新潟県長岡市大手通り1-4-10(長岡駅直結))
内容: 大型のインスタレーションを含む布施知子作品の数々
入場料: 500円(高校生以上)
主催: 布施知子折紙展実行委員会
後援(予定含む)
: 長岡市教育委員会、日本折紙学会、日本折紙協会、新潟日報社、読売新聞新潟支局、NST新潟総合



テレビ、BSN新潟放送局、(公財)長岡市文化振興財団

webサイト: <https://origamiten-nagaoka.themedia.jp>

◆協賛金寄付要項

寄付金額: 法人・団体: 一口1万円より
個人: 一口千円より

振込先: 第四北越銀行 与板支店
店番号410 普通口座 口座番号

6303557 布施知子折紙展実行委員会代表・渡辺久美子

期限: 3月31日

備考1: 振込手数料はご負担ください。
備考2: 寄付1万円以上の方は、入場パンフレットにてご紹介させていただきます。

問い合わせ: subaru1687@gmail.com

◆美濃の手漉き和紙 =和紙レタル=

11月のデザインフェスタで知り合った「和紙レタル」を紹介する。ブースはカラフルな和紙が整然と並べられ、ひととき華やかさが目立った。

妹は美濃で手すき和紙職人として日々活動し、姉はその和紙に色付けするなどの加工を手掛ける姉妹ユニット。大口の顧客を持たず、和紙を使って個人で活動をする人々を主に販売対象としている。今までに出会ったことがないような和紙を探している人たちにぜひ自分たちの和紙を届けたいと願っているそう。そのために、できるだけ安価で独自のセンスで色を付けるなどの差別化を意識しているとのこと。原料から染める先染めや後染めなど、染め方にもこだわって試行錯誤

を続けている。できるだけお客様の要望にお応えしたい、とオーダーも受け付けていて、完成品を見てもらい気に入ったら購入していただくというスタンスを取っている。日本の中ではもちろんのこと、世界中にも発信したいと夢は膨らむ。

ホームページからオンラインショップに飛ぶことができ、そこには全商品が掲載されている。現在のところ実店舗がないので実際に手に取って見てもらえるのはクリエイター向けの大規模イベントでの対面販売が主流となる。(次回出展は5月のデザインフェスタ: 東京ビッグサイトにて) 活動の詳しい予定については、ツイッター、インスタなどで逐次発信しているのでは非

見ていた
だきたい。

そんな
中、耳寄り
な情報も。
美濃市内
にて和紙
工房を建
設中。そこ
ではお客
様と打ち
合わせを
したり、
店頭販売
できるよ
うなスペ
ースも作
りたいそ
う。4月以
降に稼働
予定。完
成したら
ぜひ訪問
してみたい。

「和紙レタル」HP <https://washiletal.wixsite.com/index>



川崎亜子

◆バックナンバープレゼントキャンペーン実施中

日本折紙学会では、2022年12月10日から2023年3月31日に『折紙探偵団マガジン』第33期(193号-198号)を申し込んでいただいた方へ、33期の既刊とともに、11期-28期のバックナンバーからご希望の期一式(6冊)をプレゼントするキャンペーンを実施中です。「申し込んでいただいた方」というのは、12月10日以降に新規購読・新規会員又は継続手続きを行なった

方で、プレゼントの1期分の送料も当会が負担しています。新規会員を増やすことを目的としており、1月14日時点でキャンペーンの利用者は42名(1月17日現在)となっており、効果を表しています。本号を読んでいる、12月10日以前に第33期の購読手続きを行なっている方は残念ながら対象外となりますが、もし本誌の購読に興味をもつ方が周囲にいましたら、この機会にぜひ

購読をしていただけるよう誘ってみたいと思います。また、来期の第34期(199号-204号)を申し込んでいただいた方(継続を含む)にも新たなキャンペーンを予定していますので、楽しみに待っててください。

詳しい案内は日本折紙学会(JOAS)のホームページでバックナンバーの案内をしています。

<https://origami.jp/register/campaign/>

川畑文昭個展開催 3月5日(日)～3月12日(日)

3月5日(日)～3月12日(日)に愛知県尾張旭市のスカイワードあさひ(4Fギャラリーあさひ)にて、日本折紙学会評議員の川畑文昭氏による個展が開催されます。この会場では毎年尾張旭市の夏の恒例展示会として東海友の会メンバーにより折紙展示が行われています。今回は川畑氏個人の展示会となります。

今までの創作活動を振り返りながら、過去の作品や新作を含めた、折紙作品約150点、切り起こしペーパークラフト約30点を展示予定です。

会期中は無休。午前10時～午後5時までの開場となります。入場無料。お問い合わせは、スカイワードあさひ[尾張あさひ市城山町長池下4517-1(0561-52-1850)]まで。



Facebook の投稿より

SNSなどを使ってご自分で折った作品の投稿が多くみられます。今回はFacebookで見つけたJOAS会員の松江市在住の花岡恵さんが投稿された作品紋付袴鶴を紹介します。

花岡さんはコンプレックスの作品がお好きなようで、探偵団マガジンや探偵団折図集や他のコンプレックス系の本から作品を選んで投稿されることが多いようです。



折紙作品 186

SNSで折紙の発信を始めて丸4年。5年目突入の作品は満田茂さんの紋付袴鶴です。15cmの折紙では折れなかつたので30cmの折紙を使用しました。第27回折紙探偵団コンベンション折図集Vol.27に掲載されています。

(Facebookより)

編集後記

■明けましておめでとうございます。■本年もJOASをよろしく申し上げます。■若いクリエイターの成長がめざましい。■そして、折紙作家と名乗る方が増えている。■海外の方は折紙アーティストと名乗る方が多い。■そして、プロを目指すといった方も多い。■プロとは何を指すのだろうか。■大半が折紙で生活をしていくことを目指しているようだ。■簡単ではないと思うが、そういう目標の方が増えることは世間に向けた折紙の認知向上に役立つのではないかと。■ただ、折紙がうまいというだけでは難しい。■コンプレックス折紙の世界で低年齢化が進んでいる。■時々、将来折紙のプロになりたいという相談がくることもある。■私には答えられない。■才能を生かす方法は色々あると思う。■頑張ってください。■プロといえばゴルフの世界ではティーチングプロというのがあるので、折紙教室を持って講師となるのもプロの道なのかなと思う。(や)

日本折紙学会公式HP
<https://origami.jp/>

折紙探偵団マガジン

2023年1月25日発行 第33巻5号 通巻197号

発行所/日本折紙学会

〒113-0001

東京都文京区白山1-33-8-216

Phone & Fax / 03-5684-6080

発行人/西川誠司

編集人/山口 真

編集スタッフ/おりがみはうす

デザイン/おりがみはうす

翻訳/立石浩一

●本誌掲載記事の無断転載を禁じます。

2023年1月からのオンライン例会は新しい期間(1月～3月)のオンラインパスポート(22Q4)が必要です。学会ホームページからお求めください。

東京友の会 ※オンライン例会

●2月4日(土) 14:00(13:30入室開始)

講師:萩原 元

作品:動物園のパンダ、ゴリラ、ライオン

Panda, Gorilla and Lion in the zoo

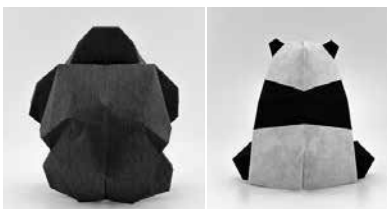
使用用紙:15センチの用紙(動物にあう色)

●3月4日(土) 14:00(13:30入室開始)

講師:北條高史

作品:リボンベル/Ribbon Bell

使用用紙:24センチ以上の用紙



九州友の会

会場=佐賀県立アバンセ/アバンセ参加費=500円、中学生以下100円(パスポート保持者は大人300円、中学生以下無料)

●2月26日(日) 14:00-16:00

会場:Zoomとアバンセ(第4研修室)

講師:未定/作品:未定

●3月26日(日) 14:00-16:00

会場:Zoomとアバンセ(第3研修室B)

講師:未定/作品:未定

関西友の会

●次回の例会は未定。決まり次第ウェブサイトでご案内いたします。

東海友の会 ※オンライン例会

●2月18日(土) 14:00-16:30

講師:亀井浩平/作品:ラテアート

講師:田中幹人/作品:オコジョ他

●3月18日(土) 14:00-16:30

講師:竹内 啓/作品:観葉植物 他



静岡友の会 ※折紙は各自持参

●2月12日(日) 13:30-

オンライン例会

講師:未定/作品:未定

●3月12日(日) 10:30-15:30

リアル例会

会場:興津生涯学習交流館

講師:未定/作品:未定

東北友の会 ※折紙は各自持参

基本的に毎月第3日曜日の午後開催しています。メール k-fuku@mve.biglobe.ne.jp (福島邦幸) までお問い合わせください。

■ORIGAMI TANTEIDAN MAGAZINE / No.197 / Published on 25, January 2023 by Japan Origami Academic Society, 1-33-8-216 Hakusan Bunkyo-ku 113-0001 Tokyo JAPAN / Cover Photo : Thomson's Gazelle Produced by Katsuta Kyohai: Photographed by Origami House / Publisher : Nishikawa Seiji / Editor in Chief : Yamaguchi Makoto / Editor : Origami House / Editorial Design : Origami House / Translator : Tateishi Koichi

おりがみはうす商品案内

このページの商品の取扱いはすべておりがみはうすです。
日本折紙学会とは別になります。

ATTENTION! : This advertisement is for Japan-internal use only.
For overseas shipment, please refer to the OrigamiHouse Web Site.



第27回 折紙探偵団コンベンション 折り図集 Vol.27

好評発売中!

日本折紙学会 編 / 2,860円(税込) / 送料 440円 / B5判 / 全272頁 / 35作品収録
2022年11月に行われたオンラインコンベンションに合わせてついに発売。

書籍名 / 著者・編者	価格(税込)	送料	内容
萩原 元折り紙作品集	萩原 元 著 3,520円	国内一律 1冊 440円 (梱包込) 2~3冊= 650円 4冊= 1,090円 5~6冊= 1,300円 ※4冊以上の 発送は梱 包等の都合 上2つに分 けての発送 になります。	B5判 / 全180頁 / 20作品収録
勝田恭平折り紙作品集	勝田恭平 著 3,520円		B5判 / 全180頁 / 13作品収録
神谷哲史折り紙作品集3	神谷哲史 著 4,400円		B5判 / 全232頁 / 15作品収録
川畑文昭折り紙作品集	川畑文昭 著 3,630円		B5判 / 全180頁 / 16作品収録
ユ・テヨン折り紙作品集	ユ・テヨン 著 3,190円		B5判 / 全180頁 / 20作品収録
クエンティン・トロリップ折り紙作品集	クエンティン・トロリップ 著 3,190円		B5判 / 全180頁 / 19作品収録
神谷哲史作品集	神谷哲史 著 4,400円		B5判 / 全228頁 / 19作品収録
神谷哲史作品集2	神谷哲史 著 4,400円		B5判 / 全232頁 / 16作品収録
小松英夫作品集	小松英夫 著 4,400円		B5判 / 全232頁 / 20作品収録
折紙図鑑 昆虫II	ロバート・J・ラング 著 3,850円		B5判 / 全196頁 / 18作品収録
西川誠司作品集	西川誠司 著 3,520円		B5判 / 全196頁 / 32作品収録
面~The Mask~	布施知子 著 3,630円		B5判 / 全200頁 / 27作品収録
エリック・ジョワゼルー折り紙のマジシャン	山口 真 編著 5,280円		B5判ハードカバー / 全144頁 / カラー80頁
第26回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.26	日本折紙学会 編 2,640円		B5判 / 全272頁 / 47作品を収録
第25回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.25	日本折紙学会 編 2,750円		B5判 / 全304頁 / 57作品を収録
第24回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.24	日本折紙学会 編 2,750円		B5判 / 全304頁 / 61作品を収録
第23回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.23	日本折紙学会 編 2,750円		B5判 / 全304頁 / 64作品を収録
第22回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.22	日本折紙学会 編 2,750円		B5判 / 全304頁 / 61作品を収録
第21回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.21	日本折紙学会 編 2,530円	B5判 / 全288頁 / 57作品を収録	
第20回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.20	日本折紙学会 編 2,530円	B5判 / 全288頁 / 61作品を収録	
第19回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.19	日本折紙学会 編 2,530円	B5判 / 全288頁 / 53作品を収録	
第18回折紙探偵団コンベンション折り図集vol.18	日本折紙学会 編 2,420円	B5判 / 全272頁 / 48作品を収録	

商品名	価格(税込)	送料
株式会社トーヨー 単色おりがみ色見本帳61色	385円	140円
『折紙探偵団マガジン』専用ファイル	825円	430円

※2冊、2セット以上の送料はお問い合わせください

折り紙用紙専門のオンラインショップ!

おりがみはうす オンラインショップ

<https://www.olshop.origamihouse.jp/>

おりがみのトーヨーの商品を

25%引きで販売中!*

※創作専科・アウトレット商品等を除く / 発送は週1回木曜日

詳しくは
検索サイトで

おりがみはうす

検索

商品のお申し込み方法

先に郵便振替か現金書留で料金(商品価格+送料)をお送り下さい。入金を確認後、商品を発送させていただきます。ご希望の商品名と連絡先の記入(郵便振替の場合は振替用紙の「通信欄」に記入)をお忘れないうえお願いします。

郵便振替番号 **00120-9-715400**

加入者名 **おりがみはうす**

※PayPalによるお支払いも可能です。

詳細は公式HP <https://www.origamihouse.jp/>まで

※折紙探偵団の購読申込みとは別の口座です。くれぐれもご注意ください。

※郵便振替用紙は郵便局備え付けのものをご利用ください。

※現金書留の場合は下記の住所へお送りください。

※商品のお届けは通常、送金から約1週間~10日です(お盆・年末年始等を除く)。

※書籍と紙はそれぞれ別発送となります。

※商品名、数量及び料金をよくお確かめの上ご注文ください。



ギャラリー **おりがみはうす**

〒113-0001 東京都文京区白山1-33-8-216

TEL:(03) 5684-6040 FAX:(03) 5684-6080

E-mail : info@origamihouse.jp

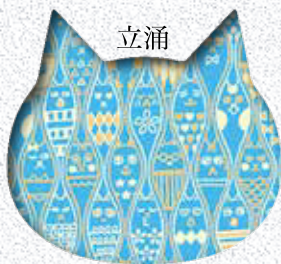
月~金 12時~15時 土・日・祝 10時~18時

猫 + 文様柄 = 猫

アーティスト/イラストレーター
ai sayama

だらけ千代紙

©ai sayama All Rights Reserved



立涌



七宝



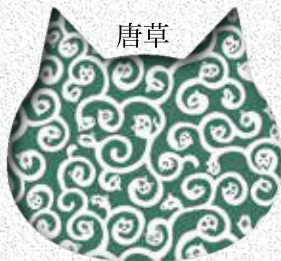
波



唐草



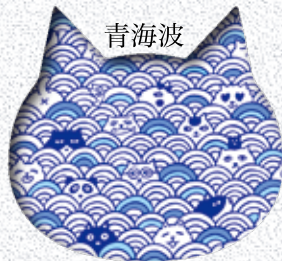
七宝



唐草



亀甲



青海波



文様柄をモチーフにした
猫だらけの千代紙です

15.0×15.0cm

8柄・5枚・40枚入



2種類の折り方がついています。

¥380 (税抜き)

猫だらけ文様千代紙 (15.0)

 株式会社トヨ
http://www.kidstoyo.co.jp

●写真は印刷ですので実際の商品と色などが多少異なる場合があります。
※表示価格には消費税は含まれておりません。※内容・デザインは一部変更になる事があります。
本社 〒120-0044東京都足立区千住緑町2-12-12 TEL03-3882-8161
大阪支店 / 名古屋営業所 / 福岡出張所

About - Origami Tanteidan Digest

The objective of the Origami Tanteidan Digest is to share the articles on Origami Tanteidan magazine and provide an English summary of most (but not all) text. The numbers indicated as "Page xx" refer to the page numbers of the original articles in the magazine. While not all content is translated, it should give you an idea about what the article is about. Depending on the context, "Translator's Note" will be provided for clarity or terms that might not translate easily either because of the language or technical nature. We hope you will enjoy. Let us know if there is anything we can do to improve or any further comments. Please contact our editorial department at: editor@origami.jp

Table of contents

- (Page 7) Origami and Its Neighbors
- (Page 13) Close-up
- (Page 16) From the Bookshelves of the JOAS Library
- (Page 18) Here We Are, THE ORRRIGAMI TANTEIDAN
- (Page 36) Orisuzi ("Fold Creases")
- (Page 37) Origami-Zanmai (This Origami and That)
- (Page 38) Crease Pattern Challenge
- (Page 39) Paper Folders on File
- (Page 40) Rabbit Ear Information
- Editor's Notes

Translated by Marcio Noguchi

(Page 7) Origami and Its Neighbors
#116 – Re-reading Many Times
By Tomoko Fuse

I was born in Yoita-cho, Nagaoka City, Niigata Prefecture, which is famous for carpenter's knife. There are also several master craftsmen. I had several classmates whose occupation was blacksmithing. There were blacksmiths here and there in the town, and hammers resounded early in the morning. Most of them are now out of business or downsized.

My mother's parents' home was a field blacksmith "Matasuke," which mainly made sickles, hoes, and kitchen knives. Matasuke had several live-in apprentices and was always lively. However, it went out of business several decades ago, and now the house and the blacksmith are vacant.

My grandfather, two generations ago, after retiring to his son, became an avid reader, in particular, "Ieyasu Tokugawa" by Eiji Yoshikawa. I bought several volumes and read them several times, sitting on a wicker chair in the hallway with nose glasses. Seeing that, everyone laughed and said, "Grandpa is reading the same book again," but what about me these days? I look just like grandpa. Until a few years ago, I used to go to the library so at home I always had many books. Now I read in sequence the titles I like from a small collection. I can't get enough of it. I notice some parts that I skipped, or where I got emotional in the past. Of course, I sometimes go to the library and borrow new books.

What kind of origami models do you want to fold

repeatedly? A model that is impressive no matter how many times it is folded. A model that makes you smile no matter how many times you fold it.

These days, I'm focusing on installations, and many of them are very difficult to fold, so I can't imagine folding it again. At times like that, when I see cute and beautifully decorated origami models on the street or in train stations, I smile and imagine the happy moments of the people who made them. I believe that folding paper and smiling at each other is the origin of origami, but my current position has shifted from that. But let's just say goodbye. It's okay to read the same book again and again, even if it's part of aging.

At night, instead of the deer that used to cry, we now have foxes which sing every night under the starry sky with the cold air. It was a loud, high-pitched sound that used the strength of the whole body.

(Page 13) Close-up
27th Origami Tanteidan Convention Report
By Seiji Nishikawa

Seiji Nishikawa = Born in 1963 in Nara Prefecture. He is a board member of the Japan Origami Academic Society (JOAS). Involved with Online continuation, back to in-person, and diversification continuity.

The 27th Origami Tanteidan Convention took place online for three days, from November 25th to 27th, 2022. David Brill (UK) and Jeremy Schafer (USA) were the invited special guests. It was held on a virtual space

exchange, which included 38 classes and academic lectures, 3 overseas teachers from Korea and the United States, and a Mystery Puzzle game in Gathertown. There were 200 participants including about 20 from overseas.

Overview

In response to the Covid-19 Pandemic, Japan Origami Academic Society (JOAS) has been focusing on online operations since 2020 and has planned online conventions in addition to regular meetings to maintain origami exchanges. The 27th Origami Tanteidan Convention will be the 4th online convention counting from the Kyushu Convention in May 2021. From around July, we started planning the structure, recruiting instructors, editing of the Origami Collection book (supported by Origami House), a creating the web site, and preparing for the online general meeting to be held at the same time. This time, we tried to create an "in-person" convention feeling by increasing the number of options for each time slot for a total of 4 parallel classrooms. In the newly introduced Gather Town, information exchanges on topics such as mystery-solving game project, academic lectures on the theme of origami, and the Origami ATC Gallery naturally occurred in various places, and it seems to have played a role in promoting mutual exchanges among participants. We would like to express our gratitude to the many volunteers who led and cooperated in planning the convention, and to everyone who enjoyed the convention.

<Comments from invited lecturers>

By David Brill

It was a great honor to be one of the invited guests at the 27th JOAS online convention. The flagship Origami Tanteidan sets extremely high standards, with its meetings, publications, creators, and organizers, and Zoom conventions are a great way to teach even quite complex designs to enthusiasts everywhere.

During the convention, I told my Brilliant Origami Story about my first influences and my latest origami experiments. Later I taught Mount Fuji Variations showing several curious developments of a tapering box.

We hope to meet you all in person at a face-to-face Tanteidan convention as soon as possible!

By Jeremy Shafer

Dear Tanteidan members, thank you for welcoming me as a virtual special guest to your convention. The Camel Head Pop Up Card class was my debut of that model and I still haven't taught it anywhere else! I'm planning to teach it soon on my YouTube channel,

not just the camel head, but the whole camel (which includes the head)! Here's the thumbnail to my Impossible Triangle tutorial which is the most recent video uploaded to my YouTube channel, www.youtube.com/jeremyshaferorigami

<Classes/Program>

By Miyuki Kawamura

This time, a total of 38 courses were held in parallel on 4 Zoom "rooms", for origami models in a wide range of levels such as simple, intermediate, complex, and geometric. There were several classes by elementary school teachers and there were many female teachers. David Brill, one of the special guests, presented many slides of the roots of ideas and example photographs, and Koichi Tateishi's accurate interpretation made for a very interesting 90 minutes. Jeremy Shafer's lecture was full of laughter from the start, and models jumped from one to another, like a jack-in-the-box. Interpreter Gen Hagiwara's splendid ad-libs were a "must-see". In the lecture on Friday, there were many models presented and slides, and it was a large volume that traced the transition of the origami history of the two with Koshiro Hatori as an interpreter. Please, check the recordings.

Yoo Tae-Yong and Park Jong-Woo were instructors from South Korea, both fluent in Japanese and easy to understand, and their cute models were popular.

There were several teachers who were new to Zoom classes, but I think the overall process went very smoothly. The moderator, who managed the sessions, also had the task of switching the screens and taking notes, which was an essential role for an easy-to-see and stress-free class. There were many lectures this time, and there were many cases where the moderator concurrently served as a teacher. In such cases of concurrent sessions, there are small number of people who spoke during the class, so it might have felt a little lonely. However, according to the survey questionnaire, it seems that it was generally accepted favorably. The interpreter also acted as moderator for the special guest classes. All lectures and classes, including the doctoral research videos and Origami ATC exchange meeting reports, are available in the recordings. Those who have registered can watch them until February 28, so please enjoy.

In the survey questionnaire, with regards to the class lineup, there were two voices, one saying that they were happy that there were many practical and simple models, and another that said they wanted more complex ones. In addition, many commented that they were very grateful for the fact that they could easily participate in the Zoom convention even from a distance, and that they were able to watch the classes sometime later. But there were also quite a few

who also said that they would like to see everyone in person at an "actual" convention sometime soon. It will depend on the situation, but I think we will definitely explore the possibilities.

<Doctoral Lectures>

By Yohei Yamamoto

At the "Doctoral Research Video Screening" held on the first day of the convention, three people who recently obtained doctoral degrees in research on origami presented their research.

The first one was Koji Ouchi, who received a doctorate in information science from the Japan Advanced Institute of Science and Technology. Ouchi was interested in the difficulty of creating origami, and to consider the difficulty, he enumerated single vertex developments that can be folded flat for each angle system.

The second one is Eiko Matsuura, who received a doctorate (education) from Toyo University. In order to resolve the question of whether origami is good for education, Matsuura considered the activities to disseminate origami around the world as non-formal adult education, and unraveled its history.

The third one was me, Yohei Yamamoto, who received a doctorate (engineering) from the University of Tsukuba. I was interested in twist fold patterns and proposed construction methods and applications using those patterns.

The presentations of the three were pre-recorded video lectures, but since they often participated in Gather.Town, opinions were exchanged through spontaneous discussions with other participants. In addition, the presenters have something in common that after experiencing working as member of society, we went on to the doctoral track with the theme of their own hobby activities. This makes us realize that everyone has an opportunity to learn. If you also have a hobby that you want to pursue academically, you may become a doctor in the future.

<Origami ATC Study Group Report>

By Eiko Matsuura

The OrigamiATC online event was held on November 25th (Friday) from 21:00 to 1 hour. The 31 cards collected in October were presented on camera one by one, and the authors' comments and what the organizers noticed were shared. Thank you for the 34 people who participated time. If the individual who created the card was among the online participants, they would be asked questions and received comments. It proceeded in an unstructured and friendly manner. At the end, Makoto Yamaguchi, an advisor of the Origami ATC Research Group, gave

us feedback of some cards that caught our attention, closing the session. This time, we uploaded in advance at a web page the photos of the cards, and we shared the title, the author of the card, and the name and creator of the origami model used.

Since the cards were presented in the display order, I think we were able to prevent oversights and missing anyone.

This was the third online card presentation event hosted by the Origami ATC Research Group, and it feels it is becoming standardized. Since most of the event participants are not card creators, we would like to prepare a mechanism for those people to have fun next time. Also, as it was announced that the card participants would be presented at the convention, the number of participants was lower than usual. So I would like to think about the benefits of being involved in the convention. Please join us next time.

<Gather Town>

By Gen Hagiwara

We introduced "Gather.Town" (hereafter referred to as "Gather") as a place for convention participants to interact. I was involved in the operation of Gather is an online service that looks like a retro game, allowing avatars to move around a set venue, and when users get close to each other, like in real life, it is possible to make voice or video connections. Its use in the overseas origami conventions was already mature, and the Kyushu convention was the first in Japan to adopt it. In addition to me, Taiga Yamamoto took over the idea of conceptualizing the game, and Marcio Noguchi, who used Gather at OUSA and was familiar with it, also cooperated.

Regarding the usage status during the exhibition, there were always about 10 people (excluding late nights and early mornings), and over 20 people at peak times. There is a limit of 25 people who can enter the room at the same time without paying, so I was wondering what would happen, but it was just within the limit (there was a moment when the number of people reached 25, but fortunately there was a vacancy soon). It was mainly used for conversations between acquaintances, but it could also be used to ask questions to the presenters of doctoral research, to share their impressions at the same time while participating in a class via Zoom, and to create models from classes that they were unable to participate in. I was able to see the state of having other people teach me. It was a scene reminiscent of a convention at an actual venue, and I don't think this could have been achieved with just Zoom. Also, the younger generation got used to it quickly and seemed to enjoy moving their avatars freely. However, I noticed that there were

occasional ways of playing that caused trouble for other users, so I felt that it was necessary to clarify the rules and manners from the next time onwards. In addition, I think that the fact that I was the only resident staff is an improvement point.

It was a fun game, thanks to the cooperation of Yamamoto, whose main job is mystery production, it turned out to be a full-fledged mystery solving. Due to the high difficulty level, only 27 people have cleared the game. 85% of those who completed the questionnaire answered that it was difficult or very difficult, indicating the high degree of complexity. However, the satisfaction level was high, and everyone answered that they enjoyed it. I would like to present one of the mysteries that was said to be particularly difficult. Put the letters in the circles next to the two borders and derive "?". How was it?

All the mysteries, including this one, can only be solved by convention attendees based on knowledge of origami, and although they were outside the usual mystery-solving theory, that's what made it so interesting. Convention registrants will be able to access it until February 28th, so if you haven't entered yet, or if you haven't cleared the puzzle yet, give it try now.

Impressions

By Koji Ouchi

This time, I made a video presentation introducing my doctoral research and gave a class. At Gather.Town, I received comments on how to fold the models for the class, which led to improvement of the folding sequence, and I felt the importance of interacting with my colleagues. We received many questions and feedback about the research, which made us feel rewarded and increased our expectations for the development of origami research. I sincerely hope that the in-person event will resume so that more lively communication will be possible.

By Ako Kawasaki

Although it was online, the convention was held again this year, and I would like to express my heartfelt gratitude to everyone involved in the operation. I was a class teacher and moderator. I was a little nervous before the class whether it would go well or not, but it ended without incident, and I am happy that I was able to be of some help. There are many places where we can enjoy the benefits of online conventions, but it would be great if we could hold a face-to-face convention next year! I want to do origami in the same space as everyone soon.

By Hajime Kikuta

This was the third online event, and there were plenty of plans and ingenuity to make origami more enjoyable, more intense, and more comfortable. I was able to enjoy a fulfilling and happy period. Personally, I oversaw the moderation as last year, and I am grateful that I was able to share and experience the precious time unique to online through a preliminary meeting with the instructor when attending the class. Considering the circumstances of the covid pandemic, online is convenient beyond the time and place that it takes to move, but it is still an advantage of holding it on-site. It's sad to not be able to enjoy "cultivating bonds with friends". In the future, we would like to explore a hybrid of local and online events that take advantage of the advantages of each.

By Miwako Suzuki

There were four class tracks running simultaneously, so the number of people per classroom was small, and the atmosphere of the class was friendly and enjoyable. The presentations by the doctors were summarized in a short and easy-to-understand manner, and it was a very valuable opportunity. Solving the riddles of Gather.town was so immersive that I was almost late for the next class. The problems were all related to origami, so it was a lot of fun, and the sense of accomplishment when I solved them was amazing!

By Eitaro Shiomi

When practicing for conventions, it was difficult to come up with an easy-to-understand folding sequence, so I changed the folding method each time I practiced. When my friend accompanied me to practice for the Seal class, I didn't have enough time, so I changed the folding method drastically. In the end, the actual folding sequence was completely different from the first. Everyone was able to fold it to the end, but that friend said, "I was surprised that the folding method was completely different" (laughs). I wasn't too nervous about the actual performance, probably because I was a lecturer at a regular meeting before. And that was good.

List of Figures:

Figure 1 – Image of Mystery A Problem

(Page 16) From the Bookshelves of the JOAS Library

Book #87: "AKIRA YOSHIZAWA: Japan's Greatest Origami Master"

Preface by KIYO YOSHIZAWA, Introduction by ROBERT J. LANG

Article by Eiko Matsuura

Eiko Matsuura = Born in 1972. I am thinking about origami popularization activities from the perspective of social education and adult education. Last year was "empty", so, from this year onwards, I will do my best in both work and research.

<Specifications of the book>

This book is an English translation of Akira Yoshizawa Origami d'exception (French) and AKIRA YOSHIZAWA L'artedeli' origami (Italian) published in 2015 by the Swiss publisher Nuinui, which was published in 2016 by Tuttle Publishing Company (Fig. 1). Similarly, Germany's TOPP (Frech Verlag's label) also published "AKIRA YOSHIZAWA: ORIGAMIKUNST (German)" in 2016 (Fig. 2), but there is no Japanese version.

The book is a 238 x 302 x 22 mm hardcover (according to the author's research) with a total of 192 pages in four full colors, giving it a strong presence. Along with beautiful photographs of his works, this book contains a wealth of information on how to fold Yoshizawa's models.

According to Kiyo Yoshizawa's preface, this book was published in two volumes, "Utukushii Origami: A Collection of Origami Works Created by Akira Yoshizawa" (Kamakura Shobo, 1974) and "Yasashii Origami" (Kamakura Shobo, 1978). It is said that the above origami works and original folding diagrams by Yoshizawa are presented. Based on the titles of the models in the table of contents, we can count 53 ones. But there are some that combine two or more models into one title, we can find 94 models of complete diagrams including variations.

The contents of the book are roughly divided into three parts. At the beginning, essays by Kiyo Yoshizawa, Robert Lang, and Hiroko Ichiyama, and a biography of Akira Yoshizawa, along with various material photographs, are published over 22 pages, followed by Part 1 and Part 2. Part 1 is titled "Creative Origami - Beautiful Origami Art" and contains 125 pages of 74 folding steps. Part 2 is titled "Yasashii Origami" and contains 32 pages of how to fold 19 models.

There is a QR code at the end of the book, so when you scan it, you will be able to jump to Nuinui's YouTube channel and watch the digest version of the VHS "Akira Yoshizawa: God's Dwelling Hand [Origami: Sono Uchu]" released by Kinokuniya in 1997. That video was also released on DVD in 2012 but is extremely difficult to obtain. The 30 minutes has been forcibly shortened to 10 minutes, and there are very few images of the models, but you can get a glimpse of the philosophy Yoshizawa talks about.

<Highlights of content>

As mentioned above, in addition to the abundant folding diagrams and photographs of models, Lang's 6-page essay is also valuable. While talking in detail about his childhood memories of Yoshizawa's works and the episode when he met Yoshizawa, there is also a part he briefly summarized his achievements, saying that Yoshizawa "almost single-handedly established the origami art of the 20th century." In addition, Yoshizawa explains the Cicada, which took more than 23 years to complete, using actual photographs, sketch materials, and crease patterns, and speculates on Yoshizawa's thoughts from episodes at the time. There are parts that touch the hearts of maniacs, and for me, which is the highlight of the book.

The main part of this book is the folding diagram and photo that follows. In Part 1, which is based on "Utsukushii Origami," you can fold representative Yoshizawa works such as "Gorilla no Ko (Gorilla Cub)" (cover photo), "Pheasant" and "Rabbit" (Fig. 3). Also, in Part 2, which is based on "Yasashii Origami", it contains many fairly simple works, which even beginners can fold them according to the folding diagrams, but there are nuances in finishing such as "Kotori" (Fig. 4) and "Ohinasama". It is a lineup that makes you want to fold it again and again to improve your skills.

In this book, Yoshizawa's hand-drawn original drawings are published as they are (with coloring). In his essay, Dr. Lang wrote that Yoshizawa "developed the folding diagram symbols such as arrows, dotted lines, and dashed lines that are commonly used today, and they were very clear and persuasive." And, since he evaluates the expression of Yoshizawa's folding diagram method, it would be nice to taste the folding diagram while comparing it with that part.

In addition, almost all the photographs of the works in this book have been retaken by photographer Kazuo Hamada. The vivid, dynamic, and delicate photographs of Yoshizawa's original works are revived in large-format documents, and the book is worthwhile as a collection of photographs of his works.

<Additional information on originals and originals>

By the way, I mentioned earlier that one of the originals, "Yasashii Origami" (Fig. 5), was published in 1978, but this first edition was published in 1971 by Fröbel-kan. After that, it was republished by Kamakura Shobo in 1978. I don't know why the Kamakura Shobo version is the base.

According to Makoto Shiokawa, Executive Director of the International Origami Research Society, this book was originally a three-volume series. All three books were published at Fröbel-kan, "Fun Origami" in 1963, "Origami Picture Book" in 1964, and finally "Yasashii

Origami", all three of which were later reprinted by Kamakura Shobo. After that, only "Yasashii Origami" was reprinted by New Science (2005) and is still available today. Another volume, Utsukushii Origami (Fig. 6), which was reprinted by New Science after being published by Kamakura Shobo, also appears to be available.

The original Nuinui version is 240 pages in total, while the TOPP version has 224 pages and the Tuttle version has 192 pages. I noticed this after the interview, and when I asked Shiokawa, he confirmed it by comparing the Nuinui version and the Tuttle version. As a result, there was no change in the treatment of photos or articles, and the content was exactly the same. The difference is that Nuinui uses one page for the title of the folding diagram, while Tuttle uses half a page. According to Mr. Shiokawa, who was working as an editor at a publishing company, Tuttle uses the page more efficiently. The 48-page difference doesn't seem to matter.

<Regarding the lack of a Japanese version>

Why there is no Japanese version of this wonderful collection of works, which can be called an origami art book, even though it has been published in four languages around the world? Since Shiokawa does not know about this, it is only a matter of imagination, but I can speculate as below.

First, the main content of the book is a collection of existing books that have already been published in Japan. In addition, as factors we might think, it is a large book that does not fit in a Japanese house (?), and it is relatively expensive at 3,850 yen (Tuttle official site) and 3,200 yen at Rakuten Books (tax included and as of January 1, 2023). Considering the contents, it's cheap.

However, given that origami is an art and Japanese culture that is proud of the world, it seems that it is necessary to first create a climate in which the Japanese version of this book can be published. To do that, it is necessary to steadily show the willingness of the market to buy, so if you consider yourself a maniac who still has space on your bookshelf, please keep one at hand.

<Acknowledgment>

I would like to express my gratitude to Makoto Shiokawa of the International Origami Research Society for his kind permission to photograph and interview the materials in writing this article.

List of figures:

Figure 1: Cover of the English version

Figure 2: From Left to Right, Cover of the French, Italian and German versions (Collection of Akira Yoshizawa

Origami Gallery)

Figure 3: Rabbit (Page 119)

Figure 4: "Kotori" (Page 162)

Figure 5: First edition "Yasashii Origami" acquired by Akira Yoshizawa Origami Gallery

Figure 6: Kamakura Shobo version of "Utsukushii (Beautiful) Origami" Collection of the Japan Origami Academic Society

(Page 18) Here We Are, THE ORRRIGAMI TANTEIDAN

This section will explore a wide range of topics related to origami and introduce you to some little interesting trivia facts. We also accept questions, and additional information from readers. Please, feel free contact us via email webman@origami.gr.jp.

#63 – Inns Where You Can Meet Origami By Jun Maekawa

Jun Maekawa = Board member of Japan Origami Academic Society. In Ginga Park, near the Nobeyama Radio Observatory where I work, there is a monument inscribed with Bokusui Wakayama's poem.

Trivia 1: Origami enthusiasts have a box to store their creations.

Trivia 2: There was a sign "Maekawa Takumi Force" that folds according to the crease pattern.

There are always origami models that change with the seasons, in the storefront of a cosmetics store in a certain shopping mall in Yamanashi Prefecture. They are not too elaborate works, but they are carefully made and create a friendly atmosphere in the store. Last fall, among the decorations, I saw a "Squirrel" from an old book of mine. It was a hard-to-find book, and I felt nostalgic for it, so I tried to talk, but I stopped, knowing that I would be seen just as a suspicious person.

Origami models are displayed in various places. In an era when the Internet didn't exist yet, or hadn't become so popular, it was almost impossible to know where and how people enjoyed their works even if they published the models in books. Now, when you search, you will find many hits such as photos, but they do not reflect everything in the world. Even now, someone's work is someone's favorite, folded repeatedly, and decorated modestly. Perhaps that is one aspect of the origami culture.

What I'm going to present this time is a story that only those know can appreciate. I knew I could meet it if I went, so I went to meet it, in an unexpected place, or, after all, encountering origami in a certain place, isn't that the reason for everyone who loves origami?

◇ Somewhere Father's Voice can be heard

First, let's talk about an inn called "Hishiya Torazo" in Shibu Onsen, Nagano Prefecture. I had heard for some time that the owner of this inn loved origami, so much so that he built an origami exhibition room next to the inn. But, thinking about going, it was put on hold. Over the past three years, the world was hit by the pandemic, and it has been difficult to travel for days, but as the ban has almost lifted, so I took the plunge.

Shibu Onsen is an old-fashioned hot spring town where travelers in "yukata" wear "geta" (wooden clogs), and the nearby "Jigokudani" is a place popular with tourists from overseas as you can see wild Japanese monkeys soaking in the hot springs. During this visit, the guests staying at the same hotel were a family from Malaysia and a young man from Australia. Except during the pandemic period, nearly 90% of the customers were from overseas in winter. They want to experience something unique in Japan, so they are also interested in origami. Works were also displayed beside the counter of Hishiya, and simple models such as Shuriken were placed under the sign "Take free."

"However, the visit was a little late." Torazo, the 12th generation owner of "Hishiya", who decorated the origami, died in January of last year at the age of 88, and the exhibition room was closed. I imagined that he had some regrets because he passed away while the future of the travel industry was uncertain.

The reason why the 12th generation became interested in origami is that when he went to France to advertise for the 1998 Nagano Olympics, he made origami in his hometown and showed it to people, and realized it was amazing. In the exhibition room specially opened at that time, there are photographs of Makoto and Miyako Yamaguchi, Tomoko Fuse and Taro Toriumi, David and Asha Brill, who stayed at the Inn in 2007, and a photograph with Yoshizawa was displayed proudly. It was taken in 1999 at Akira Yoshizawa's 80th anniversary creative origami exhibition. There were all 49 types of "Thousand Crane Orikata", and the bookshelf was lined with "Origami Tanteidan Collection". And it is said that the thing that the 12th generation folded the most was my "Beetle" (published in "Viva! Origami"). Also an "actual folding diagram" were displayed showing the folding process, and several giant beetles folded from whole paper.

After the 12th generation passed away, the 13th generation Torazo oversaw everything, but in fact, the 13th generation also liked origami. When I hear the word "13th generation", I think only of Kabuki actors or Goemon Ishikawa of "Lupin the Third", but "Hishiya" is actually an inn that has been around for about 400 years, and Shozan Sakuma, a great man at the end of

the Tokugawa shogunate, comes to mind. Famous for his long stay, it is a historic inn that is casually decorated with his calligraphy. The building itself was rebuilt in the Taisho era, and the stained glass here and there creates a good atmosphere. Most of the stained glass has a diamond-shaped design, which is related to the name of the store and the family crest, "Matsukawabishi". One of them seemed to be in the middle of the process of folding paper cranes, and I thought it was an origami inn, but this must be a coincidence.

It is said that the thirteenth generation folded a lot the "Devil" that I created. I'm sorry that it's becoming like I'm boasting. However, it is said that Fumiaki Kawahata's "Yoda" is the one that the 13th often folds recently. It seems that it is popular with overseas enthusiasts. It can be folded in about 20 minutes, so I have completely mastered the folding method. "Master Yoda". I must have folded something. It is a "Jedi" review". By the way, the diagram of this model in "Origami Works of Fumiaki Kawahata", but it was first published in "The 3rd Origami Tanteidan Convention Origami Collection" (1997). It is known for the description of the symbol (?) of a portrait of a person with a mustache called "Maekawa-Takumi Force". So, am I bragging again?

When he brought out a box full of folded models, I was deeply convinced, "Oh, this person really likes origami. I can't throw away what was folded." In addition to origami, the 13th generation was quite a hobbyist, good at illustration, and was once passionate about wool felt work (for some reason, only frogs). "Currently, the exhibition room is closed because it is difficult to manage, but when I retire, I would like to spend a day here folding origami" said the thirteenth generation.

I stayed in a room named "Bokusui". There is also a literary monument of the poet Bokusui Wakayama near the inn. The hanging scroll of a poem about wild cherry blossoms in Bokusui's room is also about him who traveled a lot in his later years, so it may be the real work. When Bokusui returned to his hometown after receiving news of his father's critical condition, he composed the following poem:

"Izu kuni ka chichi no koe kiko yuko no furuki wo kinaru ie no aki no yu fu be ni" by Bokusui

(Somewhere, my father's voice can be heard in the old big house's autumn)

◇ I miss everyone I know

I would also like to present another origami inn in Nagano Prefecture. It is Kanakuma Onsen "Asukaso" in Yasaka, Omachi City. A lot of modular origami are

displayed in the lobby on the first and second floors of this inn. Those are models by the "Yasaka Origami Enthusiasts Club" where Tomoko Fuse, who lives in Yasaka, was an instructor. Fuse's house is in a grassy mountain village, perfect for the TV program "Potsun to Ikenya" (House alone). Recently, Fuse's neighbors moved to another house in town, so now she lives in the only house in the village with someone living. It is a so-called marginal settlement. The Yasaka Origami Enthusiasts Association was a group that existed in the village that included the settlement. The reason why I wrote "was" is because the main members have died, and that group is now not active.

Unexpectedly, both topics ended up in the story of an elderly person who loved origami. However, perhaps because I am getting older, this loneliness has become a kind of nostalgia, and I can't help but feel that it's a familiar thing.

"Shireru hito mina natsukashiku nari kitaru kono tamayura no ka na shikarikeri" by Bokusui
(I miss everyone I knew for a little while)

List of Figures:

Page 18 Bottom, from left to right: Devil and Yoda next to the "Hishiya" inn reception; Origami legends and 12th generation Torazo; Stained glass reminiscent of the bird base; Torazo the 13th opens the "Secret Box".
Page 19 Bottom Center: Origami of "Asukaso" Inn.

(Page 36) Orisuzi ("Fold Creases") My First (and Later) Contact(s) with Origami By Michiko Kuribayashi

One day when I was busy raising my children, I was drawn to an origami book that I happened to see at the library. I had always believed that origami was passed down from generation to generation, something that someone taught. Awakened by the joy of following unfamiliar origami patterns and holding the completed model up to the light, I felt a sense of accomplishment. When I found an origami diagram (model) that excited me, I enjoyed folding it, looking at it and holding it up.

About 20 years ago, I had the opportunity to talk with Yamaguchi and Okamura at an origami exhibition in Namioka, Aomori Prefecture, and I learned about the "Origami Tanteidan". The table we had together was fun and delicious, and when I got home, I happily folded the big fried shrimp I ate and decorated it. After that, I got into a convention held once a year, three days full of origami, and days spent looking forward to social gatherings. To have friends with whom I can enjoy and share origami, to be overwhelmed by encounters with the many amazing creations of origami artists,

researchers, students, etc., to the academic world that I thought was far away from me. The fact that we are stepping into a place where everything is out of the ordinary, and where you can immerse yourself in that space and get a sense of exhilaration, is a valuable place to be.

Last year and the year before last, I also participated in the online conventions. I listen to the video repeatedly and enjoyed it even though I was exhausted at times. Recently, I've been hooked on the origami of Demon anime characters posted on video sites. Until now, I have mostly folded one piece of paper, but this is made by folding and combining various sizes of paper. Although I had a lot of detailed work and my eyes were tired, I made about 100 models, and it was well received by friends and acquaintances who are not usually interested in origami, and I feel that the base of origami has expanded.

"The relationship that origami gave me is my treasure." Origami is an oasis of the mind. I hope to be able to immerse myself in the heat and realism of that venue again, and I will continue to do my best.

(Page 37) Origami-Zanmai (This Origami and That) Puzzl-ish and Drama-ish By Seiji Nishikawa, JOAS board chair

In this column, I occasionally write about shogi boardgame. Origami and shogi are similar in their puzzle-like aspects, and mathematical elucidation progresses, and the era of computerization of origami design and progress of shogi software overlap. In the world of shogi, humans have completely lost their edge against computer software. As that happened, there is a perception that it won't continue to be interesting, but that's actually not the case. In recent years, situation evaluation using AI judgment has become a new watching tool, and online watching has become more diverse and exciting.

"When you find something similar, it's also important to pay attention to the differences." At first glance, the two are very similar, so that they can be grouped together with Go and Shogi. Go has many more "cases" than shogi, and the contents of the puzzle are completely different. It was thought that it would take a long time for Go software to surpass humans, but it was achieved around the same time. Also, Go, which consists only of black and white stones, is more international than Shogi, which uses Chinese characters. In that sense, origami, which can be expressed with just a piece of paper, is like Go. Counting the number of cases is also a research theme

for origami, but Go and Shogi, which competes to win or lose, and origami, which does not involve winning, differ greatly in how they rely on the correct answer as a puzzle.

Personally, when I think about verbalizing the arts of enthusiasts like the "Origami Tanteidan Magazine", I sometimes vaguely think of shogi watching and playing logs. These war memoirs, which are not academic papers, play an important role in reflecting various histories and human encounters, as well as technical theories. The theme is often a game, and the article quality that is common to watching sports is the background that major media such as newspaper companies have economically supported Shogi and Go for professionals. The 20-year-old great genius Sota Fujii, who was thought to be over 50 years old 30 years ago and no one could surpass him, started on January 8th in a title match challenged by another great genius Yoshiharu Habu. It will surely be told as the best drama.

(Page 38) Crease Pattern Challenge Challenge 143: Naughty Cat By Gen Hagiwara

Created: 2022/12

Paper Size: 35 × 35cm

Height: 16cm

Not only the real objects, but also photographs, illustrations, figures, etc. are popular subjects. That's the cat. Many artists have created origami cat, and the number of existing models is probably too numerous to count. It would not be an exaggeration to say that the subject matter has been "exhausted", but what should we do to bring out the novelty? The answer I came up with this time was to grab the root of the neck. Of course, I wasn't aiming for that from the beginning, but at first I was trying to fold a normal cat using the basic shape of a small bird. However, when the head took shape, there was an obstructive internal corner around the neck. Normally, I would fold it in and put it away with my torso, but at this time, I had an epiphany that if I dare to leave this corner as it is, I would be able to pinch by the neck. I remember being excited to be able to make effective use of the unnecessary internal corners that tend to be left over and to expect a unique finish. From there, I explored the finish while keeping in mind how I could bring out the "feeling of resignation" of the caught cat. In addition to weak legs, the angle of the neck and the tail that sticks out from between the legs are also important points.

The crease pattern is seen from the back, the right side is the basic shape, and the left side is the state

where the head, legs, and tail are slightly folded. As a hint, I also prepared a diagram of the state where the left side is folded. It basically consists of 22.5°, but there are parts that I use 123.75° and 11.25°. As mentioned above, I used the bird base, and the standard for each line is almost clear, so I think it's not that difficult to add the lines. The ears are folded out by folding the head part together in a stepped state so that the inner corners are pulled together. Adjust the angle of the neck and create a three-dimensional effect by folding half-open over the base of the head and shoulders and folding in the middle.

Finally, when I posted this model on the social media, I received an unexpected response. I think it has a lot to do with the power of the subject matter, but I was very happy that my work struck a chord with people outside the origami community.

(Page 39) Paper Folders on File File #96 – Kazuki Fukuroi Report by Editorial team

Short bio

Kazuki Fukuroi = Born in 1995, at Nishinomiya City, Hyogo Prefecture. Works as a radiological technologist at a hospital in Kobe. At work, hides the identity from everyone except those who are close to (laughs).

■ What made you start origami?

I think I've been touching it since before I can remember. When I was five years old, I started looking for origami books at libraries and bookstores and tried various genres of origami books.

The books that left a particularly strong impression on me were "New Origami Land Dinosaur" 1~3 (by Fumiaki Kawabata), which I found at a bookstore when I was in the third grade of elementary school. I remember that I couldn't help but wonder how the model fit perfectly with the 22.5° reference lines, even though I started from an obscure diagonal line.

■ When did you start creating?

When I was in the second grade of elementary school.

At the time, I had doubts about the shape of the traditional crane. The traditional crane does not have the elongated legs that are characteristic of the original crane, and I did not think that it captured the characteristics of the crane. I think the trigger for creation was when I started playing with paper, trying to at least fold out just the legs.

Through trial and error, I happened to be able to create a dragon-like shape from the bird base. When

I showed it to my elementary school friends, it was unexpectedly popular, and I was happy to be smitten with it, and I was hooked on creating.

■ **Are there any creators who have influenced you or anyone you like particularly?**

In my creative work, I was strongly influenced by the models of Kaede Nakamura and Hideo Komatsu.

Until I met their models, I thought that the more complex the design, the more impressive it would be as a three-dimensional model, and the more it would receive high praise.

Their work is a bit different, with a style that captures the characteristics of the motifs and transforms them into geometric figures with a perfect balance.

Since then, I have reviewed origami from the basics. By spending more time touching the paper and examining the way the paper moves and the thickness of the paper, I began to make trial and error over and over again until I came up with the "original flavor of origami."

■ **Please let us know if there are any particular points that you are particular about when creating your models, or if there are any points that you are careful about.**

I create under the theme of "subtraction origami".

If the same shape can be created, I feel that the aesthetics is that the number of folds is as small as possible, and the efficiency of paper usage is good.

Even a piece with a simple shape that doesn't need to be folded too much can become a model worthy of appreciation as long as the features are well captured, so I strive to discern the essence of the motif.

In addition, to give the model an "origami-likeness", I also try to incorporate the pleats and geometric patterns into the model as they are without processing them.

In my "Sawfish" creation, I expressed the saw only with jagged color changes. In "Bald Eagle", the wings are expressed only with pleats. Each part has a strong individuality, so I had a hard time blending it into the whole so that it wouldn't stand out.

Recently, I've been creating on the premise of always drawing a folding diagram. Until now, I used to post my unfolded diagrams on social media, but since I started drawing folding diagrams, I've had more opportunities to have my creations folded. Having someone fold a model I created is a great motivation.

■ **Please tell us about your future activity goals.**

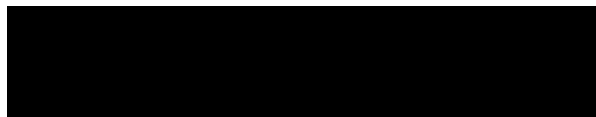
I want to publish my own collection of origami model.

Because it is a creative activity while balancing job, there is a time limit and it is a physical challenge. However, I will do my best to make my dream come true as soon as possible by sticking one more step after work.

List of Figures:

Page 39 left to right: Dalmatian, Bald Eagle, Saw Fish.

◆ **2022 Korea <POTENTIAL> Origami**



Exhibition

Manuscript: Park Jong Woo

Translation: Yoo Tae Yong

From November 9th to November 21st, 2022, we held an origami exhibition entitled <POTENTIAL> in Insadong, Seoul.

The members of 'ORIGAMI PRO', who have worked together for a long time, engaged and planned this exhibition to make origami as an art widely known to the general public. At the New Year's party with the members in January 2022, a concrete plan came up for the first time.

I wanted to emphasize "art" rather than education or play, so I put a lot of effort into the concept of the exhibition, the selection of the theme of the works, and the production of the models. Also, since each of the 8 artists should have created at least 4 models, we decided to use only white paper for consistency. A total of 34 works were exhibited, of which 26 were original models and 8 were creations by other artists.

To be honest, it was the first time an origami exhibition like this had been held in Korea, so I was more worried than expected. However, contrary to such concerns, the total number of visitors exceeded 3,000 in two weeks, and 400 exhibition catalogs and 800 postcards were sold out. Not only did I create the models, but I also purchased and installed the pedestal and lighting, took photographs, and created the catalog on my own.

Also, through this, we were able to confirm the important possibility of origami being recognized as an art by the public.

We will continue our activities to spread awareness of origami both in Korea and abroad. Everyone in the 'ORIGAMI PRO' team is a working adult, so I think it will be difficult every year, but I would like to hold an exhibition like this at least once every two years. I think the next exhibition will be around November 2024, so I think it will be a good place for people who are in Japan to stop by, when traveling. I want Korean and Japanese writers to develop together by stimulating each other through various activities.

◆ Announcement of Tomoko Fuse exhibition and request for sponsorship donations

Tomoko Fuse's exhibition will be held in Nagaoka City, Niigata Prefecture from May 4th to May 13th, 2023. The Japan Origami Academic Society will also contribute as one of the supporting organizations. Fuse has exhibited her models at numerous art exhibitions both in Japan and overseas, but this exhibition will reflect on the history of Fuse's origami activities, and at the same time, make her think about the future of origami as a work of art. We hope it will be a special occasion. Nagaoka City is Fuse's hometown. In holding this exhibition, her schoolmates and others have set up an executive committee and are working hard to prepare and operate. The executive committee is currently seeking sponsorship funds to use for printed materials. If you agree with the purpose, please contribute.

◆ Exhibition Overview

Name: Origami Tomoko Fuse's World OROCHI in Nagaoka

Date: May 4th to May 13th, 2023

Venue: City Hall Plaza Aore Nagaoka (1-4-10 Ote-dori, Nagaoka City, Niigata Prefecture, directly connected to Nagaoka Station)

Contents: Several models by Tomoko Fuse, including large-scale installations

Entrance fee: 500 yen (high school students and above)

Organizer: Tomoko Fuse Origami Exhibition Executive Committee

Support (including planned ones): Nagaoka City Board of Education, Japan Origami Academic Society, Nippon Origami Association, Niigata Nippo, Yomiuri Shimbun Niigata Branch, NST Niigata General Television, BSN Niigata Broadcasting Station, Nagaoka City Cultural Promotion Foundation

Website: <https://origamitennagaoka.themedia.jp>

◆ Sponsorship donation guidelines

Donation amount: corporations/organizations: from 10,000 yen

Individuals: from 1,000 yen

Bank transfer: Daishi Hokuetsu Bank, Yoita Branch, Branch number 410, Checking account number 6303557, Tomoko Fuse Origami Exhibition Executive Committee Representative Kumiko Watanabe

Deadline: March 31st

Remark 1: Please bear the bank transfer fee.

Remark 2: Those who donate 10,000 yen or more will be listed in the admission pamphlet.

Contact: subaru1687@gmail.com

◆ Mino handmade Japanese paper *Japanese paper Letal* By Ako Kawasaki

I would like to present "Washi Letal", which I discovered at the Design Festa in November. Colorful washi paper was arranged in an orderly fashion at the booth, making it particularly gorgeous.

My younger sister works daily as a handmade Japanese paper craftsman in Mino, in a sister unit that handles processing such as coloring the washi paper. The company mainly sells to individuals who do not have large customers and who use Japanese paper for their own activities. They hope to deliver their washi to people who are looking for Japanese washi that they have never met before. For that reason, they are conscious of differentiation such as coloring with their own sense, as cheap as possible. They are particular about the dyeing method, such as dyeing from raw materials, and continue based on trial and error. They want to meet the needs of our customers as much as possible, so they take orders, and take the stance of having them see the finished product and if they like it, they can purchase it. My dream is to send it not only in Japan but also to the world.

You can visit the online shop from the homepage, where all the products are listed. At present, there are no physical stores, so face-to-face sales at large-scale events for creators are the mainstream for people to pick it up and see it. (The next exhibition will be held at Design Festa in May at Tokyo Big Sight.) Detailed plans for activities will be posted on Twitter, Instagram, so please check it up.

"Meanwhile, there's some interesting information." A Japanese paper studio is under construction in Mino City. There, they want to create a space where it will be possible to have meetings with customers and sell over-the-counter products. It is scheduled to start operation after April. I would love to visit it when completed.

"Washi Letal" website: <https://washiletal.wixsite>.

◆ Back number gift campaign

Japan Origami Academic Society will offer, to those who applied for the 33rd volume of Origami Tanteidan Magazine (Issues 193-198) from December 10, 2022 to March 31, 2023, along with the 33rd volume already published, a campaign to present a complete set (6 books) of your choice from the back numbers of 11th to 28th volumes. "Those who have applied" is defined as those who have completed new subscriptions, new members, or renewal procedures after December 10th, and the shipping fee for the first term of the gift will be paid by the society. The aim is to increase the number of new members, and as of January 14, the number of users of the campaign has reached 32, demonstrating its effectiveness. Unfortunately, those who are reading this issue and have completed the subscription procedure for the 33rd period before December 10th are not eligible, but if there are people around you who are interested in subscribing to this magazine, please take this opportunity I would like to invite you to subscribe. Also, we are planning a new campaign for those who have applied for the 34th term (199-204) next term (including renewals), so please look forward to it.

For detailed information, please refer to the back numbers on the website of the Japan Origami Academic Society (JOAS).

<https://origami.jp/register/campaign/>

Fumiaki Kawahata Solo Exhibition March 5th (Sun) - March 12th (Sun)

From March 5th (Sun) to March 12th (Sun), a solo exhibition by Mr. Fumiaki Kawabata, board member of Japan Origami Academic Society (JOAS), will be held at Skyward Asahi (4F Gallery Asahi) in Owariasahi City, Aichi Prefecture. Every year, members of the Tokai Tomo-no-kai local area group exhibit origami models at Owariasahi City's annual summer exhibition.

Looking back on his creative activities so far, the plan would be to exhibit about 150 origami models and about 30 cut-out paper crafts, including past and new creations. Open every day during the exhibition period. It will be open from 10:00 am to 5:00 pm. Free entrance. For inquiries, please contact Skyward Asahi [4517-1 Nagaikeshita, Shiroyama-cho, Owari-Asahi City (0561-52-1850)].

Posted on Facebook

You can see many posts on social media of models

that have been folded. This time, I would like to present a model of a JOAS member, Megumi Hanaoka, who lives in Matsue City, and posted it on Facebook.

Hanaoka seems to like Complex's models, and she often chooses and posts her models from Tanteidan magazines, Tanteidan Annual collections, and other Complex books.

(Picture: #Origami work 186)

It's been four years since I started posting origami on social media. The model entering the fifth year is Shigeru Mitsuda's crested hakama crane.

30cm origami was used because it didn't fold with 15cm origami. It is published in the 27th Origami Tanteidan Convention Origami Book Vol.27.

Editor's Notes

By Makoto Yamaguchi

■ Happy New Year. ■ Thank you for your continued support of JOAS this year. ■ The growth of young creators is remarkable. ■ And the number of people calling themselves origami artists is increasing. ■ Many foreigners call themselves origami artists. ■ And there are many people who aim to become professionals. ■ What do you mean by professional? ■ Most of them seem to aim to make a living with origami. ■ I don't think it will be easy, but increasing the number of such goals will help raise public awareness of origami. ■ It's difficult just to be good at origami. ■ The world of complex origami is getting younger. ■ Sometimes people ask me how to become an origami professional in the future. ■ I can't answer. ■ I think there are many ways to make the most of your talent. ■ I want you to do your best. ■ Professionals in the world of golf include teaching pros.